

夜の空は南から東にかけて、すさまじく赤く、をりをり街道の人家の燃える音はつきりと手に取るやうにきこえた。『もはや戦争が始まつてゐるのではないか？』かう誰も彼も思つた。それに、陣營のあるところには、敵も味方も篝火を焼かぬはなく、ところに由つては、雑兵の往來するものも、馬の走つて行くのも、旗の翻つてゐるのも、白晝でもあるかのやうにはつきりと見えた。ことに戌の刻近く、生田の森と並行した山の手に當つて、すさまじき火の手が颯つて、それが西へ西へと延びて行くのを見た時には、誰も戦争の始つたことを思はずにはゐられなかつた。

『山の手には敵は廻つた！』

『たしかにさうぢや。あの火はその山路を明るくするためぢや……』

『いや、さうでは御座るまい。山の手は容易に攻め入られるものではない。山も嶮しければ路といふ路もござらぬ。これは山の手から打つてかゝると見せかけて、油断をさせて、濱から押し寄せて來るのでは御座らぬか？』

『いや、さうではあるまい。矢張、馬の足元をあかるくするために、向うの民家に火を放つたので御座らう！』

その火の影は、あるところは赤く、或るところは白く、またあるところはわるく灰色になつて見えてゐるが、その山の向うを通つて行く馬の蹄の音さへそれと微かにきかれるやうな氣がした。垣の角、路

のほとり、殿舎の假屋の前のところなどには、大勢人がかたまつて、頻にそれを仰いでゐた。誰も戦争のすぐ目の前に迫つて來たことを思はずにはゐられなかつた。

柏は懷妊して臨月近くなつてゐる北の方のことを思ふと、氣が氣でなかつた。何故もつと注意深くお伴をしてゐなかつたらうと思つた。陣營に行つたのではあるまい——それよりは海の方へ行つたのではあるまいか。こんな風に心配してそこはかとなく歩いてゐるところに、群集に雜つて、燃え上る火の影の中にそれとはつきり北の方の姿を見た時には、柏は躍り上つて喜んだ。

『北の方では——？』

『お、柏——』

『まア、お目にかゝれてうれしかつた。何うなすつたので御座います——』柏はあまりの嬉しさが胸につかえて、これより他に言葉も出なかつた。

『柏、許してたもれ——』

『何うなすつたので御座います？』

『陣營の方へ行つたのぢや……』

『まア』

『そなたがあとで心配すると思ふたけれど、何うしても、もう一度逢はねば船には行けない氣がした



ので、それで行つたのぢや。許してたもれ——』

『まア』

柏は驚かずにはゐられなかつた。

『それで、殿にお目にかゝられましたか？』

『逢うて参つた……』

『それでもようお逢ひになれましたな？』

一歩行くにすら容易でないその兵共の混雑の中を女の身でわけて行つたことを考へると、柏は北の方の深い戀心を思はずにはゐられなかつた。

『それで殿は？』

暫くしてから柏は訊いた。

『ずつと先きに居られた。山のはざまのやうなところに假屋を拵へて居られた。よう來たと言つて喜んで下された……』

『でも、そのやうなところまでよくお出でになられましたな？』

『いや、別に苦勞はなかつた。初めは兵共が侮りをつたが、越前三位殿のもとにまるるものぢやと申したら、ようわかつて、後には三人も四人もついて行つて呉れた——』

『能登守もをられましたか？』

『あのやうな情知らずはをらなかつた。殿だけぢやつた——。もつと早うもどつて來ようと思つたのなれど——』

『それは好う御座つた——』

『柏！』

北の方は呼びかけて、『もう好い。何も彼も言つて参つた。存分にわかれを告げて参つた。思ひ残すところはな。船へは皆な参つたか？』

『いゝえ、まだ？』

『まだ船へは参らぬとな？』北の方はいくらか訝かしさうに、『帝も、内も……？』

『濱の御座所にゐらせられます……』

『さやうか。それでは、この身がまるつてから、話が變つたのか？ さう慌てゝ船に乗らずともようなつたのか？』

『細かいことはよう存じませねど、まだ敗れもせぬのに、慌てゝ舟にまるるも如何と申すことになつたさうで御座います……』

『それで、他の北の方達は？』



『矢張、濱の御座所に集つてお出で、御座います……』

『能登守の北の方も？』

『さやうで御座います』

『三位殿も心配して、何もさういふ人達と一緒になうても好いから、有盛どのの北の方と一緒にをるやうにと申された……』

『それはいかやうになりとも……。北の方のよろしきやうに——』

しかし落附いて話してゐられるやうところではなかつた。二人は群集に押され押されて、いつか濱の方へと行つた。その時には、今度は今までのとは違つて、生田の森のすぐ傍あたりに火が起つて、すさまじい焰の高く大きく颯つてゐるのを誰も彼も眼にした。

## 二六

越前三位の北の方の頭には、その山のはざ間の陣屋のさまがはつきりと残つた。そこまで保護してついで来て呉れた二三人の兵が、三位どのはそれに居られるといふので、少し下り加減の路を板張のところに行つてそつとそこから覗くと、果してそこに床几に腰を下したまゝ、何事かを深く思ひわづらふやうにして通盛がゐる。北の方は急いでそつちへと二歩三歩歩を進めた。

頭を擧げて此方を見た時の驚いた通盛の顔を今でも北の方ははつきりと思ひ浮べることが出来た。また、そこには通盛の他誰もゐなかつたので、二人はいきなり相寄つて顔を見合せたことを思ひ起した。北の方は小聲でいよいよ船に乗らなければならなくなつたことを話し、船に乗つた上はもはやこの戦のすむまでお目にかゝることが出来ないの、それでわざわざやつて来たことを話した時には、通盛の眼にも涙が滲み出しさうになつて来てゐることを思ひ起した。

しんとした陣營の假屋の中、そこに北の方は長い間ゐる。行つた時は午後の日影がまともに明るくさし込んで来てゐるが次第にその影はなくなつて行つて、後には山の影や樹の影が深くあたりを包んで了つたばかりではなく、山の端の空も暗く暗くなつて行つた。それでもその間、いろいろな侍共がやつて来た。山の方からもどつて来た兵どもの報告などをも通盛は訊いた。向うの山の脈を北の方に指し示して、『あの山のところ、兵が澤山登つて行つてゐるだらう。見えるだらう。あそこから向うには源氏がゐるて出て行かれないと言うのぢや』などと通盛は話した。

『それで、戦はいつから始まるので御座いますか』

かう北の方が訊くと、

『もうすぐじや。今夜にも始るかも知れない……』かう通盛は言つたが、兵どもが灯を持つて來るのを見て、『そなたも、もうもどつた方が好からう？ また此處に弟でも來るとわるいほどに——』



『もう戻ります……』さつきから何遍となくさう思つて居りながら、口へも出して居りながら、いざとなつては、別れて来る氣になれなかつたことを思ひ起した。たうとうそこで通盛と一緒に夕餉を取つたことを思ひ起した。その頃はもはや全く夜で、山を越して赤く見えてゐるその火の影を何遍となく見に行つたことを思ひ起した。たうとう先頭へ出てゐる能登守のところから、ある重大な報告を持つた使者が来たので、通盛もそつちへ出かけて行かなければならなくなつた。

『行かねばならぬほどに……。それでは、あまり強う案じずに……。あまり案じて、體にさはるとわるいほどに……。』

『それでは、あなたもおん身を大切に――』

言ひかけて涙が胸に一杯に溢れ上つて来た。幸ひに灯の影が暗かつた。二人はその涙をそこに來てゐる侍や兵達に見られることから免れた。通盛は二人の兵に命じてかの女を送らせた。

心を鬼にして此方まで出て来たが、生中に振返つたり何かすると、押へに押へた涙が堰を切つたやうに溢れ出して来て、何うにもならなくなるのを恐れて、唯、真直に兵等の導くまゝに此方に下りて来たことを北の方は思起した。それにしても人間は何うして戦争などをしなければならぬのだらう？ かうした悲しい別れをしなければならぬのだらう。昔はこんなことがあらうとは思はなかつたのに――のんきに無邪氣に暮してゐたのに。さう思ふと同時に、押へに押へた涙が瀧津瀨のやうに溢れて来て何

うすることも出来ないの、暫しそこに蹲んで休んでゐたことを思ひ起した。

その時兵等は、山のかげに一面に輝いた明るい火を指さして、

『いよいよ始まるな』

『今度こそ本ものぢや。九郎判官はずつと西へ廻つたさうぢやな』

『濱ではもう戦争があつたといふではないか』

『さうか？』

北の方の蹲んで苦しんでゐるのなどは問題にはならぬといふやうに聲高にこんな話をしてゐたことを思起した。(もはや殿はずつと先きに出られたであらう)北の方はかう思ひながら、柏と一緒に濱の御座所の方へと急いだ。

二七

濱の御座所から濱邊の方へかけて、咽ぶばかりに群集が寄り合つてゐたけれど、誰も眠つたものとはなかつた。その松の根元に一團、かしの岩かげに一團といふやうに、鎧の袖を片敷くものもあれば、烏帽子のまゝに仰向に倒れてゐるものもあるといふ風で、戦はない中に既に敗軍の形がそれとありありと指さされるばかりに見えた。『もう合戦は始つて居るさうぢや……。生田の森あたりはもはや盛



んぢや』かう言つて来るものがあるかと思ふと、『西の手にも源氏の大軍は廻つた……。いよいよそつちでも始つた』かう注進して来るものもあつた。夜中赤く山際を染めてゐた火事の色がほのくくと明るくなりかけたと思ふ頃、今まで静かであつた山の手の方面に人馬の騒ぐ氣勢や、馬の蹄の轟く音や、矢叫びのけた、ましい聲などがきこえて來たが、忽ちその騒ぎは大きくなつて、その方面からも源氏がすさまじく押寄せて來たのがはつきりと飲み込めた。否、漸く物の目もそれとわかる頃には、逸早く假屋にも火をかけられたらしく、怪鳥の翼のやうな黒い烟が、もくもくと晴れた朝の空にすさまじく高く颯るのが見えた。

混雜は更に一層の混雜を加へた。何處にも、かしこにも、あの山のかけにも、此方の山のかけにも、濱の方面にも、播磨街道にも、既に源氏が一面に押寄せて來てゐるといふ恐ろしい噂が——かうしてぐすぐすしてゐては、やがて袋の鼠になつて捕はれの憂目を見ずにはゐられないといふ豫想が、一層あたりの人々の胸をわくわくさせた。今は味方の軍氣に關係があるなどと言つてはゐられなかつた。兎に角海上に浮ばなければならぬと言ふので、朝餉をすら取る暇もなしに、帝をはじめ國母や二位局が、時忠の卿と一緒に、濱の御座所からとところどころに點綴されてある松の木の間をつたつて波打際へと出て行かれた。そこには小さな濱川が一筋海に向つて流れ落ちてゐて、その一部を掘割つたやうなところに小舟が七八隻繋がれてあつたが、二位局も、國母もすべて徒歩で、帝を抱き奉つた乳母を皆なして取巻くや

うにして、そこに繋がれてある小舟へと乗り移つて行くのを誰も目にした。宗盛の大臣の一行もすぐそのあとに續いた。

そこには嚴重に繩が張られて、殿上人ならぬものの、または平家の一族の女房達であらぬもの、濫に入つて來るのを妨げてゐるが、いよいよ帝や國母が海に浮べたといふ噂があちこちにひろがると、さうでなくつてすら、一刻も早く海上に遁れて安全な位置にその身を置きたいと思つてゐる人達が、我も我もと殺到して來て、始めこそその繩を境にさういふ人達の入つて來るのを防ぐことも出來たが、暫く經つた後には、何も彼も滅茶苦茶になつて、唯先に行つたもののみが、力のあるもののみが、押し合ひへし合つてそこに達したもののみが、命懸けでそれに飛乗つたもののみがやつとそれに乗ることが出来るやうな混雜に落ちた。

通盛の北の方と柏とは、しかし幸ひにさうした混雜に陥らない以前にその小舟に乗ることが出來た。それも以前と言つても、さう前ではなかつたが——帝や國母が浮び、時忠や宗盛が浮び、それから平家の一族の人達や女房達が何遍も何遍も浮んだ後になつても、通盛の北の方は未だにあとに心を残して、その戦亂の叫喚の中にその夫を残して行くに忍びないといふやうにして、わくわくと胸を躍らせながら、山の手方面に一層すさまじくひろがりわたつて來てゐる火災の烟に目を離さなかつたが、『早く乗らなければ乗れなくなりますよ』と何遍となく柏に促されてもそれでもまだ乗らうとはしなかつたが、能



登守の北の方がその傍を通りかゝつて、『何をしてゐるらゝ？ 早う、早う乗らぬと、もう乗りたくも乗れなくなる！』と言つてその袖を引張らぬばかりにしたので、やつと思ひ切つて、もはや群集が殺到しかけて來てゐたその小舟の最後の一二隻——一番後のその唯一つ前ぐらゐの小舟に乗つて、辛うじて沖に浮ぶことが出來たのであつた。

沖には御座船を始めとして、大きな船が十隻も十五隻もたぶたぶとして波に揺られて浮んでゐた。ことに、帝の乗つてゐる船には、大きい小さい赤旗が高く掲げられて、それが勢よく海風に靡いてゐるのを誰も眼にした。通盛の北の方の乗り移つた船にも、絶えずばたばたと旗の差物の靡く音が頭の上でしてゐるが、落ち附いてあたりを見廻したのは、それから暫く経つてからのことであつた。かの女はそこに資盛の北の方を見出した。知盛の北の方を見出した。國盛の北の方をも見出した。誰も氣が氣でないといふ風に唯わくわくとしてゐる。『まア、それでもよく早く……』などと國盛の若い美しい北の方は挨拶した。

軍の參謀の方の人達も、運輸の方の人達も、皆なそこに乗つてゐた。かれ等は一生懸命に絶えず陸との連絡を取つてゐた。中でも運輸の方の人達は、ことに忙しさうであつた。かれ等はなるだけ多く異つた濱のところどころに小舟を備へることに骨を折つてゐるのを見受けた。

船には乗つたけれども、その身の安全だけは十分に保證されてゐたけれども、しかも通盛の北の方の

心は、片時も陸の上を離れなかつた。かの女はわくわくしながら絶えず陸の方を眺めた。

何うかして味方が勝つやうに、一度は海の上に浮んでも、再びあの一の谷に戻つて行けるやうにと一心に祈つた願ひも、次第に空頼みになつて行くやうなのを北の方は感じた。かの女は假舎や假殿の焼けて行く焔の益々熾んになつて行くのを眼にした。黒い烟が八分通り一の谷を蔽ひ盡したのを眼にした。矢叫びの聲や馬の蹄の音がさまざまその低地に満ちて、白く颯つた塵埃の中に赤い旗と白い旗との往つたり來たりするのを眼にした。否、そればかりではなかつた。まだ辰の刻を少し出たばかりであるのに、西の手の搦手の方にも火が揚つて、假屋の焼ける烟がさまざま天に沖した。

それを北の方と一緒に見てゐた運輸の方の地下の侍は叫んだ。

『あ、あれでは播磨道ももう通れんやうになつた！』

『もはや、敵はあの方まで廻つたので御座らうか？』

『すつかり圍まれて了うたと見えまするな』

『生田の森の方は？』

かう北の方はつゞいて訊ねた。

『まだあの方がしつかりしてをりまするで、頼りになるので御座るが、何としても西の手が危う御座るな。鴨越を九郎判官が越えて參つたために、あの手が中ほどから二つに割れたと申すで……』



## 『二つに？』

北の方は何とも言はれない心の衝動を受けずにはゐられなかつた。かの女の眼の前には昨日かの女のひとりで辿つて行つた路だの、岩山だの、丘だの、そこらにところどころに出来てゐた陣屋だの、その陣屋に集つてゐた兵士だの、そのずつと先きのところなるたさびしさうに張詰めた通盛の顔などが浮んだ。もはやあそこいらは敵に取られたのであらうか。あの路のあたりは敵の兵に蹂躪されたのであらうか。それにしても殿は——殿は——。かう思つて見てゐる間に、今まで靜かであつた東の濱手の方に、急にすさまじく白い埃塵が颯つて、馬や兵や旗差物の縦横に往つたり來たりするのを眼にするやうになつた。『あ、あそこに源氏が出て來ては、生田の森の手も後を斷たるゝやうになる。困つたことぢや！』そこに見てゐた侍は思はずこんなことを言つて、急いで向うの方へ行つた。

辰の下刻から午の上刻にかけては、関の聲と矢叫びの音と物の焼け落ちる響とが一の谷の周圍にきこえた。いよく合戦はその頂上に達した。道といふ道、丘といふ丘の上には、赤い旗と白い旗とが縦横に交錯して、白いのが進むかと思ふと、また時には赤いのが白いのを烈しく壓迫した。鎧。兜。弓弦を鳴して進んで行くものもあれば、馬を踏留めて近寄つて來る敵を待つてゐるものもある。かと思ふと、誰れもゐないかと思つたところから武者が一騎飛出して、逃れて行く平家の公達を追つた。歩行立のもののは刀と刀を合せ、馬上のものは馬と馬とを寄せた。あるものは折重なり、あるものは組み合ひ、また

あるものは互ひに刺し貫いた。そこでも此處でも大きな聲を擧げて名乗り合ふ氣勢がした。

平家の人達もいつものやうに脆く且つ柔弱ではなかつた。こゝを先途と戦つた。此處をだに落ちて何處に行かうとはする。爾達はその惨めな大宰府落ちを忘れたのか。再びあのやうな辱詬を受けねばならぬほどならば、いつそ此處で潔よく戦つて討死するが増しであることを忘れたのか。戦へ。戦へ。百騎が一騎になるまで戦へ。かうした決心が平家の侍達を其處にも此處にも踏留らせた。あるものは矢を持つてゐる限り射て射盡してさて刀を抜いて敵の陣の中へと跳り込んだ。またあるものは好き侍ごさんなれと馬を寄せて、組んで、もみ合つて、さてその後は鎧と兩馬の間に落ちた。

やうやく路傍に萌え出した青草の上には、首を取られたばかりのあとの胴がすさまじい血汐を漲らしたまゝになつて横はつてゐるのを見かけた。またあるところには打伏になつて倒れてゐる名もない兵どもの傍に、そんなことは少しも知らないといふやうに野梅の花の白く咲いてゐるのを見かけた。

今の間にと言つて走つて行く鎧武者の後からは『そこに見えるのは、平家の名ある公達と見たが、敵に後を見せるのは卑怯で御座る……。この身こそは東の國の中にその人ありと知られたる——』かう言つて武者が一騎、拍車を當て、一目散にその後を追つた。

ことに慘めであつたのは、濱から松原の方へと出て來るあたりであつた。波打際にところどころに置かれてある船といふ船は、落ちて行くもので一杯に満たされ、後にはそれにも乗ることが出來ずに、多



くの平家の公達は自から馬を海の中に乗り入れた。

二八

『越前三位の北の方の乗つてゐらるる船は？』

かう言つて小舟であちこちとさがしてゐるのは、他でもない、それはあの例の見田の時員であつた。それは最早未の刻を過ぎて申の上刻近く、一の谷は已に大部分敵に占領せられ、そこにも此處にも白い旗が立ち、濱邊近くに残つた船もあら方海の上に浮び去つた頃であつた。何んなに口惜く情なく思つたところで、負けて了つたものは何うにもならなかつた。今では唯一人でも多くその一族の重立つたものを船に收容することに骨を折るより他爲方がなかつた。

海の上にもいろいろな報知が傳へられて來てゐた。越中前司盛俊が戦死したことは中でも一番早く、まだ赤旗が白旗を押し返してゐる頃であつたが、それによつて西の手の主將の薩摩守忠度の戦死したことが傳へられ、それから敦盛の最期、業盛の最期、ことに本三位中將が鹽屋附近で生擒にされたといふ報知を受取つた時には、御座船にゐる人達をはじめ、それによつた大きな船の中でも、悲しい涙を流さないものはなかつた。北の方や女房達の中には、打被いて泣伏したのも少くはなかつた。

見田は一人の雑卒に櫓を操らせて、船から船へと漕いで行つた。かれは兜を捨て、大童になつてゐた。その亂れた髪は横顔に明るい夕日がさした。かれはたうとう越前三位の北の方をひとつの大きな船の中に發見した。

『見田！』

船の中に入つて來たその姿を見ただけで、越前三位の北の方の胸はわくわくした。

『見田！ 何う……』

『……』

見田にしてもとみには言葉がその口から出なかつた。

『何うなされた——もしや……？』

北の方の顔は張詰めた表情になつた。

『嘆かれな……嘆かれたとて……殿は、殿は——』

見田の口はどもつた。

『殿は何うなされた？ 早う言つてたもれ！』

『殿は、殿は潔よい討死をなされました！』

『何と——』

北の方は屹となつた。



『山の手が落ちて、何うにもかうにもなくなつたのは、辰の下刻で御座つたが、此身は殿のお伴して、濱の方へと落ちて参りました。殿はもはや遁るべき場所ではない。潔く自害してと頻りに仰せられたのを、やつとおいさめ申して、濱近く出てまゐりました時、そこに敵が七騎ほど追うて参りまして……この身は取つて返して刀を合せましたれど、多勢に無勢、とても叶ふべくも御座りませぬ。殿を討ち奉つたは、近江國の住人佐々木の木村の三郎成綱、武藏國の住人玉井の四郎助景と申すもので御座ります……』

『……………』

北の方はじつと一ところを見詰めたま、何の言葉も出なかつた。

『この身もその場でおん伴仕まつる筈で御座りましたれど……』見田は絶え絶えにつゞけた。『この身が萬一のことがあつた時には、如何ようにしてもその場を遁れ、一伍一什を傳へてたもれ、また行末も何彼とあとを見てつかはせよとかねぐ仰せられましたほどに、やうやうのことに、それを遁れて、お知らせに参つたので御座ります……』

そこに柏が出て來た。北の方はそれを一目見るや否や、今まで押へた涙が堰を切つて流れ出したやうに、『柏、殿は、殿は討死……』と言つて、そこにぐたりと蹲踞つたま、引被いて了つた。

『え？』

黙くともそれは驚かる、報知であつた。柏は何うして好いかわからなかつた。さつき本三位中將の擡にせられたといふことを耳にした時にも、もしやとそれが心配になつたが、しかし生中にそれを口にして、北の方が心配するといけないと思つて、黙つて心の中でその無事で戻つて來らる、ことを祈念してゐるが、その願ひも徒勞になつて了つたのではないか。それも噂ぐらゐるならばまだなぐさむよすがもあるが、現に見田がそれを知らせて來た以上、これほど疑ふべき餘地のないものはないではないか。柏も途方に暮れるより他爲方がなかつた。

そればかりではなかつた。越前三位が戦死されたといふことは、忽ちに船の中に傳つて、そこにゐる北の方達や女房を驚かした。敦盛、業盛、師盛——これではその身だちの殿も何うなつてゐるかかわらなかつた。何處で戦死されてゐるかかわらなかつた。北の方達は皆な深い沈黙に落ちた。

柏は見田に訊いた。

『それで、殿は別に御申残されたことは御座りませぬか？』

『さればで御座る……。その場ではそのやうな暇も何も御座りませぬでしたけれども、かねぐさう仰せられて居られましたゆゑ——』

『それで、殿の首は、その玉井とやらにあけられたので御座るな——』

『さやうで御座る……』



柏にしてもそれ以上聞くことは出来なかつた。柏の頭には、去年の八月一族の京を落ちて来るのを女車で追つて来て、關戸の院のところをやつと追附いて、そこで北の方にも殿にも逢つたことが、その時殿は派手な美しいはら巻を被て金ごしらへの刀を佩いでられたことが、世の中は廣いけれども、並べて見てこれほど似合うた夫妻はあるまいと思つたことが、西國へ落ちて行つた辛い船路のことが、太宰府のことが、左中將のことが、風雨の日に太宰府から山賀へと落ちて行つたことが——いろいろなことが混雑とひとつになつて通つて行つた。(たうとう戦死された……。一の谷は落ちた……。京へ戻つて行く希望は永久に碎かれた……。)かう思つた時には、氣丈な柏すら、體も心も意氣地なく崩折れて、北の方を兎にも角にも慰めねばならぬと知りながら却つてその身が持ちこたへられなくなつたといふやうにそのまゝそこに蹲踞つて了つた。

それを見た北の方達や女房達は、心から同情して寄つて来て何彼と慰めて呉れた。しかしそこは端近であつた。船の人達が絶えず往來した。邪魔にもなれば、噂の種にもなるといふので、北の方達は皆なしてすゝめて、北の方と柏とを奥のその船室の方へと伴れて行つた。

見田は見田で、これからそのことを重立つた人達の乗つてゐる船に報じなければならぬと言つて、再び小舟を操らせて向うの方へと行つた。

それは小さな船室であつた。何方かと言へば船尾の方に近いところで、混雑と女房達のゐるすぐ隣りになつてゐた。そこからは丸い帆柱を隔て、海が見え、海の上に浮んでゐる小舟が見え、遠くに連つてゐる山の影が碧に見えた。さうしてゐる中にも、船は下した大きな碇を中心にして絶えず廻轉した。一の谷の方面が見えたかと思ふと長く連つた濱が見え、紀路の山々が見えたかと思ふと、淡路の山が近くその前に重り合つて見えた。摩耶おろしはすさまじく吹き荒れた。

越前三位の北の方は、引き被いて伏したまゝ、長い間身を起さうとはしなかつた。をりをり歎歎の聲が微かにきこえた。暫くしてやつと身を半ば起して紙を取つて鼻をかんだ時には、眼は全く泣腫されてゐた。その時これも矢張眼を赤くしてゐる柏とちらりと顔を見合したが、何も言はずにまた引被いて伏して了つた。

## 二九

一の谷の戦は既に終つた。平家は全くその位置を源氏にわたして、その一族の大半は海に浮んだ。須磨、鹽屋、明石——この沿岸では、平家はその落武者を收容するために至るところにその小舟を寄せた。追ひ拂はれても追ひ拂はれても呼寄せた。この沿岸で平家の公達は多く戦死した。

それでも海に浮んだ平家の一族は容易にそこを立去らうとはしなかつた。御座船を中心に大きな船が十隻も十五隻も取巻いて、その周圍に織るやうに往來してゐるさまは、未だにその力の残つてゐるのを



示してゐるかのやうに見えた。一の谷は落ちて、四國、山陽、九州はまだその平家の勢力範囲で、船を持つてゐない源氏は、そこまでは出て來ても、それから先きには一步も入つて行くことが出来ないやうに見えた。

摩耶おろしが申の刻あたりから荒れ始めて、夕暮近く海は鼎の沸きかへるやうな光景を呈した。しかもその頃になつても小舟は陸から落武者を乗せて此方へと運んで來る作業をやめなかつた。生田の森の大將であつた知盛が、山の手が破れたためにその後を斷たれ、何うなつたか、戦死したか、それとも何處かに遁れたか、それがはつきりとわからないので、非常に心配されてゐたが、もし知盛卿にすら戦死されては、それこそ平家の運ももはや盡きたと同じであるなどと思はれたが、それがゆくりなく兵庫方面から小舟に乘せられて無事にもどつて來た時には、誰も皆な眉をひらくやうにして喜んでそれを迎へた。

それを聞いて來た柏は、

『知盛どのももどつて來られた……もしやこちらの殿も戦死とは誤りで、もどつて來らるゝやうなことはないか？』

『それならば何のやうにうれしいか知れないが——』

『でも、さう申してをるものが御座りました。まだ、本當のことはわからぬ。越前三位どのだとて、

本當に戦死されたか何うかわからぬ。現に、その見田が見たといふわけではない。また、その他に味方の兵も澤山ついでたといふことで御座れば、ひよつくり戻つて來られないものとも限らぬ。能登守どのなどもさう言へばまだもどつて來られぬさうで御座る……』

『それならば嬉しいけれども……』

『まだ、本當にわからんさうで御座ります。知盛卿なども、もう十の八九は駄目と思はれてゐたのださうで御座いますから……。もう少し待つて見ねば——こんなことをあそこで申してゐました……』

『でも、それは望まれぬことぢやらう。何と言つても、見田があゝ言つて知らして來たのであれば——』

『でも、それが現にその侍の目で見たと申すのでは御座らぬほどに——』

『それなら好けれど……』

かう言ひながら、その泣腫した眼は、じつと一の谷の方へと注がれるのであつた。北の方は昨日の今時分あのあたりの陣屋で別れを惜んでゐたことを繰返した。つゞいてあの夫が今は世の中に入るなくなつたとは何うしても思へないやうな氣がした。何處かにかくれて生きてゐるやうな氣がした。知盛どののやうに、または能登守のやうに、何處かにかくれてゐて、ひよつくりそこに顔を出しさうな氣がした。それは、見田がぢかにさういふ風に報知して來たのだから、その方が本當であらうとは思はれるが、そ



れを思ふと冷たい鐵の棒にでも觸れたやうにその身も深く地下に落ち入るやうな心持がしたが、しかし望まれない萬一を何處かで望んでゐないこともないのであつた。かの女はもしや何等かの喜びの消息がそこから傳つて來はせぬかと、鼎の沸くやうに波立つた夕暮の海に縦横に漕ぎ廻つてゐる多くの小舟を眺めた。

三〇

夜深く楫の音が波に響いて聞えた。船は五隻も六隻もつゞいて、その高く欹つた舳だの、あるかなきかの夜風に怪鳥の翼を垂れたやうな帆だの、深く底に沈んで纜かにそれと見えてゐる微かな灯だのが、ぼんやりと霞んだおぼろ夜の海の上を靜かに靜かに動いて行つた。

船の底では、女房や雑仕達も既にあら方眠つたらしく、をりをりやつて來る警護の侍の咳の氣勢ももはやあたりにはきこえなくなつた。かれ等は淡路の沖で數日を費した。出來るだけ味方の落武者を收容することにとめた。しかしいつまでもそこに留つてあらるべきではなかつた。たうとう八島の方へ押渡らなければならぬ時が到着した。

戦死したといふ報知はあつたにしても、何處かに隠れてゐて、ひよつくり戻つて來はせぬかと期待出來ぬことを期待した北の方や親達の上には、更に新しい深い悲哀が來た。かれ等は檣の角、舳の下など

で泣いた。しやくりあける聲や、赤く泣き腫らした眼が船の到るところに満ちた。

船はさうした悲哀を載せて、靜かにおぼろ夜の海の上を動いて行つた。

『柏!』

越前三位の北の方は、かう深く思詰めたやうにして乳母を呼んだ。

『何事か——?』

乳母の柏は此方の檣のところに半ば身を凭せかけて、今日の夕暮からの悲哀を頻りに胸に繰り返してゐるが、そのまゝ立つて其方へと行つた。

『……………?』

北の方は何か言はうとしたが、しかし言ひ後れたといふやうにしてじつと乳母の方を見詰めた。

灯は微に北の方の顔を白く照した。

『柏! そなたにはえらう世話になつた!』

柏は暫しその思詰めたらしい蒼白い北の方の顔を眺めてゐるが、

『何うしてそのやうなことを、今更に……』

『本當に世話になつた!』

『……………?』



『何事も定めぢや。かうなる定めだつたのぢや……』北の方は眼をしばた、くやうにして、

『それにしても一度は京にのぼつてと思つてゐたのに……。あの山賀での難儀や太宰府での困難も一度は昔話にしたいと思つてゐたのに……。しかし、もう終りぢや。わが世の終りぢや……』

『何うしてそのやうなことを？』

柏は半ばはそれを遮り止めるやうに、半ばはそれを慰めるやうに言つた。

『それにしても、かうと知つたならば、何故、あの時、そちに黙つて山の手の陣屋に行つた時に、もつと後の世のことまでも契つては來なかつたか。それが今になつて心残りぢや……。柏、その時、三位どのはかう言はれた。明日の軍は危い。勝てば好いけれど、負ければ、この身も討死と覺悟をせねばならぬ。そのあとに残されて、そちは何うなる！ かういとせめて申されたのであつたが、眼の前の愛着に心がくらんで、さう言はれたことにさへ、深うは思はざつた。殿が死ぬなどとは思ひも寄らざつた。別れても、恙なうまた船に戻つて來て、あの笑顔を見せて下さると思つた。柏や、つい昨日までもさう思つてゐたのぢや……。』北の方は堪らなくなつたといふやうにして打伏したが、再び顔を上げて、『本當に、何故、あの時、後の世を契らざつたか……。あの時、それと契り申して置きさへすれば——』

『何うしてそのやうに悲しいことをのみ……。』

柏は北の方の顔をじつと見て、

『もしや、何か？ ひよんなことにでも思ひ立たれたのでは、よも……。』

『それにしても、殿はこの身の身籠つたのを喜ばれて……。何のやうにか喜ばれて……。』北の方は柏の言葉も耳には留めずに、

『何故早う知らせて呉れなかつたと言はれた。この身はもはや三十にもなつたのに、子供もひとりなうてさびしいと思つてゐた。それはよろこばしいことぢや。出来るならば男子であつて欲しいとさう言はれた。いや、いや、柏……。かうも言はれた。うみ月はいつぢや。陸の上ならばよけれども、船の上でもし生れるやうなことがあつては困る！ と申されたが、それははかない豫言にならうとはいふ事なことやら……。なう、柏、そちはさうは思はぬか……。なればこの身も、身身となるまでは生きながらえて、このお中に生きてゐる殿の片見のためにも生きながらえて、せめてそれなりともたよりに、なぐさめに、この世を生きんと思はぬではなかつたけれど……。』

『……。』

柏もしたゝかに泣きぬれずにはゐられなかつた。

『なう、柏……。さうは思つたれど、さうは思つたれど』涙にさゝえられてよくも言へないので暫し途絶えてゐるが、やがて徐かに顔を擧げて、『さう思つたが、なう柏……。始めて母親になつた身の何條身身となることを願はぬ筈はないけれども——また見はせねど可愛うて、そのためにのみ生きようとも



思うては見たけれども——なう乳母、これから長い間、その忘れ形見を見て泣きくらすことが出来ようか。それよりはいつそ水の底へ！」

「何と？ 仰せらるゝ？」

乳母の柏は屹となつた。

「水の底へ——」

「そのやうなことは——？」

「なう、柏、さうは言はずに、不憫なこの身のためにも、殿のためにも、またはこの世にも出でず死んだあはれな幼いものゝためにも、菩提を弔うて——後生を助けて、なう、柏、書き残した文をも都の母につたへてたもれ……」

「そのやうなことは——」

「柏、それはならぬと申すのか？」

「それは理ないことでは御座らねど……」せぐり來る涙を柏は抑へて、「水の底へ行かれたとて、殿に逢ひ奉ることが出来ると申すにても御座るまじ……。そのやうに早まりたまふことは……なう、おん上、もう一度考へ直して下され。幼い兒のためにも……。折角に生を受けてこの世に出ようとしてゐる兒のためにも……」

「……………」

北の方は何か言はうとしたが、そのまゝ言はずに黙つて了つた。

「なう、思ひとゞまらせて。この身とても、今、おん上の身の上にもしものことがあつては。親の言葉にもそむき、子をも京に残して、折角こゝまでお跡を慕ひて來りし効もなくなつて了ふほどに……。なう、思ひとゞまらせて、いかやうに悲しいことがあつても、この柏はこの身のあらん限り御身のあたりを離れまじきに……」柏は柏で頻りにそれを思ひとゞまらせようとした。

「……………」

「もし、それにしても、思ひとゞまらせたまはぬならば、この身をも偕に偕に水底へ伴はせて……」

「柏——」

「水底へいらせられたとて、あの世は六道四生と申せば、必ず殿に逢はせられるとも思はれませぬ。

それはこの世に生きる悲哀は仰せの通りでは御座れど、それを堪へ忍んで、なう、おん上……」

北の方は同じやうに黙つてゐるけれども、いくらかその顔色の柔かにやさしくなつたのを柏は眼にとめて、

「なう、おん上……」

「……………」



『この柏のためにも、まけて思ひとゞまらせませ。必ず必ずあしきやうには仕るまじきに……。つらい世の中の悲哀、それがいかにしも避け難しとならば、その時にはこの身をも——』

『柏、ようわかつた……』

『わかつて下さいましたか。この乳母の愚かな言葉をもおん取上げて下さいましたか。忝けなう御座る……。その時には偕々に、なう、おん上……』

『……』

『悲しいのは此方ばかりでなく、他にも澤山さういふ北の方も御座ること御座れば——』

暫く経つた後には北の方はさうした決心から全く離れて来たものゝやうに見えた。さつきのつきつめた表情は、今は静かなやさしい顔に變つた。柏はいくらか安心した。船は絶えず動いてゐるらしく、舷に當る波の音が、ザ、ザときこえた。

柏は船の狭間から海を覗いて見て、

『おぼろ夜の月があるのでござるな……。静かな、静かな、茫とした海——』

北の方も徐かに立つて覗いて見て、

『おゝ、銀のやうな月！』

かう言つたが、すぐもとのところに身を戻して、

『それにしても左中將どののこの思はるゝやうな夜ぢやなう！』

『ほんに——』

『あれは秋、今は春……。その違ひこそあれ、その心持は同じぢや。柏、そちはさうは思はぬか？』

『まことに——』

『今こそはじめて左中將どのの心持が本當にわかつたやうな気がする』かう言つた北の方の眼の前には、終夜笛を吹いて、たうとうその水底に沈んで行つた左中將のさまがはつきりとそこに浮んで来るやうな氣がした。

『それにしても、よう死なれた！』

『本當に——』

『左中將どの……左中將どの』北の方は低聲に囁いた。

波の音が、ザ、ザと舷に當るのがきこえた。船は頻りに動いた。

『本當に思ひ止つて下されたか？』柏は念を入れるやうにして言つた。

『もはや疑ふな……』

『それにしも、本當にようきいて下さいました。さつきは何うしようかと思ひました。もし、本當に



この身の言ふことをきいて下されなかつたなら、何うしても水の底へと仰せられたら？」

「さうは言つても、いざとなつては、容易に水の底へは參れぬものぢや。それから申しても、左中將どの心が思ひやられる……」

『ほんにお氣の毒で御座つた——』

『この身にしても、それと思へば、あのやうにはしたなうもてなすのではなかつた……。今でも、この身は悔んでゐる……』

『それにつけても、何といふ惨めさで御座らう。再び八島へ——。折角參つた一の谷をも捨て、八島へ。それもさまざまにすぐれた多くの殿達を失うて——。いや、いや、しかしそれは申すまじ。さういふことは女子の身の知らぬことにして置きませう……』

『ほんに、さうぢや……。そのくらゐに思つてゐるねば、とてもこの悲しい世は過されぬ……。あのやうに思ひの深い左中將どのよう生きて居られなかつたのも道理ぢや……』

『左中將どののことは、もうお考へなさりますな……』

『何ゆゑに——？』

『何ゆゑと申すことも御座らぬど、今の場合、何となう氣にかゝりてなりませぬ』

『柏はまだ疑うてをるのか』

『さういふわけでは御座らぬが、何んとなう氣が、りで——』

『案じないことぢや……』

北の方はさびしく笑つて、『あゝ、もう今は落ちついた。何も案ずることはない。さつきには、この身もこの身でないやうな心地がした……』

『顔色もわるう御座いました』

『矢張、人と申すものは、よう死神がつくと申すが、それはあゝいふ時を指して言ふのがな御座らう。もうさうしてはゐられなくなるのぢやな……。何うしても生きてはゐられぬといふ氣になつて了ふのぢやな。左中將どのも矢張さうであつたので御座らう——？』

『また左中將どの……』

笑ひながらも柏は強く否定するやうにして言つた。

『何うしてさう嫌うのや？』

北の方は笑つて見せた。

『でも……』

『大丈夫だ……。もう安心して居てよい。さつきのやうなことはない。さつきは何うかして居つたのだから……。これからは、事があれば、皆なそなたに相談するほどに——。それにしても、もう夜が更



けた。亥の刻はもうとうに過ぎ去つたらう。もう寝まる方が好くはないか？」  
 『さう致しませう——』

かう言つて乳母の柏は檣と檣との間の狭間にいつものやうに床を竝べて敷いた。あたりは全く静かになつた。波の船に當る音と楫のをりをりギイと鳴る氣勢とがきこえるばかりで、誰も起きてゐるものはなかつた。乳母は枕を當てた後にも、氣遣ひになつたので、『おん上。本當にその時にはこの身に知らせて下され。何うしても、さうせねばならぬとならば、この身も偕に何處までもおん伴して參るべきほどに、本當にそれと知らせて下され……』と低聲で言ふと、北の方は笑ひ顔を此方に向けて、軽く點頭いて見せた。夜は静かに更けた。

## 三二

月は朧ろに低く、向うに連る山の端からかけて、いぶし銀のやうな光ををりをり漫々とした波の上に漂はしたが、それも多くは霞み勝ちで、夢のやうな眺めが静かに茫とあたりを包んだ。

それはもはや丑の下刻に近かつた。ついさつきまで大きな島が黒くその近くに見えてゐるが、それもいつの間にか通り過ぎたと見えて、俄にあたりは廣く、茫々とした海が遠くぼんやりと展開されて、楫のギイと鳴る音も低く聞えた。何處かで潮の鳴る氣勢が微かにした。

不意に、船の狭間のところに一つの影があらはれた。それは白い袴に練緯の二つ衣を着けて濃い髪を長く後に引いてゐる姿であるのが夜目にもそれとさやかに見えた。

その姿は始めは狭間から此方に出て來るのにも躊躇し、此方へと來てからも、誰ぞそこらに居るはせぬかとあたりを見廻し、やうやう舳の方へと出て行つたが、そのまゝ朧に霞んだ海の面に對してじつとそこに立盡した。

それは他でもなかつた。身内にある幼い兒の情愛にすら引かれずにこのまゝ、夫のあとを追はうとする越前三位の北の方であつた。この悲しい無常の世に何の慰め？ このあさましい修羅の巻に何のほどし？ 六道四生の道繁く後生の契確かならねば果して越前三位に逢ふことが出来るか何うか、それははつきりとはしてゐるなくとも、兎に角にもそのあとを追はでは止まじ。(何の、何の悲しきことがあらう、なう、わが兒！ かうして世にも出でずに再びあの世に赴かねばならぬと嘆くな。この母の悲しさを思つてたもれ！ そしてやさしくこの不幸な母親の犠牲となつてたもれ！ なう、わが兒、きゝ、わけたか、わが兒！) かう囁きつゝ、かの女は静かに手を合せた。

山の端に落ちかゝつた月はその銀色のかゝやきを静かに漫々とした波の上へと漂はした。

この時、筑紫の海に沈んだ左中將の姿がちらりとかの女の頭を掠めて通つて行つた。千鳥の聲が頻りにした。



『こら！ 誰かるぬか？』

かう向うの船の楫取のひとりが叫ぶ聲がした。

『何うした——』

『何事ぢや』

此方からも應じた。

『誰だか、今、ひとりその船から女房が海へ飛込んだが——』

『何と言ふ——？』

『女房がな、ひとりそつちの船から飛込んだが——』

眠るともなく眠つた乳母の柏はその聲が耳に入つて、慌て、飛び起きた。かの女はいきなりその側を探つた。しかしそこにはもはや北の方はるなかつた。否、上を被つた夜のものも藻抜けの殻となつてゐるので、『大事！ 大事！』と言つて乳母は舳の方へと走つて行つた。

此方の楫取達も二人、三人まで何事かと起きて來た。

『何事ぢや？』

『越前三位の北の方が——』

『何と？ 越前三位の北の方が身を投げられたと……？』

『それは大事ぢや……』

『早う、早う——早う引上げて——』乳母のけた、ましい金切聲が、深夜の空氣を破つてあたりに響きわたつてきこえた。番をしてゐた侍ばかりでなく、その近くにある資盛の北の方達までも起きて來た。不時の用意にとてそこに繋がれてあつた小舟が第一に下され、つゞいて此方の船からも向うの船からも船頭が四五人、裸になつて海の中に潜り入つたけれども、その飛び込んだところからも既にいくらか船が離れて來てゐるためか、それともおぼろ夜の海は暗く、あたりを捜すにしても、おぼろおぼろと覺束なかつたためか、容易に北の方の所在を見出すことが出来なかつた。

大勢して海をかき廻してゐる氣勢のみが長い間續いた。

やつと棹にかゝつたものがあつて引擧げたのは、それから猶ほ暫く経つたほどのことであつたが、丈なす黒髪からも、練緯の二つ衣からも、白い袴からも、潮水がしとどに垂れ落ちて、ぐたりとした姿はもはや何うしてもこの世のものとは思はれなかつた。やがて、人々は辛うじてそれを舳のところに着て、それ藁火よ、やれ氣附けよと言つて立騒いだが——乳母の柏は氣違ひのやうになつて北の方の名を呼び、その濡れた衣のまゝの身を起して、ぐたりとした顔をおのれの膝に載せ、多くの北の方や女房達



は大勢その周圍に集つて、何とも言へない悲しい心持で、じつとそのさまを見てゐるさまが、あたりのおぼろ夜の薄い月光にそれと微かに繪のやうになつて見えた。

『おん上、おん上！』

柏は何遍となくその顔を覗き込んでかう叫んで、その身を起さうとしても、その首はすぐぐつたりとなつた。とても再生は望まれないといふことが次第にあたりになつて行つた。否、あたりを取巻いてゐる人達の心も次第に暗くなつて行つた。誰とて身をつまされぬものはなかつた。歎歎がそこにも此處にも起つた。

遠くから藁火でそれをあたゝめてゐた一人の侍は、その傍にゐる柏に言つた。

『何うも望みはござらぬな！』

『……………』

歎歎ばかりではなく、中には打被いて伏したのもあつた。

『それにしても、何うしてこの身を。あれほど申上げて置きましたのに。この身も一緒にお伴れ申して下さるやうにとあれほど堅く申し上げて置きましたのに——なう、おん上！』

柏は生きてゐるものにも言ふやうに、屍を動かさやうにして、

『親をも子をもすて、此處までついて参りましたのに。何うして？ 何うしてこの身を殘して行か

れたので御座りまするか。あれほど申しましたのに……………。その時はとおん契り申上げたに……………。おん上、おん上、一言、何とか一言仰しやつて下さりませ！』何うにもならないものであるのは知つて居ながら、乳母の柏はかうかき口説いて、その蒼腿めた北の方の顔の上にぼろぼろと涙を落した。

誰も何も言ふものはなかつた。唯、歎歎の音のみがそこ、に聞えた。

そこにやつて來たのは、この船に乗つてゐる公卿をはじめ、教盛、行盛などといふ人達であつた。かれ等は船の中の何となく騒がしいのを何事かと思ひながら、まさかはそのやうなことは思ひもかけずに、急いで此方へとやつて來たのであつたが、それと知ると、誰も心を動かさないものはないといふやうに、じつとそこに立ち盡した。誰の胸にも美しかつた小宰相のその昔のことが浮んだ。

教盛は頭を掉つた。深い感慨がその胸をついて來た。

『これも悲しい世の習ひとは言へようか。これも皆なこの身等が腑甲斐なう合戦に負けた悲しみでは御座らぬか。平家が強うござつたら——もとの小松殿にてもをはしたら——？』

『言ふな、言ふな……………』

行盛は遮つたがすぐ言葉をついで、『それにしても越前三位どのはさぞ本望でがな御座らう。かうした心悲しい妻を持つて……………。なう、かうした妻を持つた男は仕合せぢや……………。嘆くことは御座らぬ。何うせ、誰とて同じ道に參らぬものはないのでは御座らぬか』かう言つたが、その聲は歎歎の満ちた舟の中



に大きく強く響きわたつてきこえた。

誰もいつまでさうしてゐるわけにも行かなかつた。またいくら名残が惜しいからと言つて、さうした望みのない屍をいつまでもそこに留めて置くことも出来なかつた。爲すべきことは爲なければならぬのがこの世のつとめである。八島まで持つて行つて葬るよりは、むしろこの漫々としたおぼろ夜の海をその選ばれた墓にするが好いといふので、曾て一度寺にゐたことのある快然といふ僧が、かたばかりの經をその前で讀むことになつたが、いつかそれも濟んで、いざ海へといふ時になつて、もしや再び浮び上がるやうなことがあつてはと、故越前三位の著背長の鎧の一領の残されてあつたのがそのまゝその重石につけられることとなつた。誰れも皆な聲を立て、泣いた。

## 道綱の母



## 道網の母

—

吳葉は瓜の出来る川ぞひの狛の里から、十の時に出て来て、それからずつと長く兵衛佐の家に仕へた。そこには娘達が多かつたが、中でも三番目の寵子とは仲が好くつて、主従の區別はあつても、しん身に劣らぬほどの心を互ひに取りかはした。後には寵子のためにつけられた侍女のやうになつて了つた。

かの女にはいろいろなことが思ひ出される。まだ来たばかりで、朝に夕に故郷の母のことを思つて打しをれてゐると、そこにその時分丁度十三四で、年のわりに聡明で歌を詠むことが上手で、多い同胞の中ではことに器量の好い寵子がそつと寄つて来て、「お前、泣いてゐるの……。何うしたのさ……。母者がこひしいの……。もつともだとは思ふけども、あまり考へると體をわるくするからね、あまり考へない方が好いよ。それとも誰かいぢめたか何うかしたの！ あの子姉さんが意地わるか何かをしたんぢや



ない？」その時吳葉は俄かに頭を振つたことを今でもはつきりと覚えてゐる。それから寵子のやさしい心持がかの女の體中に染みわたつて、たよる人はこの君ばかりといふ風に益々しん身になつて行つたことを覚えてゐる。

寵子と吳葉とはその時分よくこんな話をした。

『お前の國に行つて見たいね……。大きな川があるんだツてね』

『え、え、それは大きな河……。鴨川のやうなあんな小さな川ぢやない。もつと大きい、大きい、大きい帆がいくつも通る……。舵の音が夜中でもきこえる。それはそれは大きな河……。それに、河原の畠には瓜が澤山出来てゐるんですから……。』

『もつと大きくなつたら、二人きりで行かうね。二人きりで……。仲姉さんとも誰とも一緒でなしに……。そしてお前の母や姉妹とも逢はうね。そしてその次手に、昔の奈良の都にも行つて見ようではないか！』

『さういふことが出来たら、それこそ何んなに嬉しいことか……。』

吳葉はさうした話の出る度毎にいつも雲の白く山の青い故郷のことを頭に浮べた。

それは西洞院の二條を少し下つたところにある邸——兵衛佐ぐらゐるの人の住んでゐる家であるから、さう大してひろくも大きくもなかつたけれども、それでも築土が長く取廻してあつて、栗や柿の樹など

がその上から見えて、秋は赤い木の實が葉の落ちたあとの枝に鈴生に着いてゐるのを路行く人はよく眺めて通つて行つた。それからちよつと出ると、そこはもう西洞院の大通りで、馬車、さき追ふ人の聲に雜つて下司どもの罵り騒ぐ聲や、行膝を着けた男や、調度掛をつれた騎馬の侍や、つぼ装束をした女達の通つて行くのがそれと手に取るやうに展げられて見えた。吳葉は幼いころ、ものの使ひに行つた歸りなどに、一の殿のすさまじく仰々しい行列に逢つて、何うすることも出来ずに、片側の塀にびたりとその小さき身を寄せてある期間じつとしてゐたりしたことを今でもをりをり思ひ起した。そしてそれを真直に北に行くと、大宮の築土に突當つて、そこには大きな門があつて、直垂姿や騎馬姿の絶えず出入するのを怖いものでも見るやうな心持でじつと眺めたことを思ひ起した。

兵衛佐の邸はさう綺麗に掃除されてはゐなかつたけれども、それでもかなりに廣く、竹藪があつたり、池があつたり、その池には家鴨が放たれてあつたり、厨を出たところには、溝の中に夏は杜若が色濃く鮮かに咲いてゐたりなどしたのをはつきりと覚えてゐる。……。それにしてもかの女が十三から十五ぐらゐるまでの間に、寵子の美しくなつたことは！ 指は白魚を並べたやうに、肌は白く透き徹るばかりに、家の内から滅多にその姿をあらはしたことはなかつたのであるけれども、それでもその美しさはいつか世間に知られて、公達だちの間には喧しく品定めされてゐるといふことが常に吳葉の耳に入つた。

吳葉は主従ではあつたけれども、しん身の同胞か何かのやうに思つてゐる寵子がさういふ風に日増に



美しくなつて行くのを不思議な心持で眺めた。ある時には今までとは全く違つた窈子になつて了つたやうな氣がして、靜かに筆を手に几帳のかけに坐つてゐるのを近寄り難くじつと見守つてゐたことなどもあつた。『お前何してるのさ……そんなところにさつきからぼんやり立つて!』その時だしぬけにかう言はれて、吳葉は何と言つて好いか言葉がなくて困つた。さうかと言つて、『あんまりお美しいから、私、見てゐたのです』とも言へなかつた。もはやその頃には、窈子の二人の姉は皆なそれぞれ然るべきところへと嫁いで行つてゐた。意地のわるい仲の姉は越の國の司のもとに嫁して、かへる山を経て遠く有磯海の方へとつれられて行つてゐた。

二

窈子は半ば笑を含むやうに言つた。

『吳葉までそんなことを言ふの?』

『でも、さう言はずにはゐられませんもの……。行く末は一人の人になるべき人がこの御歌! お父さまだつて、お母さまだつて、お兄さまだつて、お喜びにならないものは一人だつてないのである……。誰だつて目を睨らないものはないのですもの……。』

『……………』

『お返しあそばせ——』

『……………』

窈子は几帳の蔭に身を寄せて、じつとしたまゝ黙つてゐた。何とも言へず美しく神々しく見えた。いつもの窈子——その身が長い間一緒に住んで來た窈子とは何うしても思へない姿がそこにあつた。一ところをじつと見詰めたまゝ、目じろぎもせず窈子は深く考へ込んでゐた。

『本當に……』

『もう少し待つて……』

『でも使のものが待つてをりまするほどに——』

『かへしなどはとても——』

『出來ぬとおつしやいますのですか。行末は一人の人となるべき人で御座るのに……』

『吳葉——』

『お母さまも喜びの涙にひたされてゐられます……お父さまも……お兄さまも……』

『……………』

窈子はじつとしたまゝ、長い間何も言はなかつたことを吳葉は今でもはつきりと覚えてゐる。その時は、窈子のその態度を寧ろ不思議に、何うしてさういふ風に進まないものであらう、これほど目出たい嬉



しいことはないのにと思つたが、今ではさう思つたこの身が浅はかで、窀子の容易に心を起さなかつた心がつきりそれと指さゝれるやうな気がするのであつた。しかしその時には吳葉にはそれはわからなかつた。

何も返しをやつたからとて、それが何う彼うなるといふのではない。そのためすぐ身を任せなければならなくなるといふのではない。二度三度歌の贈答をして、それでいけなければ、いくらでも斷ることが出来る。兎に角、さう言つて歌まで下すつたものを無下にかへし歌もせずにかへすといふわけにも行くまい。かへし歌だけは何うしてもしなければ無禮にあたる。かう父も母も兄も言ふので、たうとう窀子は筆を執つて次の歌を書いた。

語らはん人なき里に

時鳥

かひなかるべき聲な古しそ

全く振向いても見ないやうなつれない歌だ。これでは餘りにひどいではないか。『音にのみきけばかひなし時鳥こと語らはん思ふ心あり』といふ先方の歌に對して餘りに無禮にはあたりはしないか。かう思つて父母は心配し、吳葉は吳葉で、意味もわからずに、共に共に勧めたけれども、窀子はそれ以外には黙つて何も言はなかつた。爲方なしに、そのつれない歌でも、かへし歌をしないよりはする方がまだまし

だといふので、それを文使のものに持たせてやることにした。

その時のことを吳葉は一年後の今になつてありありと思ひ出した。

三

歌の贈答が絶たれようとしてしかも絶たれず、男心の切なる戀に弱い女心が次第にそれとなしに引寄せられて行くさまがそこに細かな美しい巴渦を卷いた。切な男の戀心を女の身として誰が受け容れずにゐられようか。何んなに石の心でもそこにさゝれ波の微かな濃淡の影を湛へずにはゐられるものではあるまい。靜かに靜かに音を立てるせゝらぎ、そのせせらぎにさし添つて來る日の影、何んなに深い樹のかけでも、それがさゝやかな光を反映させずには置かぬやうなところにその戀のまことの心の影が微妙な美しい綾を織つた。

後には窀子はそのかへし歌をすらすらと美しい假名でみちのく紙の懷紙に書いた。

時雨が降り、鹿の鳴く音が野邊に微かにきこえる頃には、もはや窀子は初めて歌をかへした時のやうな心ではなかつた。否、かへつて男から贈つて來る歌を待つやうな心持になつてゐた。

その來ない日には、窀子は何となしに佗びしさうに見えた。庭の中なぞをそこもなしに歩いた。いつもならば決して行つて見ることなどのない崩れた築土の方までも裳を褰けて草をわけて行つた。そ



してその崩れた築土のかげのところに咲いてゐた名も知れない細かい赤い白い花などを手に採つて持つて來たりなどした。何うかすると、白い鞆の上部が朝の草の露に微かに色づけられてゐることなどもあつた。

その頃のことだつた。まだ加茂の冬の祭には間があつたが、鞍馬あたりは紅葉が盛りで、今年もきさいの宮の行啓があるなどと言はれてゐた頃のある日の夕暮——夕暮と言つてもとろ日の光は全く竹むらの梢にも残つてはゐらず、夜の色が薄ぼんやりとあたりに迫つて來てゐた時、吳葉は今まで曾て見たことのない光景のゆくりなくそこに展げられてゐるのを目にしてはつとして立留つた。かの女は今しも厨の方から窀子のゐる西の對屋の方へと二三歩足をすゝめたばかりであるが、見てはならないものを見たやうな氣がしてかの女はじつとそこに立盡した。

かの女の眼に映つたのは他でもなかつた。その築土の崩れのところを誰が見てもそれと點頭かれる狩衣姿の上品な若い男が童姿の供を一人つれて、そこを乗り越えて此方へと入つて來ようとしてゐる形であつた。その人はその向うの物かけに吳葉が立つてゐて、息を殺してそれを見てゐるなどは夢にも知らず、薄暮の空氣があたりを名残なく蔽ひ包んでゐるので、もはや人目にかゝる恐れもないといふやうに、何の躊躇もなしに、その崩れを乗り越して、草原の亂れがましい中をそのまゝ、一步一步西の對屋の東の口へと近寄つて行つた。童姿の供の太刀の薄暮の中に動くのもそれと微かに透いて見えた。

吳葉はじつとして躊躇んでゐた。これはかうなるのが當り前だ！ といふ風にかの女は思つた。かうなるのを邸の人達も皆な望んでゐる。その身とてさう望んでゐた筈である。これでもし縁が結ばれるならば、むしろそれは目出たいことである。さう思ひながらも、何となく胸がドキドキして、何う女君はするだらう。もしかしたら、それを拒むかも知れない。入つて行くのを膠もなく拒むかも知れない……。かう思つて見てゐると、童姿の供はそこにぼんやりとその輪郭を薄暮の空氣の中に色濃く見せてゐるけれども、その男の方の姿は、いつかすひ込まれるやうにその内に消えてなくなつて了つてゐる。否、その少し前にその入口のところから女君が出來たやうである。此方がさう思つてゐるためにさう見えたのかも知れないけれども、たしかにそこにその輪郭が見えたやうな氣がする。しかも耳を聳て、きいてゐても、別に今入つて行つた男を拒むやうな氣勢も何もきこえて來ない。もし何か女君が聲を立てるやうなことがあつたら、すぐ入つて行かうと身構えしてゐても、さうした氣勢は少しもきこえて來ない……。爲方なしに、吳葉もじつとしてそこに躊躇んでゐた。

始めはむしろそれを拒んでゐた歌の贈答がいつの間にかさうでなくなつてゐたのであるのがそれとはつきり吳葉の胸に響いて來た。あたりはしんとしてゐる。竹に當る風すらもない。何處かで下司の酔つて罵つてゐる聲がきこえてゐるが、それが大通であるかそれとも此方の家の内であるかはつきりとわからない。崩れた築土を越して向うに明るく闇に見えてゐる窓がある。次第に夜になれば夜になつたで、



星あかりのやうなものが微かにも地上に及んでると見えて、さつき見た時よりも、童姿の供のそこに待つてゐる輪郭がそれとはつきりするやうになつた。

突然、吳葉の前に立つた一つの黒い影があつた。

『誰ぢや?』

その聲でそれは窈子の兄の攝津介であることがわかつた。

『……………』

『お、吳葉か……。それにしても、このやうなところに何をしてをる?』

手でその高い聲を押へるやうにして、

『殿が……』

『何と……?』吳葉の指さす方向に眼を移しながら、『殿が……あの堀川の殿が……。それはまことか……いつ? もうさつきにか? 今か?』その聲は押し潰されたやうに低くなつた。

攝津介も黙つてじつと立つてゐるが、

『別に窈子はそなたを呼びはせざつたか?』

『別に……』

『それなら、それで好い……。こんなところに立つて居なくとも好い。こつちに來やれ。目出たいこ

とを母者に知らせて喜ばねばならぬ……』

攝津介はそのまゝかの女を伴うて向うに行つて了つたので、吳葉はその後のことを知らなかつた。それから一時ほどして吳葉が入つて行つた時には、窈子はいつものやうに几帳のかげにその身を置いたままで、あたりには誰もゐず、結燈臺の灯が微かに隙間洩る夜風に瞬いてゐるばかりだつた。吳葉は見ぬやうにしてじつと窈子を見詰めた。窈子も眼を下に落したまゝで深い深い物思ひに沈んでゐた。暫くそのまゝで經つた。

最初に窈子は言つた。

『何處に行つてゐたの? お前……?』

しかもその聲は微かで、眼は同じところを見たまゝであつた。

『向うに居りました……』

『……………』窈子は何か言はうとしたが、何う言つて好いかわからないといふやうに黙つて了つた。

『何か御用でしたか?』

『別に……』

かう言つたが、急に、『この身は困つた——』

しかしその表情はそれほど困つたとも見えはしなかつた。



『何うかなさいましたか?』

『……………』

『え?』

『今、思ひもかけぬ客人があつて……』

『客人が?』

吳葉はわざとしらばくれるやうにして言つた。

『困つた、此身は?』

『客人はどなたで御座いましたか?』

『そなたの好きな堀川どの……』

『え!』

吳葉はわざと驚いたやうに見せかけて聲を立てた。

窈子が物思ひに沈んでゐるのは、悲しい心に屬するものではないといふことが次第に吳葉にも飲み込めて來た。同じ性の身の嫉妬に近い心持も起つて來ないことはなかつたのであるが、それも向けやうに由つては、反感にならずにはゐられないやうな質のものであつたが、吳葉はそれをすぐ奉仕の感情の方へと持つて行つてくつ付けて了つた。吳葉は窈子のために喜びの感情と祝賀の感情とを一緒にしたもの

をそこに漲らせた。『それときいたら誰だつて羨ましく思はないものはないでせう。堀川の殿が此處に! あの堀川の殿が。京の姫達でさうした好運に附かれたのは御身ばかり……』かう言ふ風に吳葉はその感情をそこに露骨に打出すやうにして言つた。窈子はじつとしてゐたが、急に堪らなくなつたと言ふやうに、さうした侍女の祝賀の言葉の驟雨の中にも悲しい女の身の悲哀を深く感ぜずにはゐられないといふやうにその顔に衣の袖を押し當て、身もだえして泣いた。吳葉もしたゝかに泣いた。

#### 四

吳葉が始めてその堀川の殿を目にしたのは、それからいくらかも日數も経たないほどのことだつた。かの女はそこに肥えてはゐるけれど下品でない、眼尻の下つた、やさしい眼附をした、鼻の丸味勝な、口の大きな莞爾したその人の顔を見出した。女の好くといふほどの顔ではなかつたけれども——ことに女君の美貌と比べてはとてもしつくり合ひさうにも見えない種類の風采であつたけれども、それでも鷹揚な、靜かな態度の中に何處かに生れついて持つた威が働いてゐて、見ようによつては、好く思はれないこともないほどの器量を持つてゐた。その人はにこにこしながら、他人でないやうにやさしい言葉を吳葉にかけて。そしてその次にやつて來た時には、高價な蒔繪の香奩を手づからそのかづけものにしたりなどした。



美貌では京でも名高く、殿上人の姫達の中にもそれほどの美しさはないとまで言はれ、その上に和歌にすぐれて、萬葉や古今の女の作者達にも一步もひけを取らないとまで言はれた宛子の戀も、他で思つたほど思ひあがつたものではなく、やはり普通の多くの女達と同じやうに靜かに押移つて行くのを人々は見た。やはり女は女だけしかない。何んなに學問があつても、何んなに美しく生れ附いても、また何んなに伶俐で且つ聰明であつても、男と一緒にゐるやうになつては、やはり女だけのことしかない。これは世間がさう思つたばかりでなく、平生常にその傍に侍してゐる吳葉にもさういふ風に見えることを何うすることも出来なかつた。吳葉は次第に女の心が男の方に引寄せられて行くのをまざまざと見た。勿論それは張りも悶えも苦しみも何もしない、わけなくそれに引寄せられて行つたのではなかつた。その中には細かい心の悶えや、その身の若さ美しさの毎日に喪はれて行くことに對する苦しみや、權勢といふものに理由なしに踏みじられて行くのに堪へ難くなやむ心や、時にはその美しさといふことだけをその武器にしてさうした權勢に對抗しようとするほどの心の張を見せたことなどでもないではなかつたが、しかも男にその身を任せた上は、もはや何うにもならず、次第にさうした積極的な心持から離れて来るやうな形になつて行くのを誰も見遁すものはなかつた。宛子の父母の眼にもはつきりとそれが映つた。同胞達も次第に堀川の邸にその身を近づけて行くことの出来るのを喜ぶやうな形になつて行つた。西の對屋が手狭だといふので、堀川の裏のさゝやかな流れに臨んだ世離れた閑靜な邸——それも通り

からもさう大して離れてゐない邸に、その年の師走近く、寒い風が北山から雪を齎して来る頃に移轉して行つたが、その頃には、宛子の心も全く崩折れて、父母のためまたは同胞のため、といふばかりではなしに、男の心にその身を、その心を大方任せるやうになつてゐるのを誰も彼も見つた。

しかし幸福の唯中にその身が浸されてゐるとばかり思はれてゐる時、綾や錦や美しい調度に包まれて、ざれ言雜りの歌の贈答や、軽いお互同士の戀の玩弄や、他の目にも餘るやうな甘たるい抱擁や、身も心も溶けるばかりの繪のやうな光景や、さうしたもののばかりがそのあたりに想像されてゐる時、宛子と吳葉との間にかうした次のやうな對話が取交はされてゐるようなどとは誰も想像することが出来なかつた。

『何うしてそんなことを仰いますのですか？』

『だつて、お前……』

『世間では、あなたほどお仕合せな方はないと申してをります。それは北の方にはおなりあそばされない……。それは圓滿具足した貴い器の一つのきずと申せば疵で御座いますけれど、かしこいあたりでもそれは止むを得ないことでは御座りませぬか。それは生れで御座いますもの。何うにもならないもので御座いますもの……。あなたのお身にしても、關白どのの家にお生れなされさへすれば、北の方にも何にでも心のまゝであらせらるゝでせうけれども……。それはしかし何うにもならないことで御座いま



すもの……。それをいくら仰有られてもむだで御座りはしませぬか』

『だつて、お前、何故この身はひとりを守つてゐるのに、男はさうでなくて好いといふのかえ？』

『そら、またいつものお話がはじまりました——』

吳葉はかう言つて笑ひ出した。

『そんなにこの身の言ふことが可笑しいかしら？ そなただつて、いつかさう言つたではないか。都にゐなくとも好い。都の殿御に見える機會がなくとも好い。田舎の土の中に埋れても、思うた男子と二人だけで住まうて居ればそれで好い。女子はその男子だけを思ひ、その男子はこの身だけを思つて呉れたら、それでこの女としての願ひは足りる。何んなに賤しう暮しても、少しも苦しいとは思はない。かうそなたも言つたことがあるのではないか。何うしてそれが可笑しいのか？』

『そのやうなことを言つたこともあるにはありました』かう言つて吳葉はまた笑つて、『でも、そのやうなことはこの今の世には通りは致しはせぬもの……。この身とて狛のさとにでも住んで居れば、さういふことを考へられるかも知れませぬと、とてもこの都では、そのやうなことは考へられは致しはせぬもの……』

『そなたはそれですましてをられるから仕合せだ……』

窈子はじつと深く悲哀に浸つたやうな心持で言つた。若さに別るゝ悲哀が今しも急に押し寄せて來たらしく、眼には一杯に涙がたまつた。

吳葉は笑つたりなどしたことを悔いるやうに、眞面目な顔をして急にだまつて了つた。窈子の眼からはたうとう涙がこぼれて落ちた。

『……』

『この身の心は誰も知つて呉れるものはない。父君にも、母君にも、この身の心はわからない。それはそなたにしても、父母にしても、この身に幸多かれと祈つて呉れる心はようわかる。それはありがたいと思つてをる。しかし、この心——この身の持つた心は誰にもわからない……』涙を溜めた眼は夜の星でもあるかのやうに美しくかゞやくやうに見えた。

『そのやうなことは——』

『そなただけは知つてゐて呉れると思つてゐるが、やはりそなたにも本當のことはわからなかつたのだ……。女子といふものは何うしてかうもてあそびものになるものやら！ 女子といふものは罪が深うてとても男子とはひとつに言へないものだ。先の世からさうした魂を持つて生れて來たものだ。かうしたことを佛の教はよう言つたが、あれはこの身は本當とは思はなかつた。愚なことを言ひをると思つて居つたのだが、やはりさうでも言はなければならぬのかしらといふことが段々わかつて來た……。この心は何うなるのだらう。何う埋められるのだらう？』急にたまらなくなつたといふやうに窈子は衣



の袖を顔に當てた。

『わるう御座いました。笑うたりなどしてわるう御座いました……』慌て、吳葉は言った。

窈子の歎歎ける聲が夕暮の空氣の中に微かに雜り合つた。

『そなたがわるいのぢやない。そなたがわるいのぢやない……』暫くしてから、やつと思ひ返したといふやうに窈子は衣の袖を顔から離した。

暫くした後では、それとは違つて、今度は公の宮の中のことが主従の間に話されてゐた。きさいの宮のことだの、藤壺の女御のことだの、好者の大納言のことだの、つゞいては目ざましきものにいつも引合に出される唐土の揚貴妃の話などがつぎつぎに出て行つた。后でなくてもさうまで深く帝王の心をつかむことが出来る話などが出た時には、窈子は深く考へずにはゐられなかつた。北の方とか后の宮とか言つても、それにばかり男の愛があつまるものではなくて、何んなはした女との仲にも戀さへ芽ぐめば純な深いものとならない限りでないことがそれからそれへと考へられて來た。古今集の中にある深草に住んでゐる女が、男が女に飽きて、もう來ないつもりで『年を経て住み來しやどをいで、いなばいとど深草野とやなりなん』と捨てりふを言つたのに對して『野とならばうづらとなりて泣きをらん狩りにだにやは君は來ざらん』と言つてその眞心を示したので、男はそれを感じて再びそこに來るやうになつたといふ物語などもそこに繰返された。

『だからそれを言ふのよ。さういふ眞心があれば好いのよ。男にしても、女にしても……。しかし今のこのみだらな世では、とてもさういふ心は男にも女にも望まれない。男はたゞ女をおもちやにしてゐる。美しくさへあれば好いと思つてゐる。いゝえ、その美しいのを玩弄しさへすれば好いと思つてゐる。それに對して、女は唯捨てられたまゝでだまつてゐる。それは女の弱味で爲方がないと思つてゐる。それが悲しいことゝは思はないか……。』こんなことを染々した調子で窈子は言つた。窈子はそのまごころを深く相手の心の中に打込みたいと思つてゐても、その相手が當世の時めき人で、女に對してもさうした深い考へを持つてゐないといふことをこの頃深く感じて來てゐた。身の内に漲りわたるその心を何うしたら好いか、それに窈子は朝に夕に惑つてゐた。

窈子は既にたゞならぬ身になつてゐたのである。

## 五

吳葉にはまだこゝに移つて來ない以前、家の殿が陸奥守に昇進して遠くへ旅立たなければならなくなつた時のさまがありありと眼に映つて見えた。泣いた窈子の顔がそこにある。この身も父君と共に陸奥に下らう。女の身とて行けぬことはよもあるまい。かうして玩弄ものになつてゐるよりは、暫しなりとも都を離れて新しい生活に入る方が何のくらゐ好いかしれない。さうすればあの堀川の殿の心もこの身



を離れて他の女子のもとに行くであらう。窈子はさうとはつきり言ひはしなかつたけれども、唯一の頼みとするその父君に別れることの悲しさ心細さに心が亂れ、またその行末の身のほどなども深く案じられて、それで一層さうした心になつたのであつた。それに、歌まくらに聞いた白河の關や安達の鬼塚や武隈の松なども窈子は見たいと思つたのである。それは神無月の時雨が降る頃で、まだ向うの西の對にゐて、その窈子の居るところからは、裏の垣に烏瓜の赤いのが見えたり、彩ある小鳥の翅が樹の枝がぐれに飛んだり下りたりするのがそれと指さゝれたりするほどだつたが、その窈子の願ひを押しとどめるためには、吳葉ばかりではない父君もまたその堀川の殿も何んなに口を酸くしてなだめたり慰めたりしたか知れないのであつた。『それではお前は、この身がこれまでに思ふてゐるのを何とも思はずに何うしてもそんなに遠くへ行くと言ふのか？ 思ひとゞまつて呉れ！ 何うぞ思ひとゞまつて呉れ！ お前がゐなくなつては、この都も何もあつたものではない、それこそ業平の朝臣のやうに、お前を追うて東下りをせねばならぬほどに、な、これ、さう泣かずに、父君を快よう立たせて呉れ！』かう言つて堀川の殿は几帳のかけに身を隠した女君の衣の袖に何遍その顔を當てたか知れなかつた。

父君も度々來てなだめた。『この身も伴れて行きたいけれど、女の身ではさうもならぬほどに、さう長いことではない、二とせか三とせ！』

窈子はよく涙をこぼした。そのやうな氣の弱いうまれつきではなかつた筈なのに——誰れにも負けてゐることのきらひな質であつたのに——またしても涙に袖を濡らすのを吳葉は眼にした。『だつて、吳葉、この身はこれまで父君をのみ頼りにして來たのに……父君にさへ離れて、この身がひとりこの都にとどまらねばならぬのではないか？ 笑はずに置いてくれ！』かう言つてはまた歎けた。

吳葉にはそれとはつきりとはわからなかつたけれども、今日になつて考へて見れば、巢立の雛鳥が始めてつめた世の空氣に觸れるための悲哀がそこに渦を卷いてゐたのであつた。親の手から背の君へ！その背の君もその身ひとりが縫ることの出来る人ならば、その悲しみもいくらかは慰めることが出来たであらうが、否、幸福に運好く生れ附いた女子ならば、誰でもそのひとりに寄り付き縫りついて、眼と眼とが相合ふやうに、手と手とが相觸れるやうに心と心とがびたりとひとつになつて、むしろ古巢の親達の情は忘れ果つるほどであるのが慣ひであるのに、さうした幸福はとても望むことの出来ないその身のはかなさ！ 縫り附きたいにもその身ひとりで縫り附くことの出来ない悲しさ！ これも生中に人並にすぐれて生れついた身の悲しさではないか。『何うしてこの身は堀川の殿などに見出されたか？』またしても窈子はそれを言出すのであつた。

家の殿の立つて行かる、日——それは昨夜の雨が晴れて、北山も愛宕も大比叡もくつきりと寒い晩秋の空に貼されたやうに見える朝だつた。三條からすつと河原を通つて東山の麓を越して向うへ。逢坂の山。志賀の海。それから向うはずつと長い長い旅路が限なく續いて行つてゐるのだつた。國の司の行列



の群。馬の鞍。下衆の持った雨具や炊事具。名高い寺や社のあるところは其處にやどりを求めて屋根の下に眠ることが出来たけれども、さびしいところに行暮れては、それこそ草の露を結ばねばならぬ長い旅。その支度も出来て、いよいよ別れをつけるべき時が来た。いざとなれば、さすがにわかれかねて、雄々しい家の殿の心もともすれば涙に浸されずにはゐられないのであつた。

窀子の眼の縁は赤く赤くなつてゐた。

『では！』

『御機嫌よく』

かう別れをつけた後でも猶ほかれ等は別れかねた。

『お父さん！』

『窀子！』

かれ等はまたもどつて来ては互ひに涙を流した。

最後に、父親は硯を持つて來させて、みちのく紙にすらすらとわかれの歌を書いて、そしてそれをそこに置いたまゝ、今度こそは思ひ切つたといふやうにして後をも見ずにすたすと對屋の階段を下りて行つた。

窀子はひたと打伏したまゝ、暫くは身を起さうとはしなかつた。

吳葉はその時其處にはゐなかつた。家の殿の旅立を見送るために——内に住んでゐる人達はその取亂したさまを他に見られることをきらつて、階段の下から此方へは出て來なかつたけれど、下司や僕や男達はずつと表まで行つて見送ることが出来たので、それで吳葉も通りまで出て見たのであつたが、見てゐると、多勢の人達に見送られたその一行の人達は、行膝をつけ、藁靴をはき、包みを負つたり雨具を持つたりして、一步一步河原の方へと遠ざかつて行くのであつた。吳葉は橋のほとりまで行つて、その家の殿の馬や雨具の向うに見えなくなるのを見送つて涙組ましい悲しい心持で家の方へと戻つて來た。それには少くともひと時ぐらゐの時間は経つた。それでも窀子は几帳のかけにつつ伏したまゝ、身を起さうとしなかつた。

吳葉は急いで傍に行つた。

辛うじて頭をあげた窀子の顔は涙に泣きぬれてゐた。

『……………？』

吳葉は何と言つて好いかわからなかつた。

『父君は？』あとの言葉は涙に凝えられて窀子の口から出て來なかつた。

『もうお立ちになられました！』

『もはやお立ちに——』



さう言つたまゝ、また引被ぐやうにして泣き伏した。

しかし何んな悲哀でもさういつまでも續いてはるなかつた。暫く経つたあとでは、窈子は眼を赤くしながらも、そこに父親が書いて置いて行つた別れの歌を手に取り上げた。

そこにはかういふ歌が書いてあつた。

君をのみ

頼む旅なる心には

行く末遠く

おもほゆるかな

それはかの女へではなくて、堀川の殿へ寄せたものであるといふことが一目見ただけですぐわかつた。『殿ばかりが頼りだ。我儘な娘ですけども、何うか捨てずに行く末長く眼をかけてやつて下さい』たのみ甲斐もないやうな堀川の殿を頼んで、その可愛い娘をその手に托して、何うか無事であれ幸福であれと祈つてわかれ難い別れをわかれて、ひとり遠く旅立つて行つた父親の心が歴々とそこに指さゝれた。窈子はまた泣かすにはゐられなかつた。

その時誰か來た氣勢がしたと思ふと、妻戸がそつと明いて、狩衣姿の堀川の殿の莞爾した顔がひよつくりそこにあらはれた。

『もう立たれたさうぢやな……』

入つて來て、そこに吳葉の侍してゐるのを目にして、

『もう少し早う來て、見送りたいと思つたが、つい殿上まで行かねばならぬ用事があつておくれた……』少し途切れて、『おゝさうか、吳葉は行つて來たか？ 何處まで？ 河原まで？ それで無事に立たれたか』

『御無事で、御機嫌よく……』吳葉はかしこまつて答へた。

『あ、それは好かつた……。二年や三年ぢき立つて了ふ……。それは別れはつらかつたらうが、なアに、ぢき月日は立つて了ふよ。泣いたのか、それはもつともぢや』かう言つたが、窈子の出した父親の歌を一わたり讀んで見て、『やつぱりお前が心配になると見えるな！』

『白河の關はたうとう見ることが出來ませんでした』

『女子の身ではそれは無理だ……。何しろ遠いところだからな』

『女子だとして行かれないことは御座いませぬのに——』

『でも、よう留つて呉れた……。お父さんも心にかけて行かれたが、お前が留つてさへ呉れば、何も案ずることはないな。な、吳葉』傍にかしこまつてゐる吳葉を振り返つて、『そなたも安心して呉れ！ この身がついてゐるさへすれば何も案ずることはない』



『忝なう……』

吳葉は頭を下けた。

そこにまた人が来た氣勢がしたと思ふと、今度は日の岡のところまで送つて行つた兄の攝津介が行膝のまゝで入つて来た。

殿の來てゐるのを見て、その姿のあまりに無作法なのに氣附いたといふやうに慌て、あとに戻らうとした。すると、

『攝津介か、構はん、構はん……此方へ——』

かう兼家が言ふので、

『でも……』

『構はん、構はん、それにしても早う戻つて來たな。何處まで行つたのぢや……?』

『日の岡まで參りました』

『陵の此方のところか?』

『さやうでござります……』

『無事で立つて行かれたな?』

『勇んで立つて參りました。これも皆殿のお蔭だと申して、よろしく傳へて呉れと申殘して行きました……』

た……』

『それで、關まで見送つて行つたものもあるかな』

『父のもございましたが、それよりも殿！ 介の女房になるものが何處までもおくと申して、壺裝束してついて行きましたが、あれなどはあはれでございました……。何でも、介になる男は、名高い好者で、女子なども澤山あるときいて居りましたが、あゝいふ熱心なものがあるとは思ひませんでした』

『それは面白いな』

兼家は莞爾笑つた。

『何でも、男の方ではこれを好い機會に女と離れるつもりらしいのです……。その女といふのがえらう嫉妬やきで、とても何うにもならないのぢやさうでござります。それに、女の方でも、三年も逢はずに別れてゐては、とても二人の仲が切れずにはるまいといふので、それでその心を見せようといふのださうでござります。行けるところまでは行くと申してをりました。えらいこととござります』

『それはしかしもつともだらうな。惚れた身になれば、三年はおろか一年でも半年でも逢はずにゐては、その仲が疎うなるのが必配になるだらうから……。三年離れてゐて猶思つてゐるといふことは男にも女にもむづかしいことぢや。それは妻ならば別ぢやが……』

『男子には出來ぬかも知れませんが、女には——』



傍から窈子がだしぬけに言った。

堀川の殿は驚いたやうにしてそつちを見たが、笑つて、

『女子には出来るといふのか?』

『その女子の心持もよくわかるではござりませんか?』

『それはようわかる……。氣の毒ぢや。しかし攝津介、戀といふものはさういふものではない。三年も逢はずにゐては、どのやうに思ひ合ふたものでも、たよりなう思ふのは當り前ぢや……。それも雁の便りでも出来ればぢやが、みちのくでは、便りらしい便りも取りかはすことは難かしいでな……』

『さやうでございます』

『それで、關までついて行くのか。まア關までは他について行くものもあらうから、女でも行けるには行けようが、それから先はともむつかしいな……』

『行けるところまで行くと申してをりました……』

『美しい女子かな』

『三十路ほどの女子で、眉目の好い方でござりました……。見てゐてあはれでござりました』

皆は申合せたやうに黙つた。それといふのもその女のことから、遠く旅行く人達の一行のさまがそれとはつきりその前に描かれて見えたからであつた。その國の司の乗つてゐる斑白毛の馬を中心に七八人

ごたごたと渦を巻いてゐるその一行の群が、見馴れた山にも、湖水にも、橋にも、または最後まで別れかねて見送つて來た人達にも別れ別れて、遠く遠くさびしい悲しい野山の旅をして行くさまが、何のこととはない、屏風の繪か何かのやうにかれ等の眼の前に動いて行くのであつた。ことに、窈子の眼にははつきりと……。

## 六

時雨が降つたり木枯が吹いたり、北山に白く雪の來るのが見えたり、鴨河の土手の日あたりに薄や萱がガサコサと靡いたり、加茂の霜月の祭の競馬に棧敷が出來て、きさいの宮が美しい出し車の行列で御參詣になつたり、一の殿とその同胞の殿とが仲がわるくて殿上でもう少しで争ひするところであつたといふ噂があつたりする間を窈子は旅をしてゐる人達の身の上を微かに遠く思ひやるやうな心持で靜かに過ぎした。かの女は東の國にあるといふ、幾日も幾日も行つても盡きない潤い潤い野を頭に浮べたり、その野の果に青く布を敷いたやうに川が流れてゐて、そこに黄色い嘴をした鳥がゐるといふことを想像したり、さうかと思ふと、さうしたさびしい野に野盜がゐて、もしかしてそれがその父親の一行に何か害でも與へはせぬかと心配したり、その間には殿がやつて來て、わざとかの女をからかつて怒らせて見たり、また時にはかねて言つてゐたことが實行されて、その西の對屋から堀川の邸近くのとある家に移



轉して行つたりなどした。その新しい家には母が来て、『これは日あたりの好い家だ……。これでは冬知らずだ』などと言つて、兎にも角にもさういふ家に住まはれる身になつたかの女の幸福を喜んだりした。それにその新居の庭のさまが、その周囲を取廻いた築土の奥の方に竹藪があつてそれに夕日がさびしく當つたりするさまが、やつぱり細かくかの女の心に雜り合つた。

『もう父君は、東の國を通り越したでせうね』

何うかすると、かの女は物思はしさうにかう傍のものに言つたりした。さうかと言つて旅の人達のとばかりを常にその念頭に置いてゐるのでもなかつた。時には世間の噂なども靜かなその胸をかき亂した。何でもその噂では、殿にはいろいろなことがあるらしかつた。女子などもあちこちにあるといふことだ。現にある女のことではその兄上と争つたりしてゐる。しかし來た時に持出してそれをきいて見ても、巧みにそれを打消してしらばくれてゐる。しらばくれないまでも笑つてゐる。そして『誰がゐるたつて、これに越すものはない。このいとしさに越すものはない。大丈夫だよ。そんなに心づかひをしなくとも……。このやさしい美しい心を誰が他所にするものかね……。』かう言つてやさしくかの女の涙をその手で拭いたりなどした。窈子はそれにわけなく引寄せられるといふわけではなかつたけれども、しかもさう言はれて見れば、それを信ぜずにはゐられなかつた。兎に角この身を思つて呉れさへすれば好い。縋り効のないものでさへなければ好い……。逢つた當座はたしかにさう思つて満足してゐるのであ

るけれども、それが不思議にも一日來ず、二日來ず、三日來ないとすると、次第に何處からともなく不安が萌して來て、さう信じてゐたその身の愚さが繰返されると同時に、男の心の頼りなさが深く深く考へられて來るのであつた。その身がさういふ風に感ぜられてゐるだけそれだけ男はやつぱり同じやうに他の女を愛してゐるはしないか。その身に言つたやうなことを他の女に言つてゐるはしないか。あの手がこの身を卷いたやうに他の女を卷いてゐるはしないか。さう思ふと、ゐても立つてもゐられない焦立しさと不安さと物悲しさと心細さとが感じられた。さういふ時には窈子はその身を持つてあつかひでもしたやうに、垣の傍に行つて竹藪に夕日のさし込むのを眺めたり、池に小さな魚の石につくやうになつて微かに動いてゐるのを覗いたり、またその不安と心細さに雜り合つて、もはや白河の關あたりまで行つたであらうと思はれる父親の一行のことをいろいろに思ひ浮べたりなどした。たまには昔の歌の友達——かういふ身の上になつてからは誰も來るものとはなくなつたのに、その友達ばかりは捨てもせずにとづねて來て呉れるのであるが、その時には琴をかき鳴らしたり歌合をしたりしてのどかに一日を遊び暮した。

師走になると、都の街にも寒い風が吹いて、人の足並も凍つた地に響き、夜は店を明けて灯をつけてゐる家などはなかつた。その十日にかの女は親しい僧のゐるのをたよりに、母に伴れられて横川の彌勒講へと出かけた。



横川の中堂はさうした深い山の中であるにも拘らず、香の煙があたり一杯に籠めるばかりに立靡き、參籠者はそろそろと山みちを傳ひ、岨を傳つて、そのありがたい御堂へと一齊につめかけた。壺装束をして蘭綾笠をかぶつた女達だの、杖をついてあの老人がよくやつて來たと思はれるやうな人達だの、さうかと思ふと、宮中からおつかはしの布施の携帶した頭中將の一行の仰々しい姿なども見えた。佛法と王法とがひとつになつて、この深い山の御堂にこの上もない有難さをひろけてゐるやうに見えた。

御堂の内には、僧が何十人となく兩側に列をなして立竝んで、香烟の漲りわたつた、むつとするほど參籠者の呼吸の立ちこもつた、その奥には大きい小さい、中にも二三百目もあらうといふやうな赤く青く或は黄に彩色した蠟燭が煌々と人の目を眩せしむるばかりの佛具の間に何本となく點されて、それがチラチラと言ふに言はれない壯嚴さをあたりに展けたばかりではなく、何年にも開かれたことがない立派な龕の扉が左右にはつと押し開かれて、その本尊の如來の額からは金光が赫々とあたりに輝きわたるかのやうに仰がれた。讀經の聲と共に何遍となく僧が腰を屈めて禮拜すると、『有難や……有難や……』といふ聲がそこからも此處からも起つた。

その大勢の參籠者の右の角のところに、小さな念珠を右の手にかけて、その白い顔を半群集の中に際立たせながら、じつと本尊の方を見てゐるのは、それはまがふべくもない窀子であつた。その傍にはもはやかなり年を取つた髪の白い小づくりなやさしさうな母親が竝んで坐を取つてゐた。『有難や……』の聲のあちこちに起る時には、母も娘も共に念珠を繰つて禮拜した。

窀子ははるばる山を越してやつて來た効があるやうな氣がした。それは都の巷のそこ、に有難い御堂がないではない。かの女の苦しい悲しい悶えを托するに足るやうな本尊もないではない。しかしここでは手を合はせ、珠數をつまぐつてゐる中こそ清淨な心になつてゐられるけれども、そこを、御堂を外に一步でも出て了へば、忽ち煩惱が身に纏つて來るばかりではなく、眼にはさまざまの悲しいあはれな世のさま人のさま、心をときめかすやうな美しい色彩までがまざまざと映り、耳にはまたさまざまの誘惑やらまよはしが片時もその力を振はずにはゐないのであつた。それに比べたらこの御堂の有難さは！この御堂の壯嚴さは！またこの本尊の尊さは！實際窀子には昔の佛の力が今にもまざまざと存在して、その功德をはつきりとそこにひろけてゐるかのやうに見えた。かの女はとてもそなたには行かれないといふのを強めて頼んでやつて來たことを繰返した。丁度その時、殿との間に深い争ひが起つてゐる——それもいつものとは違つて、窀子が昔親しくした大學のひとりの書生の許から手紙がやつて來て、むかしの心に火がつくまでには到らなかつたけれども此方からかへしの歌などを贈つたことを殿に知ら



れて、『何故それがわるいのです……。何も事があつたのではない。その歌をかへしたのがわるいと言はるゝが、何故それがわるいのです……。男は何のやうなことをしても好く、女子はそれほどのことをしてもわるいと言はるゝのか？』などと言ひ合つたばかりではなく、父親に遠く別れた悲しさが添つたりして、それで暫しはこの苦しさやら悲しみやら悶えやらを忘れたいと思つてそして無理に母親について来たことをくり返した。それでも殿のことが忘れられるのではなかつた。途中では心強くかうして家を明けて出て来たことを悔むたりなどしたことをくり返した。

僧はまた一齊に法衣の袖をひるがへして禮拜した。

『有難や……。』

さうした聲は益々盛になるばかりであつた。

深く經に讀み耽れば耽るほどその聲の調子には一層眞面目な物狂ほしさが加はつて、僧ばかりではなく、その御堂の空氣の内にもこの世ではないやうな何物にか憑かれたやうな重苦しさと眞面目さがかたりに満ちた。

一しきりの讀經が済んで、親しくしてゐる僧の房へともどつて来た時には、窀子はほつとしてため息をつくほどだつた。かの女は誰か同じ參籠者が持つて来て壁に張りつけた畫障などをあちこちと見て廻つた。その室からは深い谷が覗かれて、下では谷が微かに鳴つてゐる。冬の山はさびしく、樹の枝もあ

らには、若い僧の話では、鹿がついその山まで出て来て、その鳴く聲がいつも笛のやうにきこえるなどと話した。

『かういふところにゐたら、身の苦しみもあるまい……。』

こんなことを思はず窀子が言ふと、若い僧は笑つて、

『この身はまた都にゐたら、何んなに好いかと思ひます……。それはこの二三日は賑かですけれども……。誰もゐない時は、冬は……。それは山はさびしうございます……。あなた方は都にゐられて羨しい』

かう言つて笑つた。それは眉の美しい、可愛い、色の白い、莞爾しながら絶えず無邪氣に話すやうな若僧であつた。母子の間には先きの帝の内親王がさうした若い僧の佛に仕へてゐるのに感激して、何うかしてその身もさういふ淨い身になりたいと言つて、帝にも誰にも告げずに單身で大比叡にのぼつて髪を剃られた話などが出た。そして、『あゝいふ若い可愛い僧がゐるのだから、さう思はれたのも無理はない』などと母親は言つた。窀子はそれは母親には言はなかつたけれども、その身にしても、もしさういふ淨い身になることの出来る身だつたら、それこそ何んなに好いだらう、何んなにすがすがしくつて好いだらうなどと思つた。

夜の御堂に出かけて行つて、そこで同じやうな讀經を一時ほど聽聞したが、あまりに夜の山が寒い



ので、房へ引返して寝るつもりで、そこを出た時には、雪がもう盛に降り出して、一緒に案内して呉れた僧の持った松明に小さい大きい雪片が黒く落ちては消え落ちては消えた。

『えらい雪になりました……』

『本當に……』

『これは困つたのう？ これでは、あすは何うなるやら？ 雪に降られてはもどれぬかも知れぬ』

これは宛子のあとから出て来た母親だつた。

『これはあすは大雪だ』

松明を先へ翳し翳し、若い僧は足場のわるい路を先に立つた。雨具の支度はして来なかつたので、房まで行く間はいくらもないのであつたけれども、それでも宛子の髪も衣も白くなつた。房の扉のところに来て宛子はそれを母親に拂つて貰つた。

果して明くる朝は大雪だつた。山も谷も埋むばかりに雪は降り頻つた。樹の枝はたわわに、溪の水の音も微に微に谷の底に鳴つてゐるばかりだつた。戸をあけた縁の中まで雪はふり込んで来た。

『まア、大事ぢや』

母親は困つたといふやうにしてじつとそこに立盡した。

『まア』

宛子もかう聲を立てた。

しかし見たいと思つたとて見られぬ山の雪ではないか。深い山が既にこの世のもだえを、くるしみを、悲しみを隔て、來てゐるのに、更にこの大雪がそれを遠く隔て、了つたのは、宛子に取つて一層嬉しいやうな氣がした。かの女は始めて思ひのまゝにならない世間以上に更に思ひのまゝにならないものあることを感じた。(何うにもならない、何うにもならない！ いくら思つたつて、いくらもだえたつて何うにもならない、人間は、人間は小さな、小さな身なのだ……) 宛子はその身の哀れさを——遠くに行つた父親を慕つて何うにもならず、微かに昔の戀心をたづねても何うにもならないその身のあはれさをつくづくと身に染みて感じた。かの女はその心もその苦しきもそのもだえもその悲しみも皆なこの大雪の中に埋めつくされて了つたやうな氣がした。

氷るらん

横川の水に

降る雪も

わかごと消えて

物は思はし

かの女の胸に簇り上るやうにしてかうした歌が出て來た。雪は降り頻つた。



『だつて二日も三日も待つても、あなたはお出なさらなかつたぢやありませんか』 宛子の顔には男に對する勝利の色が歴々と上つて見られた。

『それで何處に行つたのだえ?』

『何處でせうかしら? 屹度、屹度、あなたなどの御存じない好いところでせう。』

いつもに似合す女のわるくはしやいでゐるのを不思議にして、兼家は何か言はうとしたが、よして、そのまゝじつと宛子の顔を見詰めた。

『……………?』

『だつて、ちやんと書いて置いたでせう。いくら鶯が好い聲で歌はうと思つて待つてゐたつて、それを聞いてくれる人が來なければ、何處か他に行つて、それをきいて貰ふより他に爲方がないぢやありませんか……』

『それはわかつてゐるよ、お前の歌でわかつてゐるよ。知られねば身を鶯のふり出て啼きてこそ行け野にも山にも……。その心持はよくわかつてゐるよ。だからすまないつて言つてゐるぢやないか』 言葉強くして、『本當に何處に行つたんだ?』

『知らない……』

『自分の行つたところを知らずにゐるものがあるものか? 洞院の辻?』

『さうかも知れませんか……』

宛子はまた勝利者のやうにして笑つた。洞院の辻には、かの女が曾てラブしたその大學生が失戀してから伯母の家に深く籠つてゐるのであつた。

兼家の頭には、まさかとは思つてゐるけれども、それでもその崩れた築土の奥にある家の一間の中が眼の前にそれと映つて見えた。そこにかの女がゐる。この身には話すことを敢てしないことをかれに綿として話してゐるかの女がゐる。曾てちよつと加茂の霜月の祭の時に通りすがりにその男を見たことはあるが、それは地位から言つてもとてもその身とは競走出來ないのはわかり切つてゐるけれども、そこにはまた普通では言へない細かい心持などがあつて却つてさうした富貴やら地位やらで強いて女の心を自由にしてゐる身であるだけその相手に對して此方の弱さを感じた。女は——ことに宛子はさういふところに殉情的になる質であるだけ一層それが氣になつた。

兼家は昨夜來て、宛子がゐないので、いくらかやけ氣味で、女のゐないところにこの楽しい正月を寝たつてしようがないなどと言つて、これからすぐ何處かに行きでもするやうに呉葉達を困らせたが、夜がもはや子の刻を過ぎてゐて何うにもならないので、そのまゝ靜まつて、いつもの一間に夜のものを暖



く、裏の竹むらに夜風の騒ぐのを聞きながら窀子の残して行つた鶯の歌のかへしなどを考へて一夜をすごした。鶯のあたに率て行かん山邊にも啼く聲きかばたつぬばかりぞ。これほど此身はそなたのことを思つてゐるのに、かうしてこゝにひとりこの身を残して、その美しい聲音をあだし男に聞かせてゐるとは！ しかしこの身にもわるいところがないではなかつた。一昨日來れば好かつた。あゝいふ女の偽りにひかれなければよかつた。あゝいふ女は——あゝいふ女は、そこまで考へて行つて、兼家は男にも女を責める資格のない身であることを深く考へた。曉近く厠に出て行つた時には、月が明るく竹むらを照して、手水盤の水が銀の匣器のやうに厚く氷つてゐた。

そのあくる日であつただけに、窀子が午前に莞爾しながら歸つて來たのがかれはことに嬉しかつたのであつた。

『教へて上げませうか？』

『教へて呉れ！』

『やつぱりあそこよ。洞院の辻よ。あそこで大勢集つて詩の會をしたのよ。』兼家の顔のわるくむづかしけになつて來るのを可笑しげに見やつてゐたと思ふと、急に噴き出して、『本當はうそ！ 稻荷に行つたですよ。そしてあそこの禰宜の伯父の家に母と泊つたですよ』

『本當か？』

『本當ですとも……。それだましてやつた！ あの顔は！ 吳葉も見よ？』窀子は聲を立て、笑つた。身を崩さぬばかりにして吳葉も笑つた。

『人を馬鹿にしてゐる！』

『だつて……』女達は餘程可笑しかつたもののやうに猶も止めずに笑ひ立てた。

## 九

さうした笑ひやら悲しみやら戀ひしさやらもだえやらの中にも、いつか新しい生はそのさゝやかな呼吸をその美しい母親の體の中で息つき始めた。と、母親の蛾のやうな黛にはいつか深い惱みが添ひ、人知れず几帳のかけのため息が出で、當然味はなければならぬこととは言ひながら、その身にもたうとうさうした女子の運命が來たといふやうなことがたまたまなくかの女を感情的にした。かの女は春から夏になつて行く間の期間をその靜かな一間で憂鬱に暮した。曇つた日のもだえ、雨の日の悲しみ、おぼろ月夜の花の下のうれひ、ことに、何うしてか山吹の花の黄色いのが深く身に染みて、縁に近くその花びらの白くなつて散つて行くのを見ると、たまたまなく悲しい氣がした。何うしてかういふことがあのやうに母親や兄達を喜ばせたのだらう。さういふ人達は身がはつきりときまつたと言つて喜ぶのだけれども、何うしてこれがそのやうに目出度いだらう。この身の若い春は忽ち過ぎて行つて了ふではないか。



それも、公に脊と呼び妻と呼ぶるゝ身ならば——お互にそれを認めるばかりではなく世間の人達にもそれと認められて、互に縫つたり縫られたり、心が十のものならば互にその半をしつかりと握り持つて、見かはず眼にも、取り合ふ手にも、竝んで行く姿にも、朝夕の起居ふるまひにも、片時もさうした心の添はずにないことのない身ならば——それならば、この生るゝ兒も仕合せに、目出度いと祝はれても好いけれども、その身は浮萍のやうに、根がついてゐながら何處についてゐるのやらわからず、またいつ根が絶たれて了ふのやらわからず、縫るべき人には他にも澤山にさういふ人達がゐて、口では眞面目なことを言つてこの身を慰めて呉れるけれども、門外一步を出れば、何處に何ういふ美しい人がゐて、かの人の心を忽ちに蕩かせて了ふやらわからず、それを思ふと、その身ばかりか、生れて来る兒もやはり不仕合せであることを思はずにはゐられなかつた。かの女は何ぞと言つてはよく眼の縁を赤くしてゐた。

それに、つはりが人一倍強くかの女を襲つた。手水盥のところに行つて物をもどした。また物のにほひがわるく鼻につくと言つては厨の人達を驚かした。沈丁花の咲く時分から、平生好きであつたそのにほひが反對におびたゞしく嫌ひになつて、『呉葉、この花のにほひは昔からこんないやなかりであつたかしら？ あの廉いわるい香にそのまゝではないか』などと言つた。

従つて身じまひなどもおろそかになつて、殿の來た時にもわるく髪を取亂してゐたりなどした。それ

でも殿には別にそれが氣にもならないらしかつた。否、むしろさうした取揃はない美しい女子の悩みは、海棠の雨に逢ひでもしたやうにかへつてその心を惹くらしく、またその體の中にその戀心のかたまりの呼吸つきつゝあるのを思ふとたまらなくいとさがまさつてでも來るらしく、ひたしめに窈子をしめたりなどすることもあつた。

『男子といふものは、何うしてさう我儘で、薄情で、他のことなど何とも思はないのでせうね？』

窈子はある時じつと兼家の顔を見つめるやうにして言つた。

『何うしてそんなことを言ふのだえ？』驚いたやうに兼家は言つた。

『私達の心は男子とは違ひますね……。もつと眞面目で、そして清淨ですね。何んなに戀しくつたつて、それを押へられないといふやうなことはありませんからね。……』窈子は深く思ひ沈むやうに、『でも女といふものは、さういふ風に生れる時から出來てゐるのかも知れません。綺麗な美しいことばかり考へてゐるのですから……。男女の仲にしても、心だけで十分に戀が出來るやうに出來てゐるのかも知れませんか……。』かう言ひかけてたまらなく悲しくなつたといふやうに、衣の袖をかつぐばかりにして泣き伏した。

『何うしたのだ！』

兼家はむしろあつけに取られたといふやうにしてその傍に身を寄せた。



窈子の涙は容易にとまらうともしなかつた。たしかにかの女はヒステリカルになつてゐた。吳葉な  
どがやつて来てやつとなだめて身を起した時には、眼は赤く腫れ、髪は夥たしく亂れ、惱ましげな姿  
が一層男に愛着の念を誘つた。『お中の子が私に似て泣虫なのかも知れませんか』こんなことを言つて窈  
子は莞爾笑つて見せた。

## 10

梅雨が幾日か續いたあとには、くわつと夏の日が照つて紫陽花がその驕女らしい姿をそのあたりには  
つきりと見せた。

もとの右大臣の御靈がゆくりなく京のひとりの少女に憑いて、紫野の向うの北野の小松原の中に住  
みたいといふ託宣があつたので、それが大宮の奥をも動かして、その年の秋に取敢へず小さやかな宮を  
そこにつくることになつたが、今年は始めて天満天神といふ諡號が贈られ、社も宏壯に改築されて、皆  
人がぞろぞろとそこにお詣りに出かけた。窈子は是非そこにお詣りしたいと思つたけれども、もはやお  
中が大きくなつて、とても牛車では行かれぬので、たゞその賑ひの氣勢のみを他から聞くことに満足し  
なければならなかつた。そこに、窈子の代りにお詣りに出かけて行つた吳葉はもどつて来て『それは賑  
かでございました。野道が一杯人で埋まつて、御社のあたりには、餘ほど何うかしないと近寄れないく

らるでした。それに、今日源氏の判官が家の子郎黨をあつめて參詣に来て居りましたので、鎧兜が見事  
で、キラキラと日に光つて、それは本當に見物でした』などと話した。

それに窈子に取つて嬉しかつたのは、遠くに行つた父の許から安着の報知の來たことだつた。その中  
には白河の關や安達の鬼塚のことが書いてあつて、とても女子の身では來たいにも來られぬところだ  
どと書いてあつた。

八月になると、さしにも凌ぎがたかつた炎暑も次第に涼しくなつて、愛宕から北山にかけて秋の白き  
雲が靡き、垣根には虫の聲がすだくばかりにきこえた。中秋近い頃には、大内裏で歌會や詩會があつ  
たりして、兼家は忙しさうにあちこちと出かけたが、それでも大抵はちつとでも來てかの女を見舞ふこ  
とを例にしてゐた。

ある夜兼家が行くと、吳葉は飛んで出て來て、

『あ、ちやうどいらしつた。今、お使ひをさし上げようと致してをりましたところでございます……』

『物したか?』

『すこやかな、美しい、それはそれは玉のやうな……』

『男子か?』

『さやうで御座ります』



『それは好かつた……何うかと思つて案じてゐた……。母君は？』

『あちらにゐらつしやれます』

『苦しみはせざつたか？』

『あまりさう深くはお苦しみにもなりませんでした。巳の刻あたりから、さうした氣ざしはございましてけれど……ほんにさし込んでゐられたのは申の刻あたりからでございます』

『好かつた、好かつた——』

そこに母親がやつて來た。母親の顔にもよろこびが溢れてゐた。

『別に……』

『二人ともすこやかで、今よく眠つてをります……。今、使を出さうと存じましたところで……。眠つてゐても、こつそりでもそれを覗はずにはゐられないといふやうに、母親や吳葉の頻りに氣を揉むにも拘らず、兼家はそつとその産室を覗いて見た。そこには几帳が兩方から重なるやうに置いてあるが、灯の光がさう大して明るくないので、そこらに置いてある夜のものなどははつきりとは見えなかつた。たゞかれは髪の毛のいづもに似ず白い紙で結ばれてゐると、向うむきになつてぐつすり眠つてゐると、その襟から横顔だけがほのかに白く見えてゐると、その向うに今生れたばかりの小さな色の白い、それこそ本當に玉のやうな、髪の毛の黒く濃い赤兒が、その方は少しさめて、眼こそまだ明かぬ

が、口をもがもがさせてゐるのを兼家は眼にした。已にかれには邸の妻にも、女房にも子供がないではなかつたけれども、それでもその愛してゐる窀子であるために一層その生れた兒がもつと詳しく見たいやうな氣がした。

かれは几帳の中まで入つて、いぎたなく眠つてゐる窀子を覗いた。

『殿！ 殿！』

そこに吳葉が來てとめた。かれは微笑を浮べながら引返した。

一一

産室から出てまだ一月とは経たないほどのことであつた。窀子は兼家の何處かに出かけたあとで思ひもかけないものを發見してはつとした。

それは螺鈿の文箱の中に、ごたごたと懷紙やら短冊やら紙やらが一緒に亂雜に入つてゐるのを、別に疑ふといふやうな氣持もなしに、むしろあまり散ばつてゐるからそれを整理しようぐらゐの心持でその中をあれこれとそろへてゐたのであつた。そこにはかの女の書いた反古もある。兼家の達者な字で書いた文もある。ふと、氣が附いた時には、窀子の眼はその文に焼附きでもするやうにびたりと留つた。

女は誰だかわからないが、その文言は何う考へ直してもラブ・レターであつた。それもかなり此方か



ら打込んでゐるらしく、例の、この身の時にもさうであつたやうなうまい言葉が、歌が流るゝやうに出て行つてゐるのであつた。いつもなら、何んなことでも吳葉に見せるのが習慣であるのに、今日はそれすら出来なかつた。自分ひとりでこの思ひを深く包んで、兼家が顔を見せたならば、そのまゝ、何うにもごまかすことが出来ないやうに、眞剣にそれを打ちつけて、いやでも應でもその女を知らなければならぬと思つた。窈子は下唇を何遍も何遍もかたく嚙んだ。

ところが生憎に秋雨が降つたり、大内裏に宮の用事があつたりして、兼家は容易にそこにその姿を見せなかつた。窈子は憂鬱な顔をして、いらいらしながら暮した。

『何うかなりましたか?』

吳葉は心配した。

ところが、三日目の午後にそんなことが家に待つてゐるようなどとは夢にも知らずに、莞爾しながら機嫌よく兼家がやつて來ると、いきなり、

『あなた、これは?』

と言つて、嫉妬と恚りとで半ばもみくちやにされた、緑色の文をそこに出した。

『何だえ?』

『おわかりでせう! 覺えがあるでせう?』

その何であるかを知つた兼家は急に狼狽へて、

『何うしたのだ……』

『何うしたも無いではござりませぬか。かういふ女子が何處にゐるのでございます……』

『それはいたづらに書いたのだよ。そんな女はるやしないのだよ』

『うそをおつしやいませ、ちゃんとやるばかりになつてゐるのでございますもの……』

『何處にあつた?』

かう言つた時には、兼家の顔にはいくらか笑ひが上つて來てゐた。

『それ、御覽なさい……』

『本當に何處にあつたのだ』兼家はその女にやる文を何處かに亡して了つたので、その時あちこちをさがしてもないので、それに途にでも落して了つたのだからに思つてゐたのであつた。

『さうか、此處の文箱にあつたのか。それはわるかつた……』

かう言つて手早く窈子の持つてゐる文を奪はうとした。

『駄目ですよ。』

窈子は笑つて、『それよりも本當に誰です? この人は? 何かまた身分のわるいものにも出會したのではありませんか』



『大丈夫だよ』

いくら寵子が責めても流石に兼家はその女のことを言はなかつた。

しまひには寵子の眼から涙が流れた。そこに呉葉がやつて来た。その話をきいて呆れたやうな顔をして兼家を見詰めた。

『あんな可愛い男のお子がお生れあそばしたのに……殿達といふものは……』

『女は何うせおもちやにされてゐるのですから……だから、呉葉、この間もそちには打明けなかつたが、つくづく思った。女にはやはり子供ばかり……かう母者人がよく言はれたが、不思議なことを言ふと思つてゐるが、やはりその通りぢや。今はじめて思ひあたつた……』寵子は呉葉の手からその可愛い道綱を抱き取つた。

『まアそのやうなことをきつう言つて呉れな……かういふ可愛い男の子さへ出来たのだから、もう案ずることは少しもない……』

『それはさうでございませう。案ずることはございますまい……。女子を餓えさせて置くやうな殿達もございませうまいほどに……。しかしそれだけで満足してゐる女はありませんか？ のう呉葉、お互に深く思ひ合ふほど、さうしたことは出来ない筈でございますのに』寵子の言葉には深い絶望の調子が加はつて行つた。

『殿はそのつもりで居られたものではござりませぬか。唯一つたよりにする父親には遠く離れて、不憫だとは思召さぬのですか。この身はいかやうにもこの真心を殿に捧げてゐるつもりですのに……』

『まア、好いよ』

兼家の額には汗がにじみ出した。かれにしても寵子を腹立たせたり悲しがらせたりすることは、ほんのわづかなら好いけれども——却つて愛情の暴漲を來たすよすがとなるけれども、さういふ風に泣かれたり口説かれたりすることは男に取つて餘り好いことではなかつた。寵子の怨みや嫉妬を買はない程度でかれは他の女とも遊んで見たいのであつた。

それから二三日経つたある夜のこと、呉葉は外から入つて来て、寵子の几帳のところに坐つた。

『何うした？』

『やつぱりさうださうでございます。留がそつとついて行つて何處に殿の車は入るかと思つてゐると、坊の小路の家に入つて行つたさうでございます』

『思つた通りだね』

『何うして殿はあゝいふ風に水心でゐられることか！』

『その坊の小路の女なら、そちは見たことがあるといふたね？』

『え、ちよつと……』



『何んな女子?』

『ちつとも好いことなんかございませんのです。色は白うございますけれど、容色は好いといふ方はございません、……にくいではございませんか、留がそつと見てみると、その女子が平氣で殿の車のところに出て来て、何か言つて居つたさうでございます……』

しかしいくら憂鬱に閉されても、窈子は何うすることも出来なかつた。それに、兼家が久しく見えないこともかの女には氣になつた。思詰めると、このまゝ此身は秋の扇と捨てられて了ふのではないかといふやうにすら思はれた。

殿達に取つては、坊の小路は此上もない歡樂の庭であるらしかつた。灯が明るくついて、子の刻を過ぎて、酔ひしれたりざれ戯れたりする男や女の聲があちこちにきこえた。そしてそこで酒を飲んだり女と戯れたりして、明方近く牛車の音がたがたとあたりにきこえた。

兼家にしても、坊の小路に出入りするやうになつてから、いつも曉にその車を窈子の家に寄せるのだつた。それでもさうして車を寄せて来るだけがそなたを思つてゐる證據ではないか。かうして來るところを買つて貰はねばならぬ。『女子などはたゞ酒の相手にするだけぢや、何もするのぢやない……』いつもこんなことを言つてその酒臭い顔を窈子に寄せた。

二三日経つてから、あけ方に戸をコトコトと叩く音がした。たしかに兼家が車をその築土に寄せたのであつた。しかし窈子は腹立たしく思つてゐることがあつたので、じらせてやるつもりで、その戸を明けようともせずじつとしてゐた。

頻りにコトコトと音がした。つゞいて何か牛かひと話してゐるやうな氣勢がした。何うするだらう。いつもならばもつと強く誰か起きずにはゐられないくらゐに叩くのに、それもせずに、そのまゝ車をあとへもどして行くやうである……窈子は半ば身を起して、その車の音の向うに微かになつて行くのにじつと耳を傾けた。何とも言はれないかなしさが強くかの女の全身に襲つて來た。

たしかにあそこに行つたに相違ない。それと知つたならば、じらせなどせずに、そのまゝすぐ戸を明けてやればよかつた。この身もわるかつたのだ。かう思ふと一層ひとり寢のさびしさが身に染みだ。

歎きつゝ、

ひとりぬる身の

あくる間は

いかに久しき

ものとかはしる

夜が明けたらば、この歌を書いて兼家のもとに送らうなどと思ひながら、窈子は明方まで眠れなかつた。



朝になつてそれを見事に短冊に書いて、うつろつた菊にさして使のものに持たせてやつたが、兼家からはかへしがなかつた。それから猶一日経つてからであつた。實にやけに冬の夜ならぬ槇の戸もおそくあくるに苦しかりけり。そうした歌につづけて、『あの時も少し叩いて待つて居れば屹度明けるにはちがひないとは思つたけれども、丁度その時急な用を言つて來た使のものがあつたので、それで引返して了つた。わるく思つて呉れな……』と書いてある。いつもながら男は勝手なことばかり言ふものだと思ふと、腹が立つて、我知らず下唇を嚙んだりしたが、しかも何うにもならなかつた。そんなことを荒立て、言つて見たところで、男の心を此方へ移すことが出来るではなく、かへつてその状態をわるくするばかりなのはよく知れきつてゐた。それが窈子には心外でもあり悲しくもあり腹立たしくもあつた。此間、内裏に仕へてゐる歌の昔の友達がひよつくりたづねて來て、帝ときさいの宮との間に、此頃みにくい争ひがあることなどを話して行つたことを窈子は自分の身の上に比べて思ひ出した。それは窈子とはうらはらのことで、何方かと言へばその女御の方にこそより多く同情さるべき位置にかの女はその身を置いてゐたのであつたけれども、それでもきさいの宮の方に一も二もなく同情させられて行つた。『それはきさいの宮がお腹立にならるゝのも當り前だ……。その前でさういふことをされては、誰だとして腹立

たしく思はないものがございますまい……。一體、その女御が餘り出しゃばりすぎるからいけないんです。帝も帝だけでも、その帝の寵愛を好いことにして勝手に振舞ふからいけないのです。きさいの宮だつて、平生さういふことはちやんとお心得になつてゐらつしやるのだから、よくよくでなければそんなことはなさらぬ筈です』などと言つたことをくり返した。何でも帝はその小一條の女御を寵愛のあまり、おん手づから筆をお教へになつたり、歌を賜はつたりするばかりでなく、殆ど目にあまるやうなことをするので、それできさいの宮はいつもそれを夥しく憎んでゐられるとのことであつた。何處に行つても、さういふことは止むを得ないものか。帝やきさいの宮の仲にもさういふことは免れがたいものか。やつぱり女はさういふ時に出會したら、だまつて知らぬ顔をしてゐるより他爲方がないのか。その時その大内裏につとめてゐる友達とこんな話をしたことを窈子は續いて思ひ出した。

『それであなは宮仕?』

『さういふわけぢやないけども……』

『宮仕はまた宮仕で忘れられない面白いことがあるさうですからね。つまらなく身をかためて了ふよりは、その方が好いでせうけども……』

『でも内裏は面白いこともあるにはありますけれどね』

その友達は窈子の言葉を半ば否定するやうに、『やつぱり、女子といふものは、嫉妬に苦しんで命をな



くすやうな苦しい目に逢うても、それでもひとりであるものではないと思ひますね。色戀は出来ても誰も持たぬといふさびしみ、誰もしつかりつかんでるないといふ孤獨、さういふことを考へると、内裏などで行はれてゐる色戀はそれこそ水の上に書いた字のやうなものですからね。だから、何んな人でも構はぬ。殿上人でなくてはいけないなど言つたのは、あれは昔、娘であつた時分の虚榮、今はもう何でも構ひませんよ。何方かと言へば、誰も知らぬやうな、唯毎日つとめるところにつとめて、夕方になるとそればかりを楽しみにして歸つて来るやうなさういふ夫だつたら一層好いと思ひますね』

『でも、それは駄目よ。それに満足してゐられるあなたなもんですか。』

『それはまア、さうかも知れませんが、まア話にして、さういふ風に考へることがよくありますよ。またあの御門あたりにつとめてゐる男子にさういふのがいくらもあるんですからね……。それを思ふと、平等に出来てゐるのね。』

窈子は今またそれを繰返して、に考へ出さずにはゐられなかつた。

二三

兼家もしまひには笑ひながら、『何もそんなに案ずることはあるまい、この身はこれほどそなたのことを思つて居るではないか。普通の道端の花とは思つてはゐらないのだから……』

『でも……』

『でも、その相手の名を言へと言ふのか。そなたも随分嫉妬深い女子だのう……』兼家はわざと大きく笑つて、『この間も歌で此身のこゝろもちを言つて置いたが……。三千とせに見つべき君は年ごとに咲くにもあらぬ花と知らなん——それが本當のこゝろだ……』

『それはわかつてをりますけども、それでも……』

『それでもきゝたいのか、困つた人ぢやのう……』むしろ心安けに、それを打明けるのも面白くないこともないといふやうに、

『坊の小路に行つてあそんで来るだけぢや』

『相手をなさる女子は？』

『大勢居るよ』

『でも、殿の御氣に召した女子は……？』

『そんな女子の名を言うてきかせたとて、そなたにはわからぬではないか。あゝいふところは、酒の相手をさせるばかりで、さう深うはならぬものだ。』

『あのやうなことを……。そんなに好い加減に仰有つても、ちやんと存じてをります。あゝいふところはそれは面白いのでございますつてね……』



兼家の眼にも、窈子の眼にも、その坊のさま——外は静かで、暗くつて、通りから見ではさうした光景がそこにかくされてあるなどはゆめにも思へないやうなところであるけれども、その闇の巷路を五六歩入ると、そこに全く違つた夜の光景がひらかれて、其處にも此處にも置かれた結び燈臺の光が、髪の毛の長い、色のくつきりとぬけるやうに白い、普通上流の女達の着けるものとは違つた、派手な襲ね色の或は紫に、或は紅に、縹色に、銀色にかゝやいた衣裳を着けて、それもだらしなく、几帳などは横さまにして、戸口まで出て迎へて行つたりする女達を見るのであつた。否、もう少し中に入つて行くと、室が奥から奥へと二つも四つも連つてゐて、その室毎にさうした女と狩衣の袖を亂した男とがゐて、たまには女が聲張上げて歌をうたひ、それにつれて傍にゐるやゝ年老いた女が琵琶を弾き、男は男でその頃流行る小曲を歌つた。

挿櫛は十まり七つありしかど、

たけくの縁の朝にとり

ようさりととり、

取りしかは、

挿櫛もなしや。

これに似た小曲がいくつもいくつも男の口から出て來た。後には男と女と一緒に立つて舞つたりなど

した。あとからあとへと女童は提銚子に酒を入れたものを運んで來た。窈子は何うしてさういふ坊の小路の光景を知つてゐるかと言へば、かの女はつい今から二月ほど前、兼家がそこで現をぬかして遊んでゐるといふのを聞いて、家の男の子につれて行つて貰つて、そつとその闇の中に俄かに昼氣樓か何かのやうにあらはれて來る賑かなさまを覗いたのであつた。成ほど男達が坊の小路、坊の小路と言つてそれを大騒ぎするのは無理もない、女の身で見えてさへこのやうに面白いのだものとその時窈子は思つたことをくり返した。

で、男はそこで女を相手に終夜遊び散すらしいのだが、女房達の局の内や、琴、笛の夜の會などとはまた違つて、碎けた、氣の置けない、のんきな歡樂のそこにあるらしいのが窈子にもわかつた。窈子はそこを通る時、面がほてつて爲方がなかつたことを思ひ起した。じろじろと見られたゞけで、別にわる口らしい放言は浴びせかけられなかつたけれども、何うして女の身でこんなところまで入つて來たらうと後悔したことを思ひ起した。ことに、暗い一室に、結び燈臺も細々としかともつてゐない一室に、二人の男女が身を寄せ合つて打伏すやうにしてゐるさまが、今でもはつきりと眼の前に浮んで來た。窈子はいくらか心が焦立つて來た。

『あなたには、あそこでも、もう、ちゃんときまつた方があるのでせう?』

『ありはせぬよ』



兼家の笑顔は却つてその反対な心持を裏切つた。

『隠さなくとも好いではございませんか。今度、この身をもそこに伴れて行つて逢はせて下さい……』

『よし、よし、そんなに行つて見たいなら伴れて行つて逢はせてやらぬこともない』などと言つて、兼家は却つてそれを肯定するやうに言つた。

これに限らず、ずつと前から、兼家の好色の噂を、窈子は何彼と聞いて知つてゐるのであつた。兄の攝津介は此頃は伴につれて行かれたりなどするので、もはや此方ばかりの味方にして置くことは出来なかつたけれども、それでもその言葉の端からいろいろなことがわかつた。女房の局の方にあるのは、もはやかなり深いらしく、その女は地位もその身よりは好く、何ぞと言つては却つて窈子のことを問題にしてゐるらしく、此方に可愛い男の兒が生れたのを兼家はそこにはひたかくしにかくして置いたのを、ある時誰れかがそれを知らずについ口を滑らして了つたので、それを死ぬほど嫉妬して、しまひには此方を呪はうとさへしてゐるのを窈子は耳にした。しかしその局の女に對してはかの女はさう大してやきもきしてはゐなかつた。かの女はその女を會てそつと見たことがあつた。美しいには美しいにしても、とてもこの身に及ぶべくもないと思つた。窈子は優越感を十分に感じた。この他にも藤壺の侍女の中に兼家が深く思をかけた女のあることを窈子は聞いた。

可愛い子供が出来ればそんなことはなくなる。それは兼家の方のことを言つたのか、それとも自分の方の心のことを言つたのか。まだ子供が出来ない中には、それは無論兼家の方のことを言つたので、さうなればひとり手に愛情が此方に移つて来る。可愛い子の愛にひかされてひとり手に足が此方に向くやうになる。さう思つてばかりゐるのに、子供が出来てからは、それはさういふ意味ではなくて、單に此方の心持——子供の愛に慰められて、さうした男の好色をも堪へ忍ぶやうになるといふことであるといふことが窈子にも次第に飲み込めて来るやうになつた。(男の心には女があるばかりだ……)窈子はひとり寝の夜など唇を噛んでかう獨語した。この人の世のことが年を経るにつれて次第にびたりと身に觸れて来るのを感じた。

## 一四

兼家の行列はいつも大内裏から西洞院へと下つて行つた。それは普通は東三條の邸へと行くのが當であるが、ともすると、それが堀川の方へ行つたり、また時には西の京の荒れ果てた町の方へと行つたりした。窈子の邸に来る時には、それがすぐ向うの長く續いた築土のところで一先その警衛の聲が留つて、そこで列を碎いて、先に立つたものが二三人、それも大抵はいつもきまつて鼻の際立つて大きい肥つた下司がふくみ聲で、『お出でます、お出でます……』と先觸するのが例になつてゐた。と、いまま



ひつそり火の消えたやうになつてゐた家の中が俄かに活氣づいて、下司も侍女も厨の女も忽ちにして忙しくなるばかりでなく、吳葉もそはそはと門のあたりを行つたり來たりして、そこに靜かに鷹揚に一人二人の供を伴れて兼家が狩衣姿で入つて來るのを迎へた。

『お出でます——』

かう言つて吳葉は丁寧に、さもさも自分のことでもあるやうに嬉しさうに莞爾して迎へるのが常であつた。

奥にゐる窈子にもその來る來ないがよくわかつた。申の下刻をすこし過ぎたと思ふ頃には、きまつてその大内裏から下つて來る警衛の懸聲がそれとなくはつきりきこえるのであつたが——他にも九條殿だの、小三條の殿だのの警蹕もないではなかつたけれども、それは長年の習慣で、その懸聲の調子や何かで、今のは誰？ といふことがはつきりとわかるのであつたが、その角のところととまるか何うかといふことがいつもひそかに窈子の頭を悩ました。従つて窈子は内の誰よりも先に——主人に此上なく忠實な吳葉よりも先に殿の來るか來ないかがわかつた。

『あ！ 行つて了つた……今宵も來ない』かう何遍かの女は口に出して言つて失望したか知れなかつた。その行列がサツサと行つて了へば、それが最後で、あとは秋の長夜を、さびしい獨寢の長夜を、虫がすだいたり月がさしたりまた時には雨が烈しく心細く降つたりする夜をひとりさびしく送らなければ

ならないのである。かの女はそれを考へるといつもうんざりした。また一夜眼をさましていろいろなことを考へなければならぬのか。それもたゞ眠られぬといふだけならまだしもだけれども、あだし女子と何處で何うして寢てゐるであらうか、またあの坊の小路だらうか、それともまたこの頃出來たといふ河原の邸だらうか、そんなことを考へると、自分の家にとまつた時のことに引きくらべて、忽ち赫とならずには居られないのであつた。此の身の當然すべきことを他の女子がやつてゐる。それだけでたまらなく身内が削られるやうに業が煮えて爲方がないのに、この虫の音をも向うではさびしとはきかず、この月の光をも盃に受けて竝んで夜を更してゐると思ふと、ゐても立つてもゐられないやうな氣がした。

であるから、そこで、その角で、その警衛が留るか否かといふことは窈子に取つては大きな問題だつた。かの女はじつとしてその時の來るのを待ち、またその時の過ぎるのを待つた。そして過ぎて了ふとかの女はがっかりした。後には吳葉と顔を合せることがきまりわるくなり、それが昂じて、さう深く自分の身のことでもあるかのやうに案じて呉れることに一種の腹立たしさを感じて、ある時などは、『お前、もうそんなにハラハラ思はないでおいておくれよ、だつて、お前のことぢやなし、私のことなんだから。來たつて來なくなつて、一々そんなことを氣にしては生きてゐられはしないよ……。來たくなければ來なくなつて、何もそんなに氣を揉むことはないよ』などと不機嫌に當り散らした。そのくせ、窈子は來ない日の續くのをいかにもさびしさうにたれこめてのみ暮すのだつた。



それでも何うかすると、その警衛の行列がびたりと留つて、鼻の大きいその含み聲の下司が、『お出ます、お出ます……』と言つてバタバタと入つて來た。

しかし此頃では寵子の心はわるくすねるやうな形になつて行つてゐた。來て貰つて嬉しくないことはないのだけれども、それを無邪氣に面にあらはし喜ばしさうにするといふのは、何となく自分の心を卑くすることで、それでは女としての意地も張りも何もないやうな氣がして、わざとツンとしたやうな顔を見せることが多くなつた。さうでなければわるく素氣なく取扱つて一夜後向きになつてすゝりあけて見せたりなどした。

さういふ夜でも寵子はいつか兼家の腕にまかれて、すゝり上げながらだらりと長い黒髪を屍でもあるやうに亂がましく下に垂らしたりなどした。

朝になつて兼家は吳葉に言つた。

『何うも困る女だね』

『だつて、殿がおわるいのですもの……』

『それはさうだらうけれども、よく言つて置いて呉れ……。決して何うのかうのと言ふのではないのだから、此頃は少し忙しいのだから、それに、此間は物忌になつたりして、こもり勝ちに暮してゐるものだから……』

『でも、お忘れないやうに——近うお出下さるやうに——』

『わかつた！ わかつた』

他の女のことをあまり手ひどく嫉妬されるのはそれは好ましいことではなかつたけれども、しかしさうした女のヒステリカルな感情が、男に一種の興味を齎らすことには間違ひがなかつた。兼家に取つては、何處に行つても寵子のやうな女は見出せなかつた。従順と謙遜と虚偽とのみにかれば倦んでゐた。

かれはそのあくる日大内裏のあるところである若い殿上人にこんなことを言つた。『御身なんかにはまだ女のことなんかわからないね……。局の女房達のところだつて大したものではないしね。坊の小路だつてちよつとは面白いけれども、あれだつて、しまひには底がわかつて了ふし、やつぱり戀は向うの相手の如何だと思ふ。御身はまだ女の一衣泣いたのを介抱したことがあるかね？ あるまい？ さういふ面倒なところに面白味があるのが戀だよ。やつぱり女は女だからね。いくらすねて見せたつて、やつぱり男のものだからね。だから、嫉妬する女にも面白い一面があるよ。たうとう一夜一睡も取れなかつた……。それで今日眠うていかん』

『河原でござるか？』若い殿上人は笑つて訊いた。

『まア、そんなことはまア何處でも好いけれど……』

かう言つて兼家も笑つた。女がヒステリカルに振舞つた美しいその態度は、その時になつても一種の



深い男性的愛着を兼家に感じさせずには置かないのであつた。

また數日経つた後にはその同じ若い殿上人に兼家が話した。

『何うも、女子といふものは面倒なものぢや』

『何うかなさりましたか』

『別に何うといふことないが、もう少し離れてゐて呉れば好いと思ふことがござるな……』

『またよべ御介抱なされましたか』

『さうぢやない、今度のは別ぢやがのう……。何うしてあゝ女子といふものは嫉妬深いものかなう……。いくら申してきかせてもわかり居らぬ……。』

『殿は果報者でござるほどに……。この身などは、この若さに、まだひとりすらさういふものを持ちてだにあらぬに……。殿は——』

『局のは何うし居つた？』兼家は笑ひながら言つた。

## 一五

幼ない道綱はいつの間にか數へ年の三つになつて、此頃は片語雜りの言葉を可愛い口から言ふやうになつた。宛子に取つてはそれがせてもの慰藉であつた。普通館の人達は子が生れると北山あたりに好

い乳母をもとめて、そこに數年里子に出して置くのを常としてゐたけれども——兼家もそれを希望しないではなかつたけれども、宛子はこの私の小さい珠玉だけは片時も自分の胸から離すことが出来ないと言つて、ひたとそれをかき抱いたので、それでそこで育てらるゝことゝなつた。しかし里の母親などは、昔人だけにそれをひどく心配して、殿の足の此頃間遠に編まれた簾のやうになつたのは、その幼い兒をそのまゝそこに置くためではあるまいか。子を持てば女子の姿はあさましくなると言はれて、好色の殿達はそれをひとつの邪魔者のやうに、また子の愛に執着してそれから離れて來られない女子はもはや色戀の對照ではないといふ風に思はれてゐるのに、それを平氣で對屋で養つてゐるので、それで殿は來られなくなつたのではあるまいか。今からでも遅いことはない。いつそ世間並に北山へやるやうにしては——？ かう母親は絶えてそれを氣にして言ふのであつたけれども、しかも宛子はそれに耳を留めようとはしなかつた。そのやうな薄い情のために、この大切な珠玉を失くして何うなるものぞ！ そのやうなことは別にしてそなたを思うて慈しんでくれるのでなうては、父親と言つても、それは單に名ばかりではないか。何うして！ 何うして！ この身の姿がいかにあさましうならうとも、この身がそのため何のやうに瘦せてみにくくならうとも、この身は單なる男の子のもてあそびものでない上は、この子を手放すことではない。宛子は強く強くその可愛い子を抱きしめた。

吳葉もそれには同情せずにはゐられなかつた。何ぞと言つては、道綱を伴てはその女君のゐる几帳



の方へと行つた。

『おゝ、よう參つた！ あこは好い子になつたのう！』

かう言つて窀子はこつちへとそれを引寄せた。

『あこは本當にうつくしう——』引寄せてたまらなくなつたと言ふやうに、その身の苦しみやら男に對する嫉妬やら體の平均しない感情やらに堪へられなくなつたといふやうに、その赤い滑かな小さな頬にあつい口をびたりと當てた。思はず涙が底から溢れ漲つて來た。

その頬の吸ひざまがいつもとは違つて強く烈しかったので、小さき道綱は急に聲を立て、泣き出した。

『お、よし、よし、母があまりつよう吸うた！ 許して呉れ！ 許して呉れ、さうつよう吸うたつもりではなかつたのに！ お、よし、よし』

窀子は慌て、引起して、それを一生懸命になだめた。

『よし、よし、本當に、この母がわるかつたのう、わびた、わびた、これこの通りにわびた！』

泣き出した道綱はしかも容易に泣き止まうとはしなかつた。

吳葉が抱き寄せて、

『何ともなつてゐるはせぬのでございますのに……。おゝ、母者が吸うた。わるかつた。わるかつた。』

母者のところに伴れて來ずばよかつた……。でも、なう、男子は強うならねばならぬ。そのやうに弱う泣いては何うにもなりません。もう大丈夫！ もう治つた！』かう言つて若い母親の悲しい口づけのあるあとを吳葉は軽く撫で、やつた。

それで道綱の泣聲は漸くとまつた。

秋はそんなことをして暮してゐる中にもいつか長けて、西山のもみぢも過ぎ、鳴瀧の奥の御寺の御講も濟んで、やがては北山の奥の峰に雪が白く見えるやうになつた。

さびしい寒い冬は來た。窀子は日ましに兼家との仲が遠くなつて行くのを悲しまずにはゐられなかつた。それはたまさかにはたよりがあり、歌があり、曾ては、十日ばかりも來ずに、だしぬけに几帳の柱にかけて置きわすれて行つた小弓の矢を使の者して取りに寄こしたので、『思ひ出づる時もあらじと思へどもやといふにこそおどろかれぬれ』などとわる洒落を言つてやつたりなどしたことがあつたが、次第にさうして馴々しい心持なども稀れになつて、その歌のおとづれすらも次第に間遠になつて行くのだつた。

ある夜は道綱をかたく抱きしめて、『何うなすつたのでせうね、そちのお父さまは……。網代の氷魚にでもきいて見たらわかるだらうかね。何うして此頃はちつともそちのところに来ないだらうかつて……。』かう言つて窀子はまたした、かに涙を流した。



ひとつの噂が傳つて來た。

何でもその話では、去年あたりから堀川の殿に新しい寵が出來て、それが河原に近いところに對屋を造へて圍はれてあつたが、その人にも今度はめでたい話があつたといふのであつた。噂としては別にさう大したことでもなかつた。その女の圍はれてあることは、たうから知つてゐた。その女にいつかさういふ話のあるのは當然のことであつて、別にめづらしいことではなかつた。しかし世間では寵子の時にも目を睨るやうにしてその噂をして、中にはそれをあさましいと言つてわるい方に言つたものもあるにはあつたが、大抵は大臣になる人の寵になつたのを果報に羨ましく思つたものが多かつたので、忽ちにして秋の扇と捨てられた形を世間でも由々しいものにして噂は噂を生むのであつた。その世間といふものが寵子にも強く強く感じられた。

『本當でござるか』

『さやうか』

『男心といふものはそのやうなものかのう？ あれほど心を籠められても、いざとなると、さうなるものかのう』

さうした言葉は寵子の周圍にゐる人達の中にも起つた。寵子はしかし黙々として暮した。それについては何も言はなかつた。吳葉が何か言ひかけるのにすら不機嫌な表情をした。

それでもその出來事の一伍十什については、誰よりもその身が一番詳しく知らなければならぬのであつた。従つてその問題に觸れられることは身を切らるゝよりも痛さを感じるけれども、また此上もなくこの身の誇りを傷つけらるゝやうにも感じられるけれども、しかしそれから耳を塞いで、何うともなれ！と言ふやうに平氣にすましてゐるわけには行かなかつた。否、むしろ此方から進んで、さういふ敵と戦ふばかりか、自分のためにも、またこの幼いもののためにも、飽までも男の心を此方へ取戻して來なければならなかつた。寵子は徒らに嘆いたり女々しく悔んだりばかりしてはゐられないやうな氣がした。

母親もあまり世間の噂が高いので、心配になつたと見えて、それとなしに、そのことを言ひに來たのではないといふ風をして、そつとそこにその顔を見せた。その時、兼家からの使のものが文箱をとめて來た。

箱をあけて、文をひろげて見ると、久しく行かなかつたのは、まことにすまなかつた。しかし、わるう思つては呉るゝな。此方にも今までは知らせずにしてあつたが、少し手放されぬ厄介なことがあつて、それでかういふ風に無沙汰になつた。それもやつと昨日すんだ。しかし身も穢れて居るので、當分



は宅に籠つてゐるより他に爲方がない。非常にあさましう、つめたく思ふかも知れぬが、そなたのことは忘れたのではないからなどといつてもよりも細々しくやさしく筆を走らせてゐるのを窈子は見た。使のものもいつもの下衆とは違つて、自分の下につかつてゐる史生見たいなものだつた。で、それとなく吳葉にきかせた。

やがて吳葉はもどつて來たが、窈子の傍に寄添つて來た。

『え?』

窈子は耳を寄せた。

『さうなの? 男の子なの? ふむ……』かう言つたきりだつた。窈子の顔は急に赤くなつた。

吳葉にはその窈子の心の動搖がよくわかつた。しかし何うすることも出来なかつた。二人はそのまゝにだまつた。

暫くしてから、

『おかへしは?』

かう吳葉が訊くと、

『ないと言つてお呉れ……』

かう言つたまゝ、窈子は向うむきになつて了つた。

そこに母親も近寄つて來た。

『何うかしましたか?』

『いゝえ、別に……』つとめてその心持を押へようとしたけれども、しかしその一伍十什を母親からかくして了ふことは出来なかつた。

母親も昔氣質の腹を立てずにはゐられないやうに見えた。それが男の兒であるときいた時には、見る見るその顔の色も變つて行つた。

『殿も殿だ……』

かう母親は口癖のやうに言つた。

一七

七月になつてからであつた。ある日、使のものが古い衣と新しいのと一領づゝ物に包んで、急いでそれを仕立直すやうにとて持つて來た。

まさかことはるわけには行かないので、吳葉はそれを受取るには受取つたけれども、窈子に見せたら、何と言ふだらう。そのやうなけがららしいものは手に觸れるのもいやだといふだらう。さういふことをする人は他にあるだらうといふだらう。否、感情に強い窈子はそれを見たら、赫となつて、それを



ピリピリ破つて捨て、了ふかも知れない。吳葉は間に立つて困つてゐると、ちやう度そこに母親が来た。

『まア、殿は少しも來もせず、何といふ——』  
母親も呆れた。

『何ういたしませうか？』  
『さア、何うしたら——』

『兎に角一度お目にかけて方が宜しいでせうか』  
『さうぢやなう、見せた方が好いちやらう……。しかしあんまり好い氣ぢや』流石の母親もいつものやうに殿のため殿のためとばかりは言つてゐなかつた。

窀子はしかしそれを見ても、たゞそれをひつくり返して、その古い方の衣裳を曾てその身が眞心こめて縫つた時のことなどを思ひ出して、今の身の悲しさをそこに深く深く感じただけであつた。別にそれを何うしようとも言はなかつた。かの女の戀もその衣裳のやうに古びた。かの女はその汚れた衣をひろけて、その肩のところの縫目などを一つ一つ仔細に調べてゐるが、急にたまらなくなつたといふやうにはらはらと涙をその衣の上に落した。

（この縫目はこのやうにしつかりとしてゐるのに……）さう思ふと、かの女はたまらなくなつたのである。

『何うしたのだぞえ？』

母親はびつくりしたやうに窀子の方を見た。

涙は益々繁く霰でもあるかのやうにその衣の上に落ちた。

『さア、此方におよこし……。だから、そちに見せて好いかわるいかと吳葉も心配して言うてゐたのぢやけれど……。なう、窀子、そのやうに泣いたとて、何うにもなるのでもない……。さア、その衣裳を……。』母親は窀子の手からその涙に濡された衣裳を強めて取つた。そこに吳葉も入つて來た。そして引被ぐばかりにして泣入つてゐる窀子を幾重にもなだめた。  
兼家の衣は爲方なしにもどしてやることにした。

## 一八

さびしい秋が続いた。野分がすさまじく始終吹いたり、虫の音が悲しく枕近くきこえたりした。窀子は深くたれこめてのみ暮した。

いくらこひしいと言つても、その身の矜持までも捨て、かれの來るのを待つわけには行かなかつた。此身を思つて呉ればこそそこに縋つて行く心持も起つて來るのである。思ひもして呉れないのに……



坊の小路の女達や河原の人などと同じづらに持てあつかはれて、たゞ玩弄品か何かのやうに見られてゐるのに、いくら此方ではかり深く思つて見たところで効がなかつた。窈子はそこに深い深い失望を感じた。そしてそれは今まで感じて來た軽い失望のやうなものではなかつた。かの女はその悲しみと失望との中に、さびしい秋の自然が、山にたなびきわたつて眺められ雲のたゞすみひが、野分に吹きなびけられてゐる尾花が、夜もすがらきこえて來る虫の音が、またはさびしく降しきる軒の雨がすべて細かに織り込まれて來るやうな氣がした。

二三年前までならば、たとへ何んな苦しみがあつたにしても、また何んな悲しみがあつたにしても、いろいろなことでそれをまぎらせることも出來たであらう。此方からもさう深く思ひ込まずに、容易に男の胸にこの身を投げかけて行くことも出來たであらう。また吳葉の慰藉も、母の意見もそれをまぎれさせるに十分力があつたであらう。しかし今度の失望は、さうした生やさしい心の傷痕ではなかつた。窈子は既にあらゆる希望の憑むに足らないものであることを知つた。自分の眼の前に頼みにもし、力にもし、なぐさめにもして來たさまざまの幻影は、それは實際幻影で、到底手にすることの出來ないものであるといふことをかの女はつくづく感じた。青春の失はれて行く怨み、それも悲しかつたには相違ないが、しかしそこにはまだ慰めもあれば、縋るべきものもあつた。今度のやうに魂の底まで揺ぶられるやうなものではなかつた。

吳葉が何か言ひかけても、窈子はたゞ低頭してだまつてゐるやうなことが多かつた。

『本當に、もう少し氣を引立て、下さらなくつては……』

吳葉はある日、兼家がやつて來て、一晌ほどゐてそゞくさと歸つて行つたあとで言つた。

『そのやうに言はずにおいてお呉れ……。お前の心持はよくわかつてゐるから』

『でも……見てゐても、お傷はしうございますもの……』

『だつて、しようがない……』

『殿は？』

その交情が吳葉には心配になるのであつた。

『別に何でもない……』

『でも……』

早くそゞくさと歸つて行つたのを吳葉は心配した。

『だつて、お前、さういふことは成行にまかせるとより他爲方がないぢやないか……』

『でも……』

『もつとお前は私に殿の機嫌を取れと言ふの？』

窈子はじつと吳葉を見詰めた。



『さういふわけではございませぬけれど……』

『だつてお前……私の心が言ふことをきかないから仕方がない。昔から女子はそのやうに出来てゐると言つたとて、男に玩具具のやうに取扱はれて、それで言ふことはきいて居られるか、何うか。そちらもそれはわからぬことはよもあるまい——』窀子の眼には涙が光つた。

『それはわかつてをりますけども……』

『坊の小路なら、さういふことも出来るだらうけれども、この身は……この身は……さういふ女子とは違ふほどに……』

『それは、それは——』

吳葉も後には困つた。

『それはそちの心はわかる。そちは、この身を思ふあまりに、さう言うてその身のことのやうに心配して呉れるのだらう。それはようわかる……。この身とて……この身とて……それを望まぬではない……。なう、吳葉、この身とて……』あとは言はずに涙が堰を切るやうに窀子の眼から溢れ落ちた。

一九

陸奥の

つゝしか岡の

馬鞭草

来るほどをだに

待たてやは

よすかを絶ゆべき

阿武隈の

相見てだにと……

かう書いて来てかの女は遠い遠い父親を思つた。父親が行つてからもはや四たび年を重ねた。そのあとで生れた道綱も大きくなつた。母親は絶えず心配しては呉れる。しかし……しかし……。窀子はいつも遠い遠い父親を思つた。

父親のたよりは、一年に二三度は来たが、しかもそれは長い月日かけたものだつた。梅の花の咲く頃に向うを出たものが、卯の花も散りはて、子規の聲の老けた頃でなければ此方の手には入つて来なかつた。また秋出したものは、年の暮れでなければそれを見ることが出来なかつた。父親は容易に都に歸つて来さうにも見えなかつた。初めの年は白河の關から大方二日路のところ留つて、むかしの山の井の物語のある安積の府のことだの、安達の鬼塚のことだの、阿武隈川がその近くを流れてはるるが、ま



だ狭くて、流れも小さくて、とても歌枕に詠まれたやうな大河ではないなどと詳しく書いてよこしたりしたが、二年目からは、それよりも猶ほ五日路も六日路も奥に入つて、武隈の府から多賀の府の方へと出かけて行つたらしく、その消息さへ容易に手にすることは出来なくなつて了つたのであつた。

かの女はたまさかに来るその手紙を唯一の戀人か何ぞのやうにして待つた。またその來た手紙は、何遍も何遍も出して來ては讀むので皺にされたり汚れたりするのであつたが、しかしそれを丁寧に疊んで、一つ一つ來た日をかきつけて、貝の蒔繪の文箱の中に重ねて藏つて置いた。此頃では何うしてかこにその父親のあたりが戀ひしかつた。何故あの時無理にでもそのあとについて歌枕を見に行かなかつたかと思つた。かの女の眼には、その父親が遠く遠く薄を分けて蝦夷の地近くまで入つて行くさまがはつきりと見えた。武隈の二木松などもそれと見えた。父親の手紙にはいろいろなことが書いてある。この多賀の府からは歌枕の千松島はもはやさして遠くない。今までは用事が忙しいので行つて見る事が出来ずにゐるが、秋にもなつたら、是非とも暇をこしらへて行つて見るつもりだ……なども書いてある。宛子は父親をその松島の中に置いて、いろいろに想像して見たりなどした。

さもやこまつの

みとり兒の

絶えずまるるを

きく毎に

人やなくなる涙のみ

我身を海とたふとも

海松もよせぬ……

實際、宛子に取つては、その遠くにある父親と、その周圍に纏つて來てゐる幼い道綱とがその心をたまらなく悲しくさせるのであつた。道綱は今年數へ年の四つの可愛い盛りで、何ぞと言つて吳葉の手から宛子の膝へと凭りかゝつて來るのだつた。兼家のことなどをよく覚えて、「殿……殿……」などと小さな手で指さしたりなどした。

『まア、此子が……』

兼家が歸る時にいつも口ぐせのやうに言ふ言葉の一つを、それを誰も教へも何もせぬのに、室の隅で玩具を持つて獨あそびをしながら、獨言のやうに真似てゐるのをきいた時には、宛子はあきれてさう言はずにはゐられなかつた。

『あこは好い子ぢや……今言つたことをもう一度言つて見や……』

『……』

幼ない道綱はじつと母親の顔を見るやうにした。



『言うて見や……』

『すぐもどる……すぐもどる……きつとぢや……』

『まア、さう言うたか？ 殿が？』

『きつとぢや、きつとぢや、すぐもどるほどに、のう……』

二度目には母親がきいてゐるのなどはもはや頓着しないといふやうに、玩具具をもてあそびながら、頻りに節をつけて歌でもうたふやうにして言ふのだつた。

『吳葉来て見や』

かう宛子は呼んだ。

吳葉も流石にそれには驚いたといふやうに、

『まア……まア、あこさまの聰明なこと……』

『だつてあんまりぢやないかねえ……。皆なきいて知つてゐるのだねえ——』宛子はたまらなく道綱が可愛相になつた。それはたとへ無意識であつたにしても、さういふ言葉を、いつとなく覚えて、それを歌か何ぞのやうに節をつけて真似てゐるといふことは、何とも言へない一種の悲しさと心細さを誘つた。その後兼家がやつて來た時、その話をして泣いたことを宛子は繰返した。

かひもあらじと

知りながら

命あらばと

たのめ來し

言ばかりこそ

白波の

立ちも寄り來ば

問はまほしけれ

かの女はその長い歌を例の巧みな假名で懷紙に書いて、それを丸くして、向うにある厨子の上の段へと載せて置いた。二三日経つて、兼家がやつて來たけれども、かの女は顔をもそこに出さなかつた。兼家はそれをそつと取つて歸つて行つた。つゞいてそれに對するかへしの長い歌が來た。

その長い歌には何が書いてあつたらう。やつぱり男子の浮いた心が體裁よくかくされてありはしなかつたか。(お前は何故それでは打解けないのぢや。この身はお前を忘れたことはない。お前のことばかりを思つてをる。それをお前は何のわけもなしに、此身を袖にばかりしてゐるではないか。——寢覺の月の槇の戸に光残さず洩れて來る影だに見えずありしより疎き心ぞつきそめし——二人の仲がこのやうになつたのはお前にも責任があるではないか)かういふ風にその長歌は詠まれてあるのであつた。宛子は



じつとそれを深く考へた。

## 二〇

互に打解けても打解けられないやうな月日が長く長く続いた。さうかと言つて兼家は全くその姿をそこに見せぬといふのでもなかつた。またその身はやつて來なくとも、歌やら消息やらは常に使にもたせてよこした。

いくら悶えたからと言つて何うともならないといふやうな心持が次第に窈子の身の周圍に來た。苦しい時には黙つてゐるより他爲方がない。いくら思ひのまゝにしようとしたとてそれは出来るものではない。また、何んなにつらいと思ふことでも、悲しいと思ふことでも、時には身も亡びるかと思はれるくらゐいららすることでも、じつと落附いてさへ居れば次第にそれが薄らいで行くものだといふことなどもそれとなく飲み込めるやうになつた。これがこの人の世といふものだ……。誰にでもそれほどのこととはあるものだ。單に自分にばかりそれがあるのではない。現に、その證據には、あの子の宮にもその苦しみがあるではないか。またその妹の登子の君にも、それにもました戀の苦しみがあるではないか。かの女は次第にその身の悶えをあたりの人達に比べるやうになつた。

『本當だね、何處に行つたつて思ふまゝにならないのだねえ?』

ある日窈子はこんな風に吳葉に話しかけた。

『……………』

吳葉は點頭いだけで、何も言はずに、そのまゝ窈子の言はうとするとところを待つた。

『御門でさへ……………そのやうなことをなさるのですもの』

言葉を長く、いかにも歎かはいしいやうにして窈子は言つた。

『何の宮のことをござりますか?』

『そら、そちも知つてゐるではないか、登子……………きさいの宮?……………』

『あ、お妹さま——』

『あの方のことなど考へると、この身などはまだ好い方かも知れぬ……………』

『あの登子さまが何うかなさりましたか?』

『そちは知らぬか?』

『式部卿の宮さまのことではござりませぬか?』

『それはさうだけれども……………それは誰も知つてゐるけれど……………』

『何か他に?』

『御門が何うしてもお許しにならぬので……………』



『御門が……』

登子の姿を垣間見てから、何うしてもそれを大内裏に召すと言つて言ふことをきかなかつた。しかしそれにはその姉のきさいの宮の思わくもあることだし、またその一方では式部卿のこともあるので、それだけはたつて兼家の父がおことはり申上げたのであつたが、しかも御門は何うしてもその御心をひるがへさうとはせぬといふのであつた。

『まア……』

吳葉も流石に驚かずにはゐられないといふやうに聲を立てた。

『殿がおつしやいましたのですか』

『これはお前、誰にも言つてはならぬことだよ……』

宛子は聲をひそめた。

『お心安う……。それは決して他言などは致しませぬが、それにしても、あまりのことではございませぬか。つい、此間も小一條の女御のことであのやうに後の宮がお腹立におなり遊ばしたのに……。それにもお懲りあそばさずに——』

『姉はまだそんなことは少しも知らぬのだなどと殿は申してをられたれど……』

『だつて知れずには居るものですか』

『だから困ると申して居るのだけれど——』宛子が殿から聞いたところでは、それが登子の棲んでゐる東三條の邸の裏の空地の新しい對屋での出来事だといふのであつた。そこは邸の内ではあるけれど、ずつと奥深く人目の遠いところなので、裏から入つて來れば、誰も知るものはないといふのであつた。吳葉の眼にもその新しい登子のゐる對屋ははつきりと映つた。かの女はつい此間も宛子の用事でその對屋へと出かけて行つた。そこにはいつも赤い鼻をした召使の女がゐて、それが吳葉の持つて行つた文箱を受取つた。時には口で傳へねばならぬ用事があるほどに、此方まで來よなどと言はれて、一二度はその登子の几帳の陰のところまで入つて行つたことなどもあつた。それはその美しさに目も睜られるやうな君であつた。姉の後の宮も決して美しくないことはなかつたけれど、しかもその髪といひ、眼といひ、眉といひ、この妹君の方が幾段かすぐれてゐるのを否むことは出来なかつた。吳葉は昔の物語にある竹取の姫といふのもかういふ君であつたであらうなどと思ひつゝ歸つて來たことをくり返した。それに、かの女はいつもその裏の方から入つて行くのが例になつてゐるので、その竹むらに薄く夕日のさし込んで來てゐるさまなどをもはつきりと知つてゐた。それだけその話は一層かの女の心を惹いた。

『それに、もつと困ることがあるのよ……』

聲をはづませて宛子は眼を大きく睜るやうにした。

『……』



『あの卿の君も始終あそこから入つて行くのだからね……』

『まア……』

『何でも殿の話では、それが一つにならぬとは限らぬといふのだから……』

『それは本當でございますか？』

『殿がさう言はれるのだから、まさかつくりごとでもあるまい……』

『さやうでございますね』

『殿はのんきなことを言うて居られたけれども、登子の君がさぞお困りになつてゐらつしやるだらうと思つて、それを考へると、お氣の毒で……』

『本當でございますねえ』

『それにつけても、つくづく女子といふものほどはかないものはないと思つた……』

『そのやうなことはございませぬけれど……』

『登子の君が何んなに困つてゐられるかと思つて……。それも普通のことなら消息でも歌でもさし上ぐるのなれど、それも出来ず……。殿もそのやうなことはしてはならぬと仰せられたし……』宛子はその身に引くらべて男の浮いた心といふことを深く考へずにはゐられないのだつた。それは御門の仰せ言と申せば、違背出来ぬのは止むを得ないとしても、何うして人間には——男と女との仲には、さういふ

ことが起るのであらうか。さういふことは何うしても免れないことなのだらうか。女は思はれたが最後何うにもならないものだらうか。その身の意志などは少しも通すことが出来ないのだらうか。それに、宛子は登子と式部卿との仲がかなり濃厚であるのをよく知つてゐた。それは登子の消息や歌などの中に常にはつきりとあらはれてゐた。

『それにしても、御門はいつ姫君を御覽になつたのでせう』

吳葉は問うた。

『子供の中は御門もよう知つて居られて……別に、今までにはそのやうなこともなかつたのなれど、何でも殿の話では登子の君の大きく美しくなられたのを御覽になつたのは、つい一月も前のことだといふ話よ……』

『まア、さやうでございますか？』

『この頃、見違へるほど美しくなられましたからねえ？』

さう言つた宛子の言葉の中には、一月前の葵祭の棧敷に登子が同胞や姫達に雜つてくらべ馬を見てゐたのをそれと御門に目をつけられたのを悲しむといふやうな語氣がはつきりとあらはれてゐた。

『それにしても、小一條の女御さまは何うなされましたのでせう？』

『もう丸でお忘れになつたやうに、お出でにもならないさうだよ』



『まア、あれほど御寵愛なすつて居らつしやいましたのに……』

『だから、男子の心持はわからないといふのだよ。いくら深く思はれてゐるやうに見えるても、女子はすぐ秋の扇と捨てられて了ふのだからねえ！』兼家とその身のこともいつかそこに雑つて出て來てゐるやうに、『誰も皆なさうなのだのう……。それを思ふと、あの河原の人も氣の毒だね……。』

『本當でございます』

『もう此頃では、殿も餘りそこには行かないやうだからね……。』

『それはさうございませうとも……。あの大騒ぎをした男の子が殿の子だか何だかわからないといふぢやありませんか？』

『そんな話だねえ——』

『殿だつて、それをきいては、大抵いやになつてお了ひでせうから……。』

『それもお前、その男の子の父親といふのは、地下も地下のもので、東華門に詰めてゐるものの子息だといふ話ぢやないか……。』

『そんなことを申してをりますねえ！ 世間の人は？』

吳葉はこんなことを言つて笑つた。此頃でも殿と窈子との間はまださう打解けたやうには見えなかつたけれども、それでもさうしたいろいろな事件から離れたその二つの心が再び近寄つて行くやうになる

ことを吳葉は願はずにはゐられなかつた。かの女はつとめて窈子を慰めるやうにした。

## 二一

吳葉の國のもので、幼い頃から此處に來て仕へてゐた藤といふのが、今度縁談がきまつて、里から母が迎へに來たので、そのまゝ、暇を取つて歸つて行くことになつた。

吳葉は何年にも故郷に歸つたことはなかつたが、むしろ一生その身は此處につとめるつもりであるが、母に迎へられて國に歸つて行く藤を見ると、流石にそれを羨まずにはゐられないやうな氣がした。かの女の眼の前には何年にも目にしたことのない川に添つた、雲の白く靡いてゐる故郷の藁屋のさまがはつきりとあらはれて見えた。

そこでは今時分はもはや麥は刈られて、暑い日影が山ぞひ路の卯の花の白い叢を照してゐるだらう。藁家の屋根のぐしの上には葉の大きい蛇よけの草などが一杯に茂つてゐるだらう。だからだとそこから川へ下りて行つたところには、葎や真菰が青々としけつて、その向うに鰻を獲る舟が餌を置いたためにあちこちと徐かに動いて行つてゐるだらう。水が葎の根元のところにさゝやかな音を立て、紋を成して流れて行つてゐるだらう。夜は眞闇で、あたりに何もないうやうに見えるけれども、村の男や娘達は却つてそれを好いことにして、手を組み合はせたり肩を並べたりしてゐるだらう。靜かな川ぞひの里。螢の



里。夏になつてから名高い瓜の出来る里。あの畠から取つて来た熟して半ば赤くなつた瓜は、何んなにうまい漿をかれ等の口に漲らすだらう。それは都と比べては、派手な賑かな樂みはないだらう。くらべ馬の日の棧敷の賑はひ、祭のかへさの賑はひ、あの引出しの車の裾の美事さ、さういふものはそれは田舎にはない。しかし都の人達の内部のわづらはしさ！ 悲しさ！ つらさ！ ほこりの多さ！ あのやうに美しく派手につくつて居りながら片時も休む時のない心のみだれ！ それを思ふと、田舎がこひしい。水のほとりの里がこひしい。弟にはもはや嫁が出来て、それが髪に赤い布をかけて、弟と一緒に田に畠に鋤や鎌を持つて出かけて行つてゐるさうだが、さういふあたりのさまがなつかしい。父も母も達者ではあるが、もう老いて、かなり白髪も多くなつたさうだが、その白髪がなつかしい。几帳だの、かさね衣だの、廊下だの、蒔繪の文箱だの、花の枝につけた消息だの、口で言ふべきところを懷紙に書いてそれを厨子の上に置いたりする生活だの——さういふものに曾ては深くあこがれてそしてその野山を見捨て、はるばる出かけて来たのであるけれども、今では却つてそこに戻つて行く藤母子がたまらなく羨しいのであつた。(やつぱり田舎に生れたものは田舎でくらすのが好い。その方が氣安い。苦勞もない。よしまた苦勞があつたにしても、都の人達のやうにさういふ風にわるくこだはらない。その日その日をわびしく見詰め合つて暮すやうなことはない……)こんな風に思ふにつけても、都の生活が、上は大内裏の局達の生活から、下は羅生門あたりに住んでゐる乞食や盗人のさまざまで歴々とそこに浮んで來るのだつた。

藤はしかし田舎に戻ることを好んではゐなかつた。また田舎の土くれ男を夫に持つことについても餘り進んではゐなかつた。

廊下の暗いところで涙などを流してゐた。

『何を泣いてゐるの……。京などいつまでたとしてしようがないではないか。それよりも田舎の方が何んなに好いか？』

『でも……』

『でも、お前は京の方が好いと言ふの？』

『だつて折角京のことがわかつてまるつたのですもの……』

『でも、京にゐたつて好いことはありやしないよ。それよりも田舎に歸つて、身をかためる方が何んなに仕合せか知れやしないぢやないか……。朝起きると、路ばたの草にも綺麗な露が置いてゐるのだもの……』

藤はそれでも頭を振ることを止めないのであつた。藤は何んな生活でも、田舎の草深い中にくらしてゐるより京の方が好いと言ふのであつた。御門や後の宮の御車を見ることが出来るだけでも好いといふのであつた。かの女は別れて行くことを悲しんだ。



思ひのまゝにならない世の中だといふことを吳葉はつくづく感じた。何處に行つたつて思ひ通りに幸福に満ち足りて暮してゐる人達はない。そこにも此處にも悶えがある。不満がある。悲哀がある。御門をはじめとして、後の宮にも、局にゐる人達にも、また大きな邸を構へて前を追うて暮してゐる人達にも、やはり満ち足らぬ悶えがある。吳葉は藤の心持の中にその身の悲哀が深く雜り合つてゐることを思はずにはゐられなかつた。曾て窈子が『それがお前、この人間の世の中といふものだよ』と言つた言葉が染々吳葉にも思ひ出された。

『それでは——』

『健かに』

かう互に言ふ言葉がやがて藤と吳葉との間に取交された。

藤は母親に寄添つて、止むを得ずに、窈子にも家の人々にもわかれを告げて出て行つた。

窈子もそれを廊下のところまで見送つて行つたが、やがてそこからもどつて來た吳葉に向つて『うらやましいね、田舎の静かなところに行けるのは？』ふと吳葉の眼に涙が一杯にたまつてゐるのに目をとめて、『お前も、田舎に歸りたくなつたのね？』

『……………』吳葉の眼からは涙がほろほろとこぼれ落ちた。

『お前の心持はよくわかるよ……………でも、私を捨て、行つてお呉れでない、ね、ね……………』と窈子はそ

の顔を覗くやうにした。野から山へと青嵐をわけて歩いて行く藤母子の姿が今しもはつきりと二人の眼に映つて見えた。

『本當にお前は私を捨てないでお呉れ……………』

『……………』

『ね、ね』

窈子は重ねて言つて、『いつか、その中一緒に観音さまにお詣りする時が來るだらうから、その時はお前の田舎にも行つて見たいと思つてゐるのだから……………』

吳葉は涙を斂めて、

『勿體ない……………』

『お前にゐなくなられたら、それこそこの身は何うしたら好いかわからなくなるのだから。それは母者はよう見舞うて呉れるけれども、本當に私の心を知つてゐて呉れるのはお前ばかりだからね。……………田舎も戀ひしいだらうけども……………』

『勿體ない……………』

吳葉は別な意味でまた涙組ましい心持になつて行つた。主従と名には呼ばれてゐるけれども、同胞にも劣らないやうな窈子の平生のいつくしみがそこにありありとくり返されて來た。



『その中にはお前にだつて好いこともあるだらうし……、あのやうな殿でも、今に一の人にならぬとも限らぬし……』

吳葉は言ひかけた窈子を遮つて、

『もう、もう、そのやうなことは仰有らずにゐて下さいまし……。この身は初めからさう思つて此處に參つて居るのでございますから……。この身は一生お傍は離れないつもりで居りますほどに……。ただ藤の母親に逢つて、あちらのことをきいたりしたので、田舎がこひしうなつたのですけれども、それは深く思つてゐるわけでもござりませぬほどに……』

『ほんに、さうしてお呉れ……。お前なしでは、とてもこの世の中の心の荒波はわたつて行けないのだから。……とても……。とても……。』

窈子も袖を面にあてた。

『本當に心安うおぼせ——私のやうなものが今になつて田舎にかへつて行つたと何になりますものか。田舎のものがもはや相手にしては呉れませぬほどに——この身はいつまでもお傍に——』吳葉もいろいろなことを思ひ出したといふやうにして泣いた。

## 三三

長雨が降り續いて、町の通りも深い泥濘になり、網代車や絲毛車の大きな輪が、牛かひや牛やそこらを通る人だちに泥を飛ばせた。通りは跣足でなければ歩けないので、めつきりと人通りが減つた。大比叡の裾が少し明るくなつたと思つたのも、それもほんの纒の間で、また雲が蔽ひかゝつて、しとしとと雨が降り頻つた。

窈子は物忌を違へるために、里の家の方へと出かけて行つたが、その雨のために容易に戻つて來ることが出来なくなつた。

『もはや雨師の杜に勅使が立つさうだ——』

『ほんに、かう長雨がつゞいては、洪水が出て困る……』

さうした話がそこでも此處でもくり返された。何でも山崎の向うの方は、水と岸とが同じぐらゐの高さになつて、今にも土手が切れさうなので、舟の往來すらも禁められてあるなどといふ噂が傳へられた。折角植ゑた稲が全く水の中に浸つてしまつたところなども到るところにあるといふことであつた。不圖窈子はある事を耳にした。

『それはほんど?』

『ほんたうでございます』

何處からか聞いて來た吳葉は、かう言つてあとを残した。



『でも登子の君がそのやうなところにあるといふのは?』

『ですから、この身も何うかと思つて始めは本當にしなかつたのでございますが……やつぱりまことでございます。何でも、一時、身を忍ばせてゐらるゝのださうでございます……』

『でも、西の邸と言へば、すぐそこぢやないか。それに、あそこは大殿がおかくれになつてから、草が茫茫と生えたまゝにしてあるといふぢやないか。それなのに……』

兼家や中宮の妹で、御門にさへ思はれてゐる登子の君が、そのやうな廢屋に來てるとは窀子には容易に信じられなかつた。

『でも本當でございます』

『お前、誰に聞いた?』

『さつき、下のものが何かこそそと話しては、大事でもあるやうに致してをりますから、何うしたのかと思つてきいたのでございます。さうしたら、末の君だつて申すぢやございませんか。それも内所にして置かなければいけないので……それで——』

吳葉は聲を落した。

つい今から一月ほど前、式部卿の宮の突然の死は、京の人達の耳を驚かした。窀子は中でもことに驚いたもののひとりであつた。かの女は一番先に登子のことを考へた。つゞいて兼家がやつて來た時、

それとなしに聞いて見た。しかし何うしてか兼家もはつきりしたことを言はなかつた。『さア、それはわからぬが、そのやうなことはあるまいと思ふな? 平生がお弱い方だつたから、急に風邪を引いたのがもとになつたのらしいな。そのやうなことはあるまい。失戀して自づから死んだなどいふことはあるまい……。宮はさういふ風に意志の強い方ではなかつた』などといくらか他にそらすやうにして言つた。登子のことに關しては『まア、そのやうなことはあまりに深くきかぬ方が好いな……』かう言つただけで兼家はそのまゝ口を噤んで了つた。

しかし世間ではいろいろなことを噂した。御門の戀の犠牲になつたのだなどと言つた。宮の死はおそれ多いが自ら藥を飲ませられたのだなどと言つた。またその末の君がそれがため絶望のどんぞこに墮ちて氣も狂ひさうになつてゐるのを、無理に内裏に上げるやうにしてゐるので、そこにもまた一悲劇持つるに違ひないなどと評判した。窀子にしても真相がわからぬので、ひそかに心を痛めてゐるのであつた。それが——その末の君の登子がひそかにその西の邸の廢宅のやうになつてゐるところに來てゐるといふのだから、窀子の容易に本當にしないのも無理はなかつた。

『それで、お前はそこに行つて見たと言ふのかね?』

『さやうでございます』

『何うかなすつていらした? 別におかほりもない御様子だつたか?』



『ちよつと後姿をお見かけ致しただけですから、それまではつきり致してをりませんけれど、皆人の言ふところでは、別にこれと言つておかはりもないさうでございます……』

『それはうれしい……』かう言つたが、宛子は立つて厨子の上から硯箱を取り出して、それに例の美しい假名で歌を書いて、それをそのまゝ西の邸へと持たせてやつた。

すぐ折かへして返事が来た。それには登子の上手な手で、

天の下

さわぐ心も

大水に

誰も戀路に

ぬれさらめやは

と見事に認められてあつた。宛子はそのまゝじつとしてはゐられなかつた。廢址のやうな中にその失戀の身を埋めてゐる登子を目のあたりに見ずにはゐられないやうな氣がした。皆なの留めるのもきかずに、吳葉をつれて、そつとその廢宅に行つて見ることにした。

さみだれが降り頻つた。容易に止みさうにもなかつた。卯の花の白く籬に咲いてゐるのがそれと夕暮近い空氣の中にくつきりと出てゐた。わざと他に知れないやうに、裏道になつてゐる草の露の中をかれ

等はそつと拾ふやうにしてたどつた。古い藺笠。小さな裏。ともすれば女沓が泥濘の中に埋れさうになるのを辛うじて縫ふやうにして二つの姿は半ば潰れた門の方へと入つて行つた。

門に入つてからも、かれ等は足場のわるいのに苦しまずにはゐられなかつた。そこにはつい此間まで庭の一部分であつた池があつて、藻だの萍だの芹だのに雨が頻に降りかゝつてゐるのを見た。あたりはひつそりしてゐた。成ほどこゝいらはちよつと他にはわかりさうにも思はれなかつた。茂つたまゝ延びたまゝに樹が一面にあたりを暗くしてゐた。

池の周圍をぐるりと廻つて、やつとその對屋の階段のところへ行つて、そこにそのかぶつて來たぬれた藺笠を脱いだ。かれ等はあたりを見廻した。

誰も出て來るものもなかつた。それも理だつた。今時分、降りしきる雨を侵してこんなところにやつて來るものがあるなどは誰も思ひもかけないことだつた。かれ等は爲方なしに、そつとその階段をのぼつて行つた。夕暮はいつか夜にならうとしてゐた。

『お前、そつと入つて行つて、きいて見て御覽……』

宛子は小聲で言つた。

吳葉は入つて行つた。廊下の小さな欄干に添つてその影はすぐ向うに消えた。

宛子はひとりじつと立盡した。雨がかなり強く音を立て、降つてゐる。さつきまで見えてゐた卯の花



の白さも、もはや夜の空氣の中にぼんやりと微かになつて了つた。宛子は何とも言へないさびしさと悲しさと心細さにと襲はれて、戀といふものの闇が、そこに恐ろしく悲しくひろけられて來たやうな氣がした。

雨の縦縞がその闇の中に微に線を引いてゐるのが覗かれた。

静かな足音がした。吳葉がもどつて來た。

小聲で言つた。

『びつくりしてゐらつしやいました……』

『さうだらうね?』

『別におかわりにもなつてゐないやうでございます——』

『それで——』

そこに登子のおつきの常葉といふ中年の侍女が出て來た。

『何うぞ——』

『よろしいのですか?』

で、三つの影は音も立てずに、周圍を取巻いた小欄干に添つて靜かに動いて行つた。

そつと妻戸を明けて入つて行くと、そこは周圍の廊下を几帳でしきつたやうなところで、小さな結燈

臺が既に明るく點されてあつた。そこは侍女の常葉のゐるところだつた。

軽い裳づれの音がしたと思ふと、いきなりそこに登子とその美しい顔を出した。

『まア、よく……』

『まア——』

二つの美しい聲がそこに取り交はされた。

かれ等はすぐ奥の明るい室の方へと行つた。

『本當に、どんなに心配したかわからないのでございますよ』

『それでもよくこんなところがわかりましたね』

『家がすぐそこなものですから……』

『あゝさう、それでわかつたの? それでいつから來てるの?』

『忌違へに來たのですけども、この雨で、とても……』

『ほんに、此雨は……』

短かい言葉しか二人とも話せないやうな時間が暫しつゝいた。

宛子は思ひ做しか此間逢つた時とはぐつとやつれて元氣がなくなつてゐる登子を見た。

『お瘦せになりましたねえ?』



『さう……』

登子は微かに笑つた。

相對してゐる中に、いろいろなことが次第に飲み込めて來た。式部卿の宮の死は、さうだとは登子は決して言はなかつたけれども、しかし藥を仰いで死であるといふことはそれと察しられた。また登子がかうして他に知られないやうに廢宅に身を忍ばせてゐるといふことは、やつぱり世間でも言ひ窀子も想像してゐたやうに、内裏からの迎へを一時避けなければならぬやうな位置に登子が身を置いてゐるからであるといふことがわかつた。窀子は何う慰めて好いかわからぬやうな氣がした。

『思ふまゝにはならぬもので……』

言ひかけて止した登子の眼には涙が光つた。

『……』

『でも、かういふさだめでござらうほどにのう！』

言ひかけて、急にその時のことを再びまざまざとそこに思ひ出したやうに、『でも窀子どの、あはれと思つて下さい……。あの時にもお目にかゝることが出來ず、はふりの目にも——』

『ことほりでござります、ことほりでござります』

窀子はかう早口に言ふより他爲方がなかつた。

『それはのう……』登子は裳の下から袖を引出して目に當てたが、暫くしてから、『よう、今まで生きてゐたこの身も思つてゐるのです、腑甲斐なき此身、生きてゐたとて何うすることも出來ない此身……なぜ、此身はともかくもならなかつたのかしら？』

『まア、そのやうには——』

『窀子どの、ほんたうに何遍死なうと思つたか知れない……。一度はすでのこと刃をこの咽喉に當てようとした時に母者にとめられた——』

『まア……』

窀子も流石に驚かすにはゐられなかつた。

『でも、死きれぬ身、何うしても死きれぬ身……それが、窀子どの、この身のつたない運命なのだから……。何うすることも出來ない身だから……。』つまり御門でなければどうにでもなるが、さういふさだめの身になつた上は、いくら考へて見たところで、またいくらもだえて見たところで徒勞だといふのだつた。否、姉の中宮に對する心づかひなども細かくその中に籠められてあるのだつた。やはり窀子が兼家のために無理に其方に伴れて行つたのと同じことだつた。

『女子といふものは、さだめつたなく生れたものなればのう——』

『ほんに——』



窈子も身につまされずにはゐられなかつた。

『女子といふものは、何のやうに思ひ込んだところで、何うにもならぬし、いくら望ましくないと云つても、それが通るわけなし——』

それは窈子と兼家との關係とは比すべくもないけれども、それでもまゝにならないといふ心持は似てゐるので、窈子には登子の心持がよくわかつた。後には窈子は登子を透してひろい人生に對するやうな氣がした。

登子は式部卿の宮の歌やら詩やらを出して見せた。一番最後によこしたといふ手紙などを蒔繪の文箱の底から出して見せた。詩は當時にあつても名高い作者だつたので、墨色といひ、字のくばり方と言ひ、また詩の出來榮といひ、何ひとつそつがなかつた。歌も行成流の假名が見事だつた。

手紙には別に大したことも書いてなかつた。逢ふつもりでゐた日に止むを得ない用事が出來て、その美しい眉に接することが出來ないのは悲しい。しかし悲しいことの多いのは——思ひのまゝにならないことの多いのは、この世の中の習ひだ。何もくやむことはない。心長く時の來るのを待つより他爲方がない……。さういふ意味のことがたゞ短かく書いてあるのだつた。しかし登子には、その思ひのまゝにならないといふことがたまらなく悲しかつた。宮はその生れこそ一の人の家柄ではなかつたけれども、御門とはすぐその上の兄君に當つてゐられたのであつた。母方の一族さへ時めいてゐたならば、御門よ

りも先きに位に即くべき資格を持つてゐられたのだつた。それに、宮は先帝に可愛がられたので、一時は今の御門の母方の人達が、何のぐらゐる眉を蹙めたかしのだつた。登子はその思ひのまゝにならないといふ言葉の中にさうした事實を持つて行つてあてはめた。泣いても泣いても盡きずに涙が出來た。

後には窈子は慰めるのに言葉がなくなつた。

暫くの間、沈黙があたりを領した。

そこに常葉が高つきに羊羹を入れて運んで來た。

『他の人なら、とてもこんな眞似は出來ないのなれど、御身ゆえ、何も彼もさらけ出して、このやうに泣いて了うた……。他の人が見たら、何うかしたと思ふに違ひない……。』登子はさびしく笑つた。

『まア、あまりに心をつかひあそばすな。御心配の時には、いつにてもすぐ參上致しますほどに——』

『さぞ見にくかつたでせうね……。』登子は繰返して言つた。

『そんなこと何とも思ひも致しません。誰れだつてさういふ場合には泣かずにはゐられませんが……。』

『さういふて呉れるのはあなたばかりですからね……。本當に力になつて呉れるものなんかないのですから……。』



登子は實際さびしいらしかつた。姉の中宮からもその時以來わるく嫉妬の眼で見られるやうになつたばかりでなく、いろいろな方面からいろいろな壓迫を強く受けた。御門はまた御門で、式部卿の宮が薨去せられてから、一度も登子の姿を見ないので、もしや何か事があつたのではないかと頻りに内意を九條の家へと傳へた。

母や兄やまたはその周囲にゐる人達は表面では困つたことが出来たやうにも言つてゐるが、内心では小一條の女御に對する御門の愛が、中宮には戻つて行かなくても、この末の君に移つて行つたことを寧ろ祝福するやうな態度でゐるのであつた。それを登子は徐かにしみじみと窈子に話した。

雨は降り頻つた。軒から落ちるあまだれがすさまじくあたりにきこえて、サツと風が物凄く樹を鳴らした。何か物の怪でも來はしないかと思はれるやうな氣勢があたりにした。

結燈臺の灯はチラチラした。

二人は思はず顔を見合せて戸外にざわついてゐる物音を聞いた。暫く経つた。二人は何も言はなかつた。

登子が始めて口を開いたのは、猶ほそれから暫く経つてからであつた。

『あまりに泣いたので、宮の御魂が來られた!』

『……………』

『たしかにさうだ……。たしかに宮の足音がきこえた——』

『……………』

また二人は黙つて耳を敵てた。サツと風雨がまた庭の樹を鳴らした。それと同時に、微かに人の忍び寄つて來るやうな氣勢がした。それは窈子にもわかつた。普通ならば、さうした風や雨や樹木の葉すれや竹の葉のなびきに埋められて、とてもきこえる筈はない物の音が靜かにそこに寄つて來るのであつた。

登子の顔のわるく青白く、眼がじつと一ところを凝視してゐるのを窈子は見た。おそらく自分の顔もそれと同じく蒼ざめてゐるのだらうと思つた。すさまじく風雨が戸外に荒れて居るのがはつきりとわかりながら、その中に沓の音の近づいて來るやうな音は猶ほきこえた。

急に登子は恐ろしい物の怪にでも襲はれたやうに裳の袖を頭から引被いて了つた。近くにある方の結び燈臺は風もありはしないと思はれるのに、ふつと消えた。窈子も思はず、あ! と聲を立てた。

同じやうにしてかの女も裳を被いて了つた。

それから何のくらの経つたか、半晌ほども経つたか、それとももつと長く経つたか、二人が氣がついた時には、吳葉と常葉とがこれもやつぱり何物にか襲はれでもしたやうにしてそこに來ておどおどしながら坐つてゐるのを見た。それでも外のざわつきはもはや靜かになつたらしく、たゞ風雨の氣勢だけが



それと遠くきこえるのだつた。

『何うしやつた？』

登子は始めて我にかへつたといふやうにして常葉に訊いた。

かれ等の言ふところに由ると、何か奥で人の叫ぶやうな氣勢がしたので、何事かと思つて常葉を先きに、そのあとから吳葉がつゝいて驅けるやうにして入つて來ると、結び燈臺が消えてゐて、登子と窈子と引被いて打伏して了つてゐるのに度膽をぬかれて、かれ等もそのまゝそこに打伏してしまつたといふのであつた。『こわや、こわや……』常葉の顔はまだ蒼青だつた。

あとからついて來た吳葉にはそれは見えなかつたが、常葉には白いふわふわした焰のやうなもの——よく見ればそれは衣冠であつたかも知れなかつたやうなものがそこにひろがつてゐたのが見えたといふのだつた。それを見て常葉はすぐ打伏したといふのだつた。吳葉は吳葉で、二人のみならず常葉までがさうして引被いて了つたので、かの女も急に恐ろしくなつてそのまゝ、隅のところに身を寄せたといふのだつた。

『たしかにそれに違ひない……宮が來られたに……』

登子は確信したやうに言つた。

『こわや——』

常葉はブルブル身を顫はすやうにした。たしかにあれが、あの白いものが宮だつたと思ふと、後から水でもかけられるやうな氣がするのだつた。『あまり泣いたものだから……』それで宮がやつて來られたのだ。登子は次第に元の心の状態になつて行つた。

窈子にしても吳葉にしても、この物の怪のすだく風雨の闇の夜を、いくら近くともとても歸つて行くことは出來ないといふので。——また登子の方にしても、さびしくてとても常葉と二人きりでは居られないからと言ふので、僕を使にやつてその旨ことはらせて、二人は一夜をそこに過すことにした。それから窈子はまた一しきり話に耽つて、太秦の蜂岡寺の丑の刻の鐘が風雨の中にきこえる頃まで起きてゐたが、たうとうそこに蚊帳を低く吊つて夜のものを並べて眠つた。

### 二三

雨は猶ほ幾日も止まなかつた。芦や藺は高く繁り、それに雜つて名も知れない黄色い花が咲いた。杜若の厚い緑葉には、白いまたは紫の花が咲き添つた。夜は螢が人の魂か何かのやうに一つ二つ青白いひかりをあたりに流して行つた。

此方の裏門のところにはよく窈子の姿が見えた。小降になつた時を選んで、かの女はいつもそつと隣の廢宅へ行くのだつた。かくれ家では多くは歌などを詠んだりして世離れて暮した。幸ひに誰もかれ



等の静かな生活の邪魔をしなかつた。兼家も物忌で館にばかり引込んでゐるらしかつた。たまには歌を入れた文箱などが届けられては来るけれども、たゞ雨のわびしさが歌はれてあるくらゐのもので、別にかの女に逢ひたいと思つてゐなかつた。道綱はもはや七つになつたので、母のあとを追はず、おとなしく廊下で竹馬などをして遊んで暮した。

少しくらゐる鳴らしても差支あるまいといふので、時には爪音を低くして登子と二人で箏の琴を弾いたりなどした。鬱陶しい空合が絶えず眺められた。蝸牛が階段から廊下へとのぼつて来る丸い欄干に二つも三つも貼されてあつたりした。

ある時登子は言つた。

『今はかうして世離れて、誰にも礙けられずに暮してゐることが出来るけれど……これもいつまでかうしてゐられることやら——』

『ほんとに——』

宛子はかう言つて登子の方を見て、『何か、そんなことでも——』

『兎に角いつまでも此處にかうしてゐられないのは、わかつてゐるのよ。それが、この身の運命ですもの』

『……………』

『今日もそんなことをつくづく考へた……』

宛子は何とも言へないのだつた。他から見たら、むしろ羨むべきことで、何うしてさういふ風に悲觀されるのだらうと思はれるくらゐなのだが、しかもその心持は宛子にはそれとはつきりわかるのだつた。そこに女の悲しみと苦しみがあつた。かの女もさうした苦しみを經て來たことをくり返した。『何うしてかう女子といふものは虐けられてゐなければならぬのだらう。女子は生れた時からさういふ風に運命づけられてゐるのか？』その話はいつもそこへと落ちて行くのだつた。

あれ果てた池には蛙が頻りに聲を立て、鳴いた。それはよく雨に伴つてきかれた。蓮や麥の葉に水がたまつて、それが珠でも轉ばしてゐるやうに見えることもあつた。ある夜は頻りに時鳥が闇を破つて鳴いて行つた。大比叡でも雨の晴れる護摩を此頃毎日あけてゐるといふ。『山でも少し見えて呉れると氣が晴れるのですけれどもね』廊下のところで常葉がこんなことを鼻の大きい下衆に言つてゐるのも宛子だちには佗しかつた。それでも何うかすると、薄ぼんやりと夜中に月が出て、草に亂れた廢宅がさびしく微かに照されてゐたりなどした。

## 二四

登子と宛子との間にはをりをりこんな話が交換されるのだつた。



『何うしてかう女子は虐げられなければならないのでせう?』

『これと申すのも、女子が内のみかくれて居るからではないでせうか。もつと世の中に出て行かなければならないのではござりますまいか。……それは慣習と申せば、それまででござりますけれども……その慣習にばかり従つてゐるからいけないのではござりますまいか……』

『それはほんにさう思ふけれど』

登子は深く考へるやうにして、『でも、それは運命のやうなものぢやほどに……。何うにもならないものぢやほどに。難有い彌勒の世といふのにでもならなければ、とても望まれないことではないか?』

『それはたしかにさうでござりますけれども……さうかと申して、その彌勒の世と申すやうな世の中は、いつ参るのでございませう? 放つて置いても、ひとり手に参るのでござりませうか……?』

『さういふことは、無明の身にはわかりませぬが……』

『しかし、やはりそれは私どもがしなければさういふ風になつて行かないのではござりますまいか。私どもが築き上げることが必要で、さういふことをしなければ、いつになつたとてさういふ世の中はやつて来ないと思ふのですが……さういふ風に、お考へにはなりませんか?』

急に登子は悲しさに、

『御身は宮と同じやうなことを言ひやる!』

『宮と申すは?』

『卿の宮……』

『まア、さやうでございますか。宮はそのやうなことを申して居られましたか。そんなことはちつとも存じませぬ。初耳でござります……』

『宮はよくさういふことを申して、憤られて御出でであつた。今の世の中に、さういふことを考へるものはない。快樂を追うものでなければ、名を求めもの、権力を求めもの、さういふものばかりぢや。そしてそれは何のためかといへば、皆な自分の我儘を振舞うためにさうしてゐるのぢや。ひとりとして人間のため、彌勒の世に進むために力を盡してゐるものなどはない……。それを思ふと、歎かはしいと常に申して居られた!』その故宮に對する考へが急に胸にあつまつて來たらしく、登子は裳の袖をおもてに當てた。

二人ともだまつて了つた。まゝにならぬ苦しみが深くかれ等の胸を塞ぐやうにした。

『本當に、さういふ新しい考へをお持ちになつたのでござりますか?』

暫くしてから宛子は訊いた。

『本當もうそもない……。この身が常にきかされたことぢやに……。この身にしても、宮から何のやうにいろいろなことを教へられたことか。佛のことなどでも、深う深う知つて居られた……。今の世の



中では、大比叡の坊主どもが快樂のみを説いて、何うせ思ふまゝにならぬ世ぢや。これがさだめぢやと言つて、苦しみをそれで蔽うてるが、それは佛の本當の道ではない……とよう言つてをられた。佛はわれぢや。この身ぢや。そなたぢや。とよく言つてをられました……』

『ほんに、そのやうに新しい方でございましたか。それなら、一度でも御目にかゝつて置きたうございました。この身はまたこの身で、今の世の中には、そのやうなことを考へて居らるゝ方はない。詩歌管絃……蹴鞠……酒……女子……さういふものより他心にかけて居るものはないと思つて居ましたのに……。』

『宮はこの世には事なくて生きてゐらるゝ方ではなかつた……』

登子はいろいろなことを思ひあつめたといふやうにして言つた。登子の眼には、網代車を夜暗に細い巷に引入れる人だちだの、大内裏の局の女房に人知れず通つてる人だの、夜もすがら詩歌管絃に遊蕩のかぎりをつくしてゐる人だちだのが——またはこつそりと姫を圍うてる坊主や、宮女に花のやうに取巻かれてゐる人だちなどが、はつきりとそこに映つて見えるのだつた。ことに、何も知らない女子が、長い間の慣習のためにそれをあたり前と考へてゐるばかりではなく、女子といふものはそれで好いもの、いかやうに男にもてあそびものにされても好いもの、むしろそれを利用して、その身も快樂と贅澤とに耽るべきものと思つてゐる今の世の中のさまがそこに一つの繪になつて展けられて來るのだつた。

『情ないことぢやのう……』

『ほんに——』

二人はかう深く歎かずにはゐられなかつた。

しかしかうした二人にしても、さういふことばかりを問題にしてはゐられないのだつた。やつぱりその生れ出でて來た今の世の中に雜り合つて、悲しみには泣き、喜びには笑ひ、争ひには争はなければならぬのだつた。

『それは、私のやうなものがいくら申したとて、そんなことは小さなこと——何うにもならないことで、一すぢの烟を立てるにすらあたひしないものですけども……それでも、この心持は捨てずに持つてゐたいと思つてゐるのでございます……』などと靜かな調子で窈子は言つた。

ある時は登子はまたこんなことを言つた。

『でも、さう言ふと、あなたなどには効ないものに思はれるかも知れねど、この身などの運命は、もはやちやんときまつてゐるのだから……。慨いたとて、悲しんだとて、何うにもならないのだから……』

『……』

『この世のためなどといふことは、口ではいかやうにも言へるけれども、かよはい女子の身では何う



にもならないことなのだから……。やはりこの身とはかない酔生夢死……』

『……………』

『やはり、運命に従うといふことより他に、女子の行く道があらうとは思はれぬ……』

その言葉のかけには、大内裏からの強い壓迫がそれとなくきかれるのだつた。窈子は何う慰めて好いかわからなかつた。

『それは世間では羨しいと思うたとて、それが何？ え、窈子さん、あなたはさうは思はない。内裏に入つて、あの藤壺の一室に大勢に侍かれるといふことは、それはこの身の得がたい出世として、また一方では小一條どのや向う側にゐる人たちに對する兄達の立場として喜ばれることかも知れないけども、この身としては何が喜び？ え、窈子さん。私にとつてはこの身を葬るつか穴ではありませんか。一度入つたら、もう再び出て來ることの出來ない墓場と同じではありませんか……』

『……………』

何も言ひ得ない窈子の眼からはひとり手に涙が流れて來た。

『でも、ね……。窈子さん、泣かずにきいて下さい。あなたの他には、誰ひとりかうした私の心をきいて呉れるものなどはないのだから……。窈子さん、この身はもう心はきめてをるのです……。さうなる身とあきらめて居るのです……。何うせ、宮のあとについて行くことすら出來ない身——』かう言ひ

かけて登子は急にたまらなく悲しくなつて來たといふやうに、いつもなら引被くのが慣ひであるのに、顔を上に向けて、ひとり手に涙が兩方の眼から行をなして落ちて來るのに任せた。

『何うせ……何うせ……この身は生きた屍も同じ身……窈子さん、つか穴の中に入つて行くのも、この身にふさはしい……』言葉が涙にさゝえられて満足には出て來なかつた。

その悲しさが窈子にもつくづく思ひ當つた。自分の時にはその身だけがさうした悲しい運命に落ちたと思つたのであつたが、今では、それがすべての女子の悲しみであるといふことがわかつた。

二五

使のものが文箱を持つて來た。それを明けて見た窈子は、すぐ筆を取つて、返事を書いてそれをその文箱の中に入れた。

『これをわたして下さい』

持つて行つて戻つて來た吳葉に、

『お前も一緒に行つてお呉れ……。いよいよおわかれになるのかも知れないから……』

『そんな御様子でございますか』

『いゝえ、別に手紙には、さう詳しいことも書いてなかつたけれども、もう一度ちよつとなりと、お



目にかゝりたいなどと書いてあつたから……』

『それでは、いよいよその時がまゐりましたのでございませうかねえ！』吳葉にしても胸がとろろかすにはゐられないのであつた。

『兎に角支度をしてお呉れ！』

やつぱり雨が頻りに降つてゐた。今年は何うして雨が降りつゞくのだらう。普通ならば、もはや五月も終りに近く、雲の縫ひ目もところどころ綻びそめ、山の裾なども見えそめ、時に由つては明るい月影が野にも山にもさしわたつて、青空が人の顔にも衣にも、車にも、または騎馬の侍にも、調度掛を携へた大宮人にも、ところどころ崩れた築土にも快よく映るのであるのに、またしても雨、雨、雨。容易に晴れようとはしないのであつた。

窈子だけは別に變つたことを見出さなかつた。此間などとは違つて登子は靜かに落附いて話した。始めの中は、これはこつちの考へ方が間違つてゐたので、たゞ無聊のまゝにかうして呼ばれたのに過ぎないのではないかといふ風にすら思はれた。

しかしその靜かさは、嵐の中にふくまれてある一つの靜けさであるといふことがやがてわかつて來た。窈子は胸の轟くのを感じた。

『でもね、御身が度々たづねて下すつたので、何んなに慰められて暮したかわからないのです……本

當に、何うお禮を申したら好いか……？』

落ちついた登子の言葉には、別れを潔くしようとするやうな努力がはつきりと讀まれた。

『それでは……』

窈子はじつと登子の顔を見つめるやうにして言つた。

『いつまでも此處にはゐられないやうなわけで……』

『では、内裏に……』

『え……』

登子はたゞ點頭いた。それだけでもかなりの努力であるらしかつた。

『……』

『まア！』とか『それは……』とか窈子は言ひたかつたのだけれども、言葉は口から出て來なかつた。

暫く經つた。

『それで、こゝをお出ましになるのは、いつでございますか？』

窈子はやつと訊いた。

『それが、もう慌たゞしいので……。出来ることなら、もう一夜くらゐ、御身とわかれを惜しみたい



などと思つたのですけれども、それも出来ない……」もはや内裏から迎への車さへ来れば、いつでも出かけて行かなければならないと言ふのであつた。

『まア、そんなに早く……』

『でも、何うせ、行かなければならないものなら、いつそ早く行つて了ふ方が……?』

『……?』

『これはほんにつまらぬものだけでも、このわびすまひにあなたがよく来て下さつたといふ記念に……』かう言つて、登子は自分が平生用ゐてゐた蒔繪の硯箱をそこに持ち出した。

『そのやうなこと……』

と窈子が辭退するのを押して、

『蒔繪はこれでも好いのだし、螺鈿もいくらか入つてゐるのだから……。いいえ、これは言はずにさし上げるつもりだつたけれども……』急に登子は顔を低頭かせて、『これは、……これは……宮が特にこの身のためにつくられて賜はつたもののだが、窈子さん、これはあなたが持つて行つて下さい……。よくこの身の心をよく知つてゐて下さるあなたが——』あとはもう言へなかつた。

『……』

窈子は眼を裳の下袖で拭いた。

『あまり氣持がよくないかも知れないけれども……』

『そんなことがございますものか……。』窈子は慌て、打消して、『それでは頂戴して、いつまでも、いつまでも、このかくれ家の記念として思ひ出すやうに致します……。』

と言つて、そこに取出された蒔繪の硯箱を押戴くやうにした。すぐつゞけて、

『然し、あまりいろいろなことを思召さないやうに……。』

『もう大丈夫……。』悲しい氣分がいつか通り過ぎて行つたといふやうに、登子はいくらか晴れやかに、

『いくら考へたつて、しやうがないから……。何うせ、なるやうにしかならないのだから……。』

『さうですとも……。』

『どうせ、女子はかうなるものだから……。』

窈子は言ひたいことが山ほどあるけれども、言へばすぐ涙が出て来さうになるので——つとめてそれを抑へて別れをつけて來ることにした。

何うにもならないものに對する悲哀——何と言つてもそれは悲しいものであらねばならなかつた。死でなければ別離——そのわかれのつらさがひしと窈子の體に逼つて來た。

登子も多くを言はなかつた。窈子が立つて來ると、かの女もその妻戸の外まで送つて出て來た。雨は荒れ果てた池の上に殻紋をつくつて降り頻つてゐた。



『それでは……』

窈子は暇を告げた。

『健かで……』

『おん身も……』

いつまで惜しんでもとても惜しみきれない別れだ！と思つて、窈子は心を強くして向うに行つた。しかも何うしても振返らずにはゐられなくなつて、もう一度振返つた時には、白い顔を大理石像か何ぞのやうにやゝ薄暗い空氣の中に見せて、登子がじつとして此方を見送つて立つてゐるのを眼にした。

## 二六

吳葉が慌たゞしく入つて來た。それに由ると、内裏からの迎へが今來たらしいといふのであつた。ついで今そこから歸つて來たばかりなのに……。まだ一响くらゐしか経つてゐないのに……。窈子は慌てゝ古い藺笠をかぶつて吳葉のあとについて行つた。

雨の降りしきる中に、果してそこに内裏から來たらしい雨つゝみをした網代車が二輛——白い黒い斑牛も、笠をかぶつて雨具をしてゐる牛飼の男子もすべて深い泥塗にまみれて、その車臺すらも半ばは泥濘に汚されてゐるのを眼にした。一つの車は勅を受けて迎へに來た大官が乗つて來たらしかつた。

これでも雨さへ降らなかつたならば、いくら秘密にしておいても、何處からかそれをきゝつけて、あたりの人達がそれを見に少しはやつて來たであらうけれども、いかにしても路が泥濘になつてゐる上に、上からも片時も止む時なく雨が降りしきつてゐるので、そこにはその二輛の車が置かれてあるだけで、誰も人の姿は見えなかつた。窈子にはそれがさびしかつた。

かれ等は雨の中に立つてゐるわけにも行かず、さうかと言つてまたそこに近く寄つて行くのも出來ないので、對屋の階段からは十間ほど離れてゐる庇の下のところに身を寄せて、降しきる雨を纔かに凌ぎながら、じつとそつちの方に眼を注いでゐるのだつた。

吳葉はわくわくしながら、

『まア、ねえ……』

『何うしたの？』

『だつて、この降りに……、御氣の毒ですわねえ……』

で、かれ等は成るだけ高い庇から落ちて來る雨滴に裳をぬらさぬやうに、廊下の下のところに身を寄せて、奥から皆なの出て來るのを待つた。

窈子の頭には對屋の中の光景——流石に登子も驚いてゐるであらうと思はれるさまや、勅ゆえに拒むことが出來ずに裳を着改へたりしてゐるさまなどがはつきりと映つて見えた。(それにしても誰が勅使に



なつて来たのだらう？ 兼家でないのはわかつてるが、誰か身内のものが一人は来てゐるであらうと思ふが、誰だらう？ 内裏の侍女と誰が来たらう？ しかもこんなことを頭に描いてゐるのもさう大して長い間ではなかつた。ふと窈子は向うの廊下に五六人の人だちの氣勢のするのを耳にしたと思ふと、その階段のところ、兼家の腹ちがひの弟で、式部の副官をしてゐる政兼が勅使の衣冠をつけて、侍者二人に扈從されながら徐かにその姿をあらはして来るのを目にした。はつと心を躍らしてそれを見てゐると、内裏の藤壺に長い間つとめてゐるので名を知られてゐる桂といふ老女が、喪服でもあるかのやうに黒味が、つた裳をつけて、際立たしく眞白な端麗な顔をいくらか下向加減にしてゐる登子の手を取らぬばかりにして先に立つて階段の方へと歩いて来るのが見えた。

窈子も呉葉も唾の口にこもるやうな氣持で、じつとして一心に眼をそれに据ゑた。先に下りた衣冠に笏を持った政兼が廂の下に立つて上を仰いだ時には、その老侍女が一足下りて、そのあとから登子が續くのであつた。徐かに徐かにかれ等は階段を下りた。

登子はそこに來て初めてその眼を擧げて、縦縞を成して盛に降つてゐる雨とついその近くまで寄せて來てある二輛の網代車とを眺めた。一層白いその顔があたりに際立つて見られた。

こつちを見て下されば好い。かうしてお見送りに出てゐるこの身を見て下されば好い……。かう窈子が思つた時にその登子の眼が動いて、たしかにそれが此方を見た。否、見たばかりではなかつた。そ

れと知ると、一種言ふに言はれない感謝の表情をその顔にあらはして、瞬きもせずじつと窈子の方にその視線を注いだ。

しかしこの場合、何方からも聲をかけたなり別離を惜んだりすることは出来なかつた。たゞじつとさうして雨の夕暮の空氣の中に相對して立つてゐるだけだつた。成るべくその距離を近くさせるべく命令されて牛飼どもは頻りに鞭を鳴らしたり、綱を引いたりして努力したけれども、あたりは全く地が膿んで、ともすれば半分以上車の輪がはまり込みさうになるので、やむなくその人達はそこまで歩いて行かなければならなくなつた。

形ばかりに藁だの俵だの板だのが持つて來て敷かれた。しかも完全な雨具とても用意してないので、衣冠束帯の勅使と喪服を着たやうな登子とが長柄の傘を後からさしかけられただけで、あとは皆なびしよぬれになるのを何うすることも出来なかつた。勅使の副使をしてゐる同じく束帯の大官は、やむなく長い間その降りしきる雨の中に立ちつくしてゐた。

しかしさうした混雜もたゞ一時あたりに際立つて見ただけで——登子が老侍女に扶けられてそのほつそりとした姿を前の方にある車の内に入れて了ひ、勅使と副使とがそれをはつきりと見ただけで後の車に乗つて了ふと、あたりは車の齒の泥濘の中に深く喰ひ込んだのを牛飼どもが押ししたり動かしたりする光景だけになつて了つて、それも崩れた中門の方へ近づくにつれて、段々その動いて行き方が早くな



つて、たうとうあとにはその大きな轍の縦横につけられた上にザンザン降り頻る雨の佗しく暮れて行くのを見るばかりになつた。

窈子は何とも言はれないさびしい悲しい心持で、身動きもせず暫しそこに立つてゐるが、いつまでもさうしてゐられないので、そのまゝ階段の方へと歩いて來た。

『まア、何て悲しいことだらうね』

そこに行くと、窈子はわれを忘れたやうにべたりとその階段のところに腰を下して了つた。窈子は兩手をこめかみのところに當て、じつと深く考へ込んだ。暫く經つた。

『でも、此方を御覽になつたね……』

『えゝ……』

吳葉はかう言つて、『随分長いこと、此方を見ていらつしやいました……』

『せめてものなぐさめだね……』暫らくだまつて、『この人の世には、かういふ悲しいこともあるのだね!』

『本當でございますね』

話聲をきゝつけてそこに常葉が下りて來た。

『まア、何方かと存じたら、窈子さまでございましたか……』

『常葉どの……』

またたまらなく悲しくなつたといふやうにして窈子は顔に手を當てた。

吳葉は常葉に訊いた。

『今日、勅使が來るといふことがわかつて居りましたの?』

『いゝえ』

『では、だしぬけに……?』

『え、え、だしぬけでございますとも……それはいづれはさういふことになるだらうとは申してをりましたけれども、さう急なこととは存じて居りませんでした……。ですから姫もおどろかれて、一時は突伏したまゝ、お顔も上げられませぬでした……。それはそれは、泣くくらゐのことではございません。姫は何んなに悲しうあらせられたことか……。しかし、何と申しても勅でございますゆゑ……』

『まア、何と申したら好いのでございませうね』

『でも、平生やさしい上に雄々しいところもある姫のことでございますから、すぐ御決心あそばしまして、一响とたゝぬ中に十分御支度をなすつて御出立なさいました……』

『悲しい女子のさだめ!』

皆はそこに顔を合はせて泣くのだつた。あたりは次第に薄暮の空氣につゝまれて行つた。窈子と吳葉



とは、再び古びた藺笠をかぶつて、泥濘の中をとぼとぼと自分の家の方へと行つた。林に添つた路を通る時には、雨だれがばらばらとその笠の上に落ちた。

## 二七

兼家の方のことも心配にはなつたけれども、物忌が明けない中は、そつちの方へもどつて行くことも出来ないで、幼い道綱を相手に——むしろたゞそれにのみたよるやうにして窀子はわびしい雨の幾日かを過した。

《それでもまだこの身にはこのいとしい道綱がある……》窀子はさうした心持が此頃一層深くなつて来ることを感じた。否、そこに人生が微ながらも覗かれて来るやうな気がした。かの女はその心持の次第に深められて行くのををりをり翻つて考へて見たりなどした。昔は道綱などは可愛いには可愛いにしても——また誰かが来てそれを奪つて行かうとでもすれば極力それを拒いだには相違ないけれども、しかもその問題が直接にかの女につゞいて來てゐるのではないやうな気がしてゐた。かの女にはそれ以上にもつともつと大きなことが澤山に澤山にあるやうに思はれた。蹂躪された戀。異性に侮辱せられた戀。青春の徒らに過ぎ去つて行く悲しみ。玩弄品のやうに家にのみ閉ぢこめられていつの間にか老いて行かねばならぬ惨めさ。日毎に退屈に過ぎて行かねばならぬ忙しさ。ことに兼家の愛してゐる他の女に

對する嫉妬。火は幾度燃えて、またいく度消されて行つたか知れなかつた。そしてさういふ時には、道綱などのことを考へてゐるひまなどはないくらゐだつた。《何うしてお前のやうな不仕合せなものがこの世に生れて來たのか。このやうな母を持つたお前は何といふ不幸な星のもとに生れ出て來たのか》などとその柔かな頬にその身の頬を押しつけて涙を流したことも一度や二度ではなかつた。しかし、次第にその小さな道綱の存在がかの女に深い意味を感じさせるやうになつて來たのであつた。

何と言つても道綱だけがその身のものである。それだけは他のものが何うすることも出来ない。切つても切れない。離れようとしても離れられない。次第にそこにかの女は人生を感じて來た。

窀子は登子が内裏に入つて行くのを見送つて歸つて來て、ひしと道綱を抱き上げて、吃驚して逃げようとするのを無理に押へてきつく抱緊めたり口づけしたりしたことを思ひ起した。『まア、おとなにしてこゝにゐるよ……あこだけはこの母のものではないか。何時まで経つても、この身から離れて行かぬのはあこだけぢや……』かう口に出してまで言つて、母の膝から逃れようとする道綱を押へたことを思ひ起した。《まだそれでもこの身にはなぐさめられるものがある……それから思ふと、あの末の君は悲しい》こんなことをつゞけて言つたことを思ひ起した。

『母者、母者……』

などと言つて、道綱は遠くから走つて來て、その小さな體をかの女に投げつけるやうにしたりなどし



た。

『まア、この子は！ 何處に行つてゐたのか。この足は、この手は？ 吳葉や、拭くものを持つて来や……』

さうした窀子の聲がともすればその一室の中からきこえて来た。

それに、この頃は窀子はわるく咳などをした。あの時、雨の中に立つてゐたりしてそのための風邪でも引いたのだらうなどと初めは言つてゐたが、何うも思ふやうに治らぬので、忌みの中あまり出歩いたりしたので物の怪でもついたのではあるまいかといふ氣がして、いつもの僧を呼んで加持などをして貰つたりしたが、何うも本當には治らないので、その僧のすゝむるまゝに山寺にでも行つて見たら何うかといふことになつた。で、晴れ間を見て、京から北の方へ當る山合の寺へと窀子は出かけて行つた。

## 二八

兄の長能も一緒に出かけた。

それは京からずつと北山に入つて行くやうなところだつた。鞍馬とは谷を二つも三つも隔てゝゐる、入つて行く路も、標野あたりを眞直に山の翠微に向つて進んで行くやうなところだつた。祈禱などで驗のある名高い僧がかの唐の地からやつて来て、その寺に留つてゐるので、それで評判になつて皆ながそ

こに出かけて行くのだつた。

出て来る前、そのことを兼家の方に言つてやると、返事も呉れないので、いくらか氣になつてまた追かけて文箱を持たせてやつた。返事は来るには来たが、そこにはやさしいことも書いてなく、たゞ行つて来ることについての承認を與へてよこしたばかりだつた。かれの方にもいろいろなことがあるらしく、一族のあらそひにも氣を腐らせて、内裏にも出かけて行かないやうなことが多いらしいやうなことを使のものは匂はせた。窀子はそれをなぐさめたいにも、その周圍にはいろいろな女だちがゐる、素直にそれが實行出来ないことを悲しんだ。何でも此頃では、また南の坊の方へ行き出して、夜は殿の車がおそくまでその角に置かれてあるなどといふ噂を耳にした。

たゞ窀子に取つて喜ばしいことは、武隈の府から多賀の府へ轉任になつて行つて、今年で八年になる父親が來年は久々で京にもどつて來ることが出来るといふ報知を受取つたことだつた。『まア、父さんがもどつてゐらつしやる！』かう言つて家の人たちは皆な喜びの聲を擧げた。中でも長能の妻のかをるは、父親が任所に赴いた後に母だの伯父だのが相談して貰つたものなので、まだ見ぬ父親に對して一種のあくがれを持つてゐるので、一層なつかしさうに見えた。

『父さんがもどつて來ると、また家が賑かになる……。それにしても、父さんは何んなになられたことやら。今年歸るか、來年もどるか。一刻も早うもどらして貰ひたい。かういくら殿に頼んでも、さう



いふことはこの身にも自由にならぬとばかりで、何うにもならぬちやつたが、やつともどつて來らるゝか……。死なぬ中に逢はるゝがうれしい……」その消息を手にした夜には、母親はかう言つておちおち眠ることすら出來ないくらゐに喜んだ。

窀子にしても里の家が急に明るくなつたやうな氣がした。

標野から山に向つて入つて行く路は暑かつた。一方の車には窀子と道綱と吳葉、一方の車には長能とその妻のかをると母親とが乗つて、カタカタとわるい路を揺られながら行つた。ところどころにある大きな樗の木蔭には、この暑い原を越して行く人だちの牛車や絲毛車が澤山に休憩してゐるのを眼にした。

原を越して、これから山にかゝらうとするところには、冷たい清水がちよろちよるとわき出している、そこに近所の百姓の鼻がむしろなどを持ち出して、山で採れた木いちごや、しどめなどをそこに並べてゐた。皆なそこで車を下りて休むことにした。

かをるの方が窀子よりは年が二つ下なのだけれども、窀子はそれを『姉者、姉者』と呼んでゐた。

『姉者は肥えてゐるで、何うしても他よりも暑いぢやらうな?』

こんなことを窀子が言ふと、

『暑いにも、暑いにも……』かう軽くおどけた風にかをるは言つて、その細い笥からちよろちよると

落ちる清水を茶椀に受けて、それを道綱にも飲ませ自分にも飲んだ。

『つめたい?』

窀子は此方から訊いた。

『口もきるゝやう——』

窀子も立つてその笥の落ちる傍に行つた。

急いであとからついて行つた吳葉が茶椀に満たした水を窀子に出した。

『おゝこれはつめたい!』

皆ながかはるがはる口に當てて飲んだ。暑い原を通つて來た苦しさがそれでよほど除れたやうにお互にのんびりした氣持になつた。それにそこは已にいくらか高くなつてゐた。京の町がそれと手に取るやうに見えた。

『これでやつと涼しうなつた!』母親もいつもと違つて、父親の歸京の消息を得た喜びがあるので、いかにも心が伸々としたやうに言つた。

晝飯にはまだ少し早いけれども、これから先きには水のあるところはあつても休む設備の出來てゐるところはないと言ふので、持つて來た行厨をそのまゝ、そこで開くことにした。重ねた上の方の箱には、煮つけたものなどが入れられてあつて、下には今朝早くから起きて拵へた饅頭などが一杯に入れられて



あつた。

『ひとついかゞ……』

かゝるはそれを呉葉にまで持つて行つて取らせた。

『うまく出来ましたね、姉者……』

窈子は言つた。

『うまいどころではありませんでせうけども……。それでも、お中が減つては爲方がないから——』

『上手に出来てゐますよ』

窈子は饅頭を一つ手に取つてそれを道綱にやつたりした。

窈子にはかうした郊外の團欒がたまらなく楽しいやうな気がした。これを平生の京の生活と比べたなら？ 人が人と争ひ、心が心と争ひ、片時もその苦しさをやすめることが出来ないやうな生活と比べたやうな慎志と嫉妬の生活と比べたなら？ 大勢の妃を並べて、美しい裳を着せて、それに酒の相手させたところでそれが何んだらう？ また坊に行つて夜もすがら騒いであそび廻つたとて、それが何だらう？ やつぱりこの人生にもかういふ静かな楽しさがあるからそれで生きてゐられるのではないか。こんなことを考へながら、窈子はじつとして立つてゐた。

兄の長能は窈子の多情多恨な性質を知つてゐるので、傍に寄つて来て、

『何うかした？』

『いゝえ……』

『また、何か考へ出したのかと思つて……』

『いゝえ、たゞ、かうしてゐれば好いなアと思つたんです！……。かういふ生活もあるのに、何うして人間はあゝいふ争ひの生活をつゞけてゐるのかと思つたんです！……。かういふ山の中に住んでゐる人たちは、さばさばとして何んなに好いだらうと思つたんですの！』

『だつて爲方がない……。さういふ生活があるんだから——』

『だから、それを亡くさうといふんぢやないの……。亡くしたいだつて、それは私の力では出来ないことですからねえ。たゞ、かういふ楽しい、自然のまゝの生活もあるのだと思つただけなの……』

兄の長能は餘りに深く入りすぎて、また氣持でもわるくさせてはと思つてそのまゝ、口を噤んで了つた。

『ぢやそろそろ行かうかね……。もうこれからは山で涼しいから』

『さうませう』

かゝると呉葉とはそこらにあるものを片附けにかゝつた。



やがて皆なはてんでに自分の車に乗つて、またガタガタと山深く軋らせて行くのだつた。

二九

『だつて、お前、そんなことを考へたつて爲方がない……』

母親はつとめて窀子をなだめるやうに言つた。

『母者の言ふことはそれはよくわかるのよ。何うせ、人間はあきらめ——自分のことできへ自分で自由にならないのに、何うして他のことまで自分の思ふやうにすることが出来よう。それはよくわかつてゐる。しかし、さうだからと言つて、それを放つたらかして置くといふことは出来るでせうか。何うかしてそれをよくしたいと思ふから、それで苦しむのではないでせうか？』

『苦しむからいけないのぢや。苦しむことはない——』

『でも苦しまずにはゐられないのですもの……。あゝして道綱があそんでゐるのを見ても、すぐ苦しくなつて来るんですもの……』

『それがわるい癖ぢや……。それをやめねば、そちの病氣は治らぬと阿闍梨も言つたぢやないか？』

何も思はぬ。何んなこともつらいとは思はぬ。眼の前を通り過ぎる雲ぢやと思つてゐる。でなければ、魔が一しきりついたのぢやと思つて知らぬ顔をしてゐる……。さうでなければ治らぬと言つたぢやないか

——

『……』

だまつてうつむいた窀子の眼からは涙がはらはらと流れた。

『困つた人ぢやのう？』

『母者……』窀子はあることを急に思ひ出したやうに、『母者はあの前の大納言どののつれてゐる人を見て何う思はれた？』

『あの向うの坊の方でお目にかゝつた人かや？』窀子の點頭くを見て、『別に何うツていふことも思はせなかつたが？』

『此身は涙が出て、涙が出て……』

『何うしてぢや？』

『母者はあの女子のことをよう知らぬのかも知れない……』

『よう知りをる……美しいので名高い姫ぢやつた——』

『母者、この身はあの人があゝいふ病に取憑れたので、それで氣の毒だといふのではない……。それよりも、それよりも』急にたまらなくなつたやうに『あの、あの大納言どのが……』

『大納言どのが何うしたのや？』



『あの體の大きい、心の大きい、その愛してゐた女子のためには、あゝして職もやめ、つとめもやめて、この山の中までついて來てゐるのを見て……ウ、ウ……この身は、この身は——』  
涙が言葉を遮つた。

今度は母親がこまつて了つた。窀子の心がはつきりと飲み込めて來た。

暫くしてから、窀子はやつとその言葉をつぐといふやうに、『母者……母者にもそれがわからないことはなかつたと思ふ。あの大きな體、男らしい物の言ひ振、あれほどまでにして貰ふ仕合せな！ その病人の傍を片時も去らずに看護する男子……。さういふ男子もあるんだから……。それを考へると、この身は悲しい。この身は悲しい。この身は涙が出て涙が出て……』

『ようわかつた……。しかし、さう一概に男のことをきめて言ふのはわりい。それはあの大納言どののやつてゐられることは尊い。それはわるいと言はぬ。この身も涙を催うした……。しかし、他の男の子がさうしないからと言つて、それをわるう言ふのは、あまりに物事をきめすぎてゐていけない……。この世の中といふものはさういふものではない。』

『それはさうでせうけれども……あゝされる女子は仕合せだ……。』

それに比べたら、この身などは何うだと窀子は言ふのだつた。一度だつて見舞にも來て呉れたことはない、行くなら行くで放つて置く、そして自分は勝手に振舞つてゐる……。それはまア好いとしても、

さういふ男の子にさういふことを望むは望む方がまちがつてゐるのかも知れぬから、それは好いにして、も、それでは此身が可哀相ではないか。何一つつかんだもののないこの身が悲しいではないか。

『ようわかつた、ようわかつた』

逆らつてはかへつていけぬと思つたので、母親はつとめて窀子の氣を迎へるやうにして言つて、

『その中には好いこともある……。さうわるいことばかりあるものではない……。道綱だつて、さういつまでも子供ではゐるない。來々年に殿上することの出来る年ぢや……』

『そんなこと、あてになるものですか？ 道綱のことなんか、少しでも考へてゐるんではないから……』

『そんなことはない、それは決してそんなことはない。それは安心しておいで！ 殿だつて、そんなに人情のない方ではないのだから……』

母親が強く壓しつけるやうに言つた。

窀子にはしかしそれだけでは物足らなかつた。かの女は一つの戀愛と言つたやうなものにあぐがれた。二つの心がひとつになつてそれが何ものにも動かされないやうになる戀！ 何ものに打突つても決して決して打壊されない戀！ 金剛不壞な戀！ 十年逢はなくつても一生逢はなくつてもかはらない戀！ さうしたものをかの女は常に眼の前に描いた。手を合せる佛の體の中にもそのまことの戀がかく



されてあるやうな気がした。

## 三〇

兄の長能の言つた言葉を窈子は思ひ起した。

——』だつて、それは無理だ。殿はさういふ質の人ぢやないんだもの……。殿はそんなことを女子に望んでるはしないんだもの。殿に取つては、女子は尊いものではないんだもの……。それはおもちやだとは思つてはゐるない。さういふ風に一段低くは見てはゐるない。更に言ひ換へれば、女子は生活を面白くして呉れるものだからに思つてゐる。だから、とてもお前の言ふやうなわけには行かない。さうかと言つて、それが薄情とか何とかいふのではない。殿だつてつまらなく女を傍によせつけてばかりはゐるない……。あれでひとりですまらなさうな顔をしてゐることもあるんです……。しかし、かういふ氣はあゝるな。窈子の考へ方と殿の考へ方は正反對で、とてもそれはひとつにはならない……。それが運がわりいといへばわりいのだらうが、たとへそれがひとつになつても、運が好いかわりいかわからない……。こいつは何うも一概には言へないな——昨夜話してゐる中にこんな言葉が雜つてゐた。母親と兄の長能とかをると窈子と、この四人がおそくまで結燈臺を取巻いて四方山の話をした。中宮のことも出れば登子のことも出た。大納言が昔ひどい遊蕩者であつたことなども出た。長能が此頃びたりと女のあそび

をやめたことになつて行つた時には、『いや、それはかゝるがえらいんぢやない……。世間ではさう言つてゐるにしても、それはさうでない。世間なんて表面きり見ないものだが……。つまり一言で言へば女がおもしろくなつたんだよ……。いつまでやつてゐたつて、ひとつだつて本當につかめやしないし、實際がないといふ風に何處かで考へはじめたんだよ。何處かで？ 本當に何處かでだよ。自分でもはつきりそこが言へないんだよ。そこにうまくかゝるがぶつつかつたんだ——そこが運が好いと言へば好いんだ……。』などと言つて笑つた。そしてそれからそのつぎつぎへと殿や窈子のことなどが出て行つたのだつた。殿などでもいつまでもあゝしてゐるゝものではない……。もう好い加減飽きてをられる。こんなことをも長能は言つた。窈子はさうした言葉を頭にくり返しながら、寺の塔のあるところから谷川の見える方へと行つた。そこらには坊が二つも三つもつゝいて、その一つは崖の上から谷を見下ろすやうな位置にあつた。

谷川の瀬の鳴る音が下の方できこえた。

かの女はもはや三十に近くなつてゐるたけれども、その美しさは少しも衰へず、別におつくりをしなくとも、あたりの眼を惹くに十分だつた。かの女はあちこちから此方を見てゐる眼に出會した。

それに誰が話すともなく、東三條殿のおもひものだといふことが參籠に来てゐる人だちの間にもそれと知られてゐるらしく、時々そのうしろの方で、さう言つて囁いてゐる氣勢を聞いた。



殿上人ではないがちよつとしたことから懇意になつたある若い妻は、かの女が歌道に名高い人であることを知つて、かういふ時でなければ教へを乞ふことが出来ないといふやうに、ちよいちよいその坊をたづねて來た。それは名を梅尾と言つてゐた。

ひよいと氣が附くと、その向うのところに、その梅尾が、藏人頭の下にでもつかはれてゐるやうな、若い、意氣な、縹色の柔かな烏帽子を頭に載せた男と睦しさに竝んで話しながら歩いてゐるのを目にして『おや!』と窈子は思つた。

餘程背後から聲をかけようとしたが、きまりをわるがるだらうと思ひ返して、わざとゆるくと靜かに歩いた。

かれ等は何う見てもたゞの関係ではなかつた。

またその梅尾の歌にも、さう言へば、遠くにあるものに心を寄せたやうな歌を見たことが度々あつた。窈子は微笑まれるやうな心持がしながら、その二つの姿から眼を離さなかつた。

大抵なら、長い間には、そこらにちよつと立留るとか、うしろを振り返るとか、横顔を見せるとかするものであつたが、餘程深く話し込んでゐると見えて、足の歩調をゆるめるでもなく、周圍を見廻すでもなく、ひたりと體を押しつけるやうにして、熱心に話しながらたゞ先へ先へと歩いて行つた。少くともさうした形で、三町ぐらゐは行つた。

しまひには此方で勞れた。窈子は路の傍にある榻に身を寄せて、そんなものいつまで心を寄せてゐても爲方がないといふやうに、今度は下に展けられた溪の流の方へと眼をやつた。そこには石がごろごろころがつて、水がその間をすさまじく碎けて流れてゐた。

かれ等はそんなことも知らずに——何處まで行つたらその熱心な物語は盡きるだらうといふやうに、やつぱり同じ歩調で肩を並べて歩いて行つた。その二つの姿はやがて向うの草むらの中へとかくれて行つて了つた。

何のくらゐるるか、小半响くらゐるるか、それとも半响くらゐるるか、自分でも自分がわからずに、草むらに日影のチラチラするのと水のたぎつて落ちて來ると、黒い斑のある蝶が向うに行つたかと思ふとまた此方へと飛んで來て、そのすぐ前の草の葉にその羽を休めようとしてゐるのをちよつと見てゐたが、ふと氣が附くと、さつきと同じ歩調の足音がして、やつぱり竝んで、今度は此方に向けて、ふたりが靜かに歩いて來るのを窈子は見た。

向うでそれと氣のついたのは、ずつと此方へ來てからであつた。

梅尾は立留つた。その顔は染めたやうに赤くなつた。

『まア……』

『……………』窈子も流石に氣の毒で、此際何と言つて好いかわからなかつた。



梅尾は一言か二言言つただけで、男を向うに行かせて、そのまゝ此方へとやつて来た。

『好いの？』

『え、え、……もう好いんですの……何でもないんですの……』

『私の方は構はなくつても好いのよ。』

『いゝえ。』

梅尾はまた顔を赤くした。

『從兄が来たもんですから——』

『從兄？』

人がわるいと思つたが窈子は思はずかう言つて了つた。

『……』

『さう言つてはいけないけど……わたしさつきからあなたたちの歩いてるたのを知つてるたのよ』

『まア……』

梅尾は聲を立てた。

『あの塔の下のところ、ひよつと見ると、あなたなんぞ。それから餘程聲をかけようかと思つたんだけど、何だか……』

言ひかけて窈子は半分言葉を引き込めて了つた。

『まア、聲をかけて下されば好かつたのに——』

『でも……』

窈子は笑つた。

『だつて、私、困つて了つたんですの……。聲をかけて下されば好かつた——』

『そんなに申しわけをしなくつても好うございますよ』

『まア』

しかも窈子は別にそれより深く立入つてその話をきくでもなかつた。むしろ立入つてその話をきくことを恐れた。かれ等は靜かに踵をあとにめぐらした。

三一

谷に凭つた座光坊には窈子はよくその庭の方から入つて行つた。そこにはかの女は母親とも行けば兄の長能とも行つた。道綱と吳葉と三人して行つたことなどもあつた。

『あの老僧は高德の方だけあつて、ひとり手に頭がさがるが——あの今のあるじの僧も氣が置けなくつて好い。この深い山の奥で幼いころを過したやうな人だけに、何處か並でないところがござるな』



こんなことを母親も長能も言つた。吳葉も、『好い法師さんですこと……。それに男前が好い!』かう言つたが、あとの一句は自分でもあまり言ひ過ぎたと言ふやうにソツと舌を出した。

『まア、あきれた……』

『だつて、さうですもの、好い法師さんですもの……』

『だつて舌を出さなくつたつて好いぢやないの?』

『御免なさい!』

吳葉は自分のはしたなさを悔るるやうにして言つた。

『この山で幼い時をすごし、それから横川で行をなすつて、高野にも室生にも行つて、密教の方も十分になすつた方だからねえ……。このお山でもめづらしい法師さんだ——』宛子に取つても、異性がさういふ風に童貞をすつと守つて、一心に佛に奉仕してゐる形が、端麗な姿をしてゐるだけ、一層傷ましいやうな尊いやうな心持を誘ふのだつた。『あれで、あゝいふ風にして一生清く行ひすまして行かれるのかねえ!』時には宛子はこんなことを吳葉に言つたりした。

ある日は道綱と二人で行つて、小半日もその坊で過した。あるじの方の僧は、却つてそれを名譽にして、何彼と道綱の機嫌を取つて、羊羹を高坏に載せて出したり、葛を溶いた湯を出したりして歡待した。無論それは東三條殿の愛兒であるといふ點もあるのだが、當代で評判な美しい女の歌人を歡迎する

意味もあつたのだつた。

『我々もたまには歌にして見たいといふ考も起るのですが、こればかりは別才だと見えまして、何うもうまい具合にまとまりません……』

『いゝえ、そんなことは——?』

『お上手な方がおつくりになりますと、それがすらすらと單純に出る。ちつともこたはりなしに——。何うもそれが眞似が出来ません。我々のやうな鈍根なものには何うも材料ばかりが多くなりまして、何を言つた歌だかわからなくなりますので……』

『いゝえ……』

『さうかと申して、それぢや材料が多すぎるのだからいけないのだからと思つて、今度はひとつのこをよまうとすると、それが短かすぎて歌にならない……。何業でも皆なさうでござるが、中でも歌はむづかしい……』

こつちから般若心經の中心になつてゐる心持をきかうなどと思つて出かけて行くと、その先を越して、向うから歌の話を持ち出すといふ風なので、宛子は一層その僧に親しさを感じずにはゐられなかつた。時にさうして清くひとり住んでゐる僧の上にそれに似た自分の生活を持つて行つてくつつけて、いろいろと深い感慨に耽ることもあつた。



『私などにはとても深いことはわかりませんが……それでも歌の心持を押しつめて参れば、やはり佛に近づく心が致しますので……』

ある日は窈子はこんなことをそのあるじの僧に言つたりなどした。

それにしても世の中といふものは不思議なものだ——窈子はその坊から下りて来る石段を一步々拾ひながらこんなことを常に考へるのだつた。あゝいふ清らかな端麗な異性もある。さうかと思ふと殿のやうに女を女と思はず自分さへ歡樂を恣にすればそれで好いと思つてゐる人もある。情の赴くまゝにまかせてしたい三昧のことをしてゐる人だちもある。未來のことなどは少しも思はず、人の夫であらうが、人の妻であらうが、そんなことには頓着せず、たゞ愛慾にのみ耽つてゐる人だちもある。何が何だかわからない。さういふのが罪なのか、それともさういふ風に考へるだけでも罪なのか。この尊いお山に参籠してゐる人だちの中にも、こゝを歡樂の庭のやうに心得てゐるものさへある。あの梅尾などにしてもそのひとりではないか。そしてそれが罪になるのか、それともならないのか。さういふことをするの人間心の持前で、何うにもならないのか。自分ながら自分のことがわからなくなつてむしろ自分が可哀相になつて——窈子はじつとそこに立盡したりなどした。

## 三三

窈子の参籠してゐる室から、すぐ眼の前に山の裾が落ちて來てゐて、下では何方かと言へば靜かな、せゝらぎのやうな水の音が微かにきこえてゐた。

杜鵑がキヨ、キヨ、キヨとすぐ前を啼いて通つた。

來た時に咲いてゐた卯の花の白いのもう見えなくなつて、水ぎはに名の知れない紫の細かい花などが咲き出した。此頃窈子はその若いあるじの僧のことを考へてゐることが著しく多くなつたの自分を不思議に微笑まるゝやうな心持でじつと見守るのだつた。本を展げてゐる時にもいつとなくかの女はその僧のことを考へてゐるのに氣が附いた。

## 三三

唐の僧の祈禱の席にも窈子はたびたび出かけた。かの女はそこにも大勢の参籠者がさまさまの願望を抱いて手を合せてゐるのを目にした。子に對する苦しみ。子の病に對する苦しみ。妻の夫に對するもだえ。夫の妻に對する悲しみ。さういふ苦みやらもだえやらを持つた人だちは皆なそこに來て坐つた。位記や官名を持つた人だちのためには、別に設けられた席などもあつて、あの肥つた大納言夫妻の姿も常にそこに見られた。

窈子もいつもそこに案内されるのだが、かの女はその姿の人の目に立つことを嫌つて、わざとあまり



派手々しくない裳を着て、大勢の群の中に雜つてその祈禱の讀經を聞くやうにした。その唐の僧といふのは、昔の鐵眞和尚を思はせるやうな半ば眼の盲いた高德で、背もさう高い方ではないが、その態度にもその舉動にも何處となく立派なすぐれたところがあつて、それが五六人の僧たちと一緒に入つて來ると、誰も頭を下けて佛の名號を唱へないものはなかつた。何でも世間の噂では、その高僧の一つの祈禱は人間のあらゆる苦痛を和らけ、あらゆる病を醫やし、あらゆる煩悶を軽くするといふことに於いて他に比ぶべきものがないといふほどの功德を持つてゐるといふことだつた。窈子は少くとも毎日一晌以上小さな珠數をつまさぐりながらじつとしてその光景と相對した。讀經——何とも言はれない冴えて澄んだ聲。長く引張るやうに末は磬のやうに御堂の高い天井にひびいてきえて行く聲。ひとりの僧の時に觸れ折にふれて鳴らすけた、ましい鉦の響。ことに、その高德の聖のひとり高く張り上げる聲は高くあたりに、窈子の心の底までもじつと深く染み入るやうにきこえた。

ある日、座光坊のあるじの僧とかの女との間にこんな話が出た。

『あのしまひのところが、密教の行ひと申すのでございませうか？』

『さやうでございませう……。あのしまひの方で磬を鳴らすところがござりませう。あそこがあの祈禱の眼目になつてゐるのです……』

『本當に、あそこは難有い心持が致しますの……。やはり、あゝいふところになりますと、心はずつ

と靜まつて、いろいろな煩惱は皆な小さな、小さなもののやうになつて了ひます……』

『今度の高德は密教には中々深く通じて居られますから、信用してあの行を見ることが出来るやうな氣が致します……。さうです、高野の眞言とはいくらか違つてゐるやうです。もつと天臺の智者大師のひろめられたものの方に近いやうでございませう……。ですから、密教と申しても餘程初期の感じがまだ残つてゐるやうでございませう……。そこが尊い……。そこが他の御堂では味はれないところだと思ひます……。』あるじの僧はこんなことを言つて、靜かな調子で、にこやかに笑ひながら、かなり深く難かしいところまで密教の話を持つて行つた。

窈子は益々そつちへと引かれて行くやうな氣がした。自分たちの生活とこの靜かな生活と。瞋恚と煩悶と嫉妬と争鬪とで満たされた生活とこの高遠な普通ではわからない學問にのみ精進してゐる生活と。一つは火花を散らしたやうでもすぐ消えてなくなつて了ふ生活と、一つはいつまでもいつまでも人の心に深い教へを残して行く生活と……。窈子は自分等の平生目にしてゐる殿上人あたりの自墮落な生活をかうした靜かな學問にのみ精進して來た人たちの生活に比較して考へずにはゐられなかつた。

かういふ人たちは世間のことなどについては何も知らないものであつた。男女のことも、妻妾のことも、三つの心の巴渦のことも、御門が愛慾におぼれて末の君を無理に宮中に召されたことも、坊の町の細い巷路に結び燈臺が夜おそくまでついでついでその角に牛車が待つてゐることも何も彼も……。そして



たゞ谷川の水の音を伴侶に深い高遠な學問にのみ心を注いでゐるのだつた。それが窈子には尊く感じられた。窈子はそのあるじの僧から法華經の一番中心を成してゐる思想を聞いたりなどした。

『さうしますと、何ういふことになるのでございませうか？』

と、その僧はにこやかに笑つて、さて少し考へるやうにして、

『歌で申して見ますと、つまりそのひとり手に巧まずに出て來るといふ心持——そこいらに歌は満ちてゐますけれども、それをつかまうとすると、つかむことが出來ない……何うしても出來ない。學べば學ぶほどむづかしくなる。それでゐながら、ひとり手に出て來る段になると、何の面倒もなくすぐそこにある……。あなたがいつか歌といふものについてさうおつしやられた……。法華經の中心を成してゐるものはやはりそれだと思ひます……』

『つまり、さうしますと、その高遠な思想が何處にでもあるといふことになるのでございませうか？』

『さうなります……。何處にでもある。それだから難有いのでございませう。たゞ一心といふこと——ひとつの心を持つるといふこと、さう言つて了つては或ひは言ひすぎるかも知れませんが、つまり他には何も無い。その經文を持してゐるさへすれば好い。それより他に理窟はない。さういふところに非常に深いところがあるのでございませう……あらゆる經文が皆なそこに入つてゐるのでございませう——』

『さうしますと、あのお經に書いある字とか、理由とか、方則とか、さういふことよりもつと別な

ところにその中心がございませうのですね』

『まア、さうですな……』

聰明な窈子にもそれだけではまだはつきりとはわからないらしかつた。『その一心といふこと、その一心を持つるといふこと——それと佛とは何ういふ關係になりますのでせうか？』などと訊ねた。

一月もゐる中には、その僧と窈子との交際は次第に親しさの度を増して行つた。窈子は一日でもそこに行かなければさびしいやうな氣がした。その癖、それが何うの彼うのといふのではなかつた。かの女はをりをり望まれてそこで短冊に歌を書いたりした。ある時には、御堂に行く途中、向うから緋の僧衣を着た僧が二三人やつて來るのに出會つて、初めはさうだとは思ひもしなかつたのに、そのひとりがそのあるじの僧であるのをやがて知つて、急にきまりがわるく、顔がわれながら不思議に思はれるくらゐにサツと染められたことなどもあつた。母親と一緒に行つた時には、いつもの佛の話とは違つて、自分が叡山に登つて修行した時のことや、奈良の唐招提寺に律を研究に一年ほど行つてゐた時の話などをかればそこに持ち出した。『奈良の寺は方則がきびしいので一番つらうございませう。朝は寅の刻に起きて、坐禪をやつたり、讀經をしたり、その間には、教義の議論をしたり、ほとほとひまといふひまはないのですから……。それは皆さんは、私どもなどはのんきに暮してゐるとお考へでせうが、中々これ忙しいのでございませう……。』などと笑ひながら話した。



ある時、吳葉と二人でゐると、

『京の方がこひしくおなりにまだなりませんか？』

『何うして？』

『何うしてッて言ふこともございませんけども……』

吳葉はいくらか笑を含んだやうな表情だつた。

『でも、今月一杯ゐるつもりで来たんだもの……』

『それはさうでございませうけども……家のことだつて心配になりますから……』

『大丈夫だよ』

『でも、殿のことでも、あまり放つてお置きになつては？』

『だつて……』

吳葉の心配する心持がよくわかつてゐるので、窈子は言ひかけてよした。

『この頃、お消息がちつともございませう？——』

『ゐなくつて、うるさくなくつて好いと思つてゐるのよ』

『まさか——』

吳葉は笑つて見せた。

『さうでなけりや——少しでも此方を思つて呉れるのなら、何とか消息くらゐよこしてくれだつて好いんだもの……』

『でも、こちらからおあけになる方が本當ですもの……』

『……』窈子はこれに對して何か言はうとして、よして、『それよりも、お前、もうあきた？』

『かゝるさまやお兄さまは、もうとうに歸りたいやうに仰しやつてでございました……』

『さう……』

窈子は別にこゝに思ひを残してゐるわけではなかつた。あるじの僧のことにしても、逢つたり話したりしてゐることの上には多少の興味を感じてゐるけれども、さうかと言つて、こゝに深く心を留めてゐるわけでも何でもなかつた。たとへそれがもつと深く、此方からも心を寄せ、向うからも進んで出て来たにしても、それは何うにもなる間柄ではなく、やつぱり山を出た雲は山に歸り、流れ落ちる谷川は里に向つて出て行かなければならないのだつた。窈子は自分の身の何うにもならないことを今更のやうに感じた。

かゝるがそこにやつて来た。百合の花を三本も四本も手に持つてゐた。

『まア、好い花！ 何處で採つて來ましたの』

『ぢき向うの山——』



かゝるは振返つて指した。

『よく、こんなのがありましたね……。まだあるなら、私、採りに行かうかしら？』

『まだ、あるにはありますけども……。女の手ではちよつとむりかも知れませんがね。長能が取つて呉れたんですの……』

『まア、兄さんが？』

窈子は羨しさうに。

『この下の谷でございますか？』

吳葉は問うた。

『この谷をすつと下まで下りて行つたところです……。とても、私には行けないといふのを無理に伴れて行つたのです……。石なんかいくつもわたくしで行くんですもの……。私、始めの中は、ついで行きましたけれども、しまひには行けなくなつて了つたんです……。何故ツて、蛇さんが澤山ゐるなんておどかすんですもの……。やつとのことで、手を曳いて行つて貰つたりして、この大きい方のあるところまで行つたんです……』

『まアね』

『それから、あとはみんな長能が探つてくれたんです……。男でなくつては何うしてもだめね……』

『まア、私も兄さんに伴れて行つて貰はうかしら？』

窈子はいかにも羨しさうにその白い百合の花を眺めた。

『それをさし上げませう？ それでは——』

『いただいたのではまだ足りないですよ。やつぱり男の人につれて行つて貰つて、女ではとゞかないところにあるものを探つて来ればこそ羨しいんですよ。ねえ、吳葉、さうは思はない？』

『お仲が好いですからね』

吳葉も笑つて見せた。

『また、あんなことを……。仲が好いなんて……。そんなことちつともないわ。私、無理やり伴れて行かれたんですもの……。あそこ、少し行くと、ひどいところがあるんです。石につかまつて行かなくつちやならないやうな……。私、それから先きには何うしても行けないからツて言つたんです……。私、待つてるつもりだつたの……。ところが、何うしても向う岸にわたれツて言ふんでせう。私、此方にあると、向うは先にわたつて、その石から私の手を引張るツていふ騒ぎなんですもの……。容易にはあそこには行かれやしませんよ』

『だから羨しいツていふんですよ』

そこに兄の長能がやつて来て、その谷にはまだそれよりも美しい百合がいくらかもあるといふ話しをし